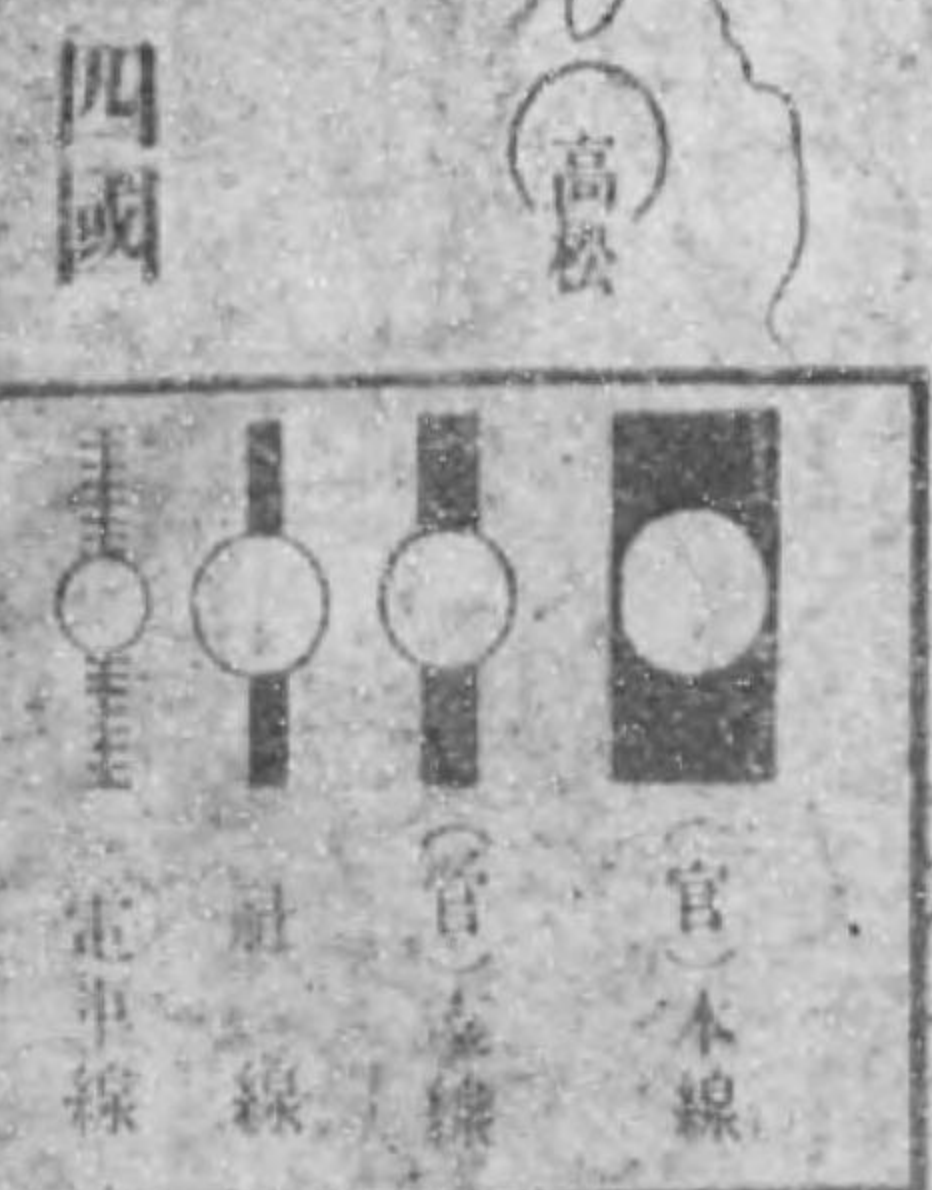
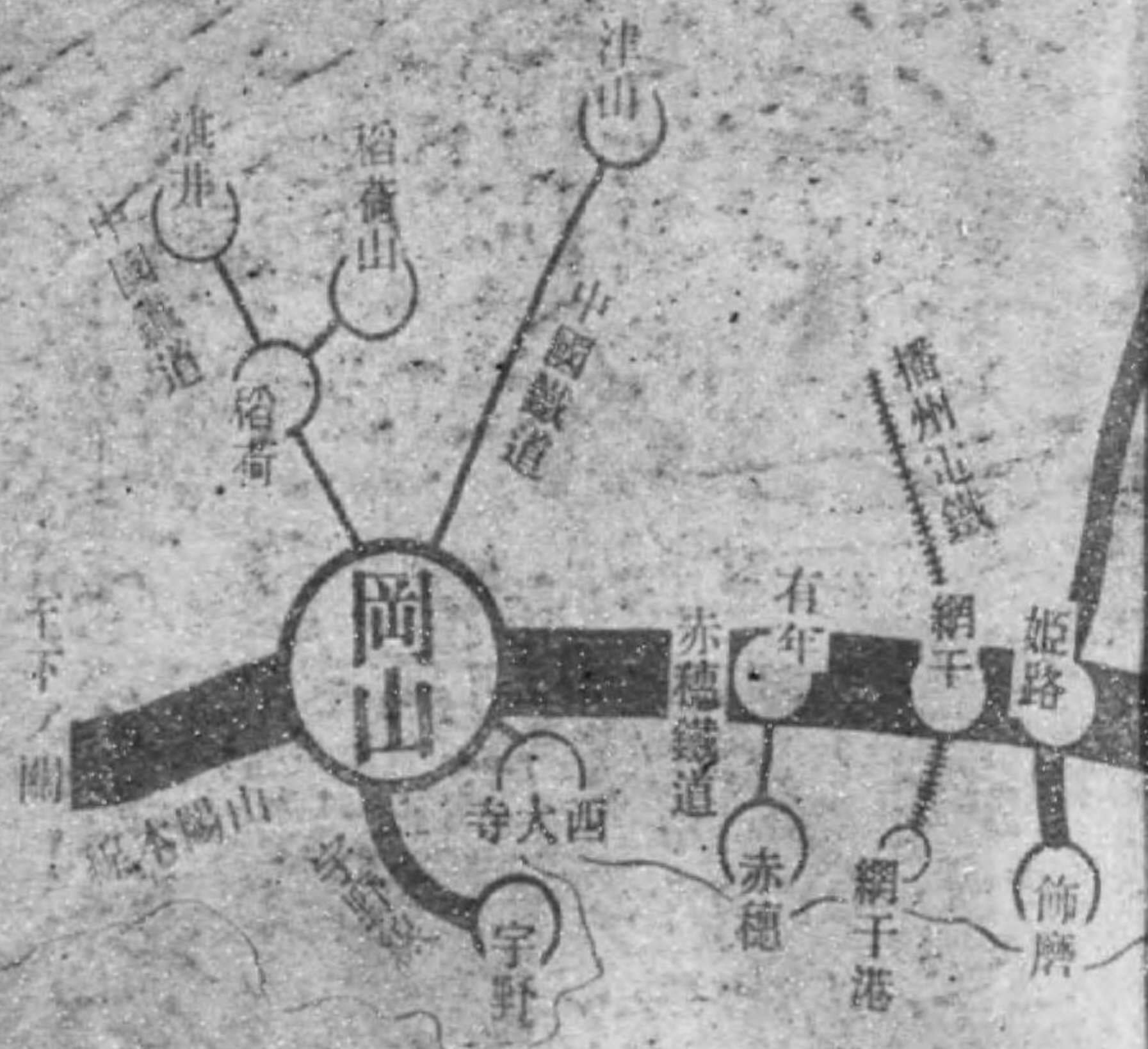


514
114

9 1 2 3 4 5 6 7 8 9 ¹⁹/₁₀ 1 2 3 4 5

始





部西圖概通交畿近



浦ノ歌和主

574-114



高女七中往通

近畿遊藝社著

著社賢遊藝近

大正

12

内交

距離メートル換算表

注意 一・三位以下は見索
の便宜上之を四捨五入した

メートル制	哩・呎・吋	町・間 尺
1ミリメートル(耗)	0.039吋	3厘3毛
1センチメートル(糶)	0.394吋	3分3厘
1デシメートル(粉)	0.328呎	3寸3分
1メートル(米)	3.280呎	3尺3分
1キロメートル(軒)	0.6214哩	9町10間

米 = 町	米 = 哩
109.1米	1町
218.2米	2町
327.3米	3町
436.4米	4町
545.5米	5町
654.6米	6町
763.7米	7町
872.8米	8町
981.9米	9町
1.09 軒	10町
2.18 軒	20町
3.27 軒	30町
4.36 軒	1里
5.45 軒	1里半
6.54 軒	2里
7.63 軒	2里半
8.72 軒	3里
9.81 軒	3里半
10.9 軒	4里
11.99 軒	4里半
13.08 軒	5里

凡 例

- 【一】 本書は京阪神間の地からする、暢氣な、氣散じの「日かへり」【二】「泊」の旅を主眼とするものである、こいつても本書に修めたる旅の案内は京阪神間所在の人にのみ限る譯ではない、他國の人々でも京阪神の地に遊んだ序の遊覽にも役立つ、本文は驛中心であるから何れの地からするも自由である。
- 【三】 名所舊蹟の記述は、其位置を知る關係やら、二三箇所の遊覽や不圖した通りすがりにも役立つ様に驛及停留所を中心として説いて置いた。又名所を順々に經めぐる即ち「日かへり」の旅を計畫する人の爲めに「遊覽の葉」を附してそれが便りにした。
- 【四】 遊覽の葉、此項は「出發」に記した驛及停留所から、順次記載の名所舊蹟を經めぐつて、最後の「歸路」に記したる驛から乗車し歸途に附けばよいのである。名所や驛名の下に附した數字は本文の頁數を示すもので、其頁を開くに名所の詳しきことが判る。又旅行半で旅程を變更する場合は、今自分が居る名所を本文から求めて最寄の線に依ればよい。旅行者は尙精確を期する爲めに陸地測量部編纂の地圖が

信用ある地図を購入すべきである。

【四】 遊覧の葉には日かへりのみの計畫で、泊りがけはしないから泊りがけの旅をする人は、各驛停留所の下に擧げて置いた「哩數及凡その到着時間」に依つて計畫すべきである。

【三】 年中行事四季の行樂、此項は一月から十二月迄の、名高い行事や梅櫻楓といった様な季節に適した名所勝地を知るために編んだものである。

【六】 五十音索引、名所舊蹟を總て五十音に配列したもので、名所が何處にあるか全然知らない人にでも直ぐに見出せる便りに附したものである。

【七】 列車及電車の時刻表と賃金を別に印刷して附録とした。從來の書は、汽車賃、宿泊料、車代も尤もらしく記載してゐるが、古くなるに皆その効果がなくなるし、旅行者を誤らす憂ひがあるから宿泊料、車代等は省き、汽車の時刻及賃金表も改正するまでの使用に思つて附録したものである。汽車の賃金表は各線の賃金表で、連絡の賃金は記載してないから、他線に亘つた旅をする人は各線の表で加算して貰ひたい、連絡切符は必ずそれよりも安い譯だから大丈夫である。

目 次

□ はしがき…………… 一

□ 大阪の見物…………… 三

梅田、北野方面…………… 七

中の島、北濱方面…………… 一〇

天満、長柄方面…………… 一六

大阪城、船場方面…………… 一三

心齋橋、道頓堀 高津方面…………… 一八

玉造、上本町方面…………… 二五

天王寺、新世界方面…………… 二九

今宮、難波方面…………… 三三

堀江、新町、松島方面…………… 三八

九條、築港、江の子島方面…………… 四二

中の島(中央)、堂島方面…………… 四四

□ 京都の見物…………… 五五

本願寺、東寺、二條方面…………… 五九

北野天神、金閣寺、大徳寺方面…………… 六六

六角堂、新京極方面…………… 七五

御所附近、下鴨方面…………… 八二

卅三間堂、大佛、西大谷方面…………… 八六

清水寺、圓山方面…………… 九三

祇園、粟田口、南禪寺方面…………… 一〇三

岡崎、銀閣寺、黒谷方面…………… 一〇九

三條大橋、建仁寺、六波羅方面…………… 一一八

比叡山、大原方面…………… 一二五

鞍馬方面.....二三五

□東海道本線.....一九九

神戶市.....二四〇—二五〇

神戶 驛||大阪 驛.....二五〇—二五三

大阪 驛||京都 驛.....二五二—二六八

京都 驛||米原 驛.....二六八—二〇八

米原 驛||大垣 驛.....二〇八—二六六

大垣 驛||名古屋 驛.....二六六—二三五

名古屋 市.....二三五—二四〇

□江若鐵道.....一七四

□湖南鐵道.....一九三

□近江鐵道.....二〇三

□養老鐵道.....二二七

大垣 驛||桑名 驛.....二二七—二三三

大垣 驛||揖斐 驛.....二三三—二三八

□山陽本線.....二四五

神戶 驛||姫路 驛.....二四五—二六六

姫路 驛||岡山 驛.....二六六—二七二

岡山 市.....二七二—二七二

□山陰本線.....二七二

京都 驛||嵯峨 驛.....二七二—二七九

嵯峨 驛||園部 驛.....二七九—二八四

□福知山線.....二八五

有馬輕便線.....二九一—二九五

□關西本線.....二九六

湊町 驛||王寺 驛.....二九六—三〇二

王寺 驛||奈良 驛.....三〇二—三〇二

奈良 市.....三一—三四

木津 驛||伊賀上野 驛.....三四—三五

伊賀上野 驛||龜山 驛.....三五—三六

□草津線.....三三八

□和歌山線.....三四四

王寺 驛||吉野口 驛.....三四四—三五〇

吉野口 驛||和歌山市 驛.....三五八—三六五

□吉野鐵道.....三五〇

□櫻井線.....三六六

奈良 驛||櫻井 驛.....三六六—三七〇

櫻井 驛||王寺 驛.....三七〇—三八三

□初瀬軌道.....三七五

□奈良線.....三八四

□片町線.....三九〇

□京阪電車.....三九九

天滿 橋||枚方.....三九九—四〇三

枚方||中書島.....四〇三—四一三

中書島||京都.....四一三—四二〇

中書島||宇治(宇治線).....四二〇—四三〇

□大軌電車.....四四一

上本町||生駒.....四四一—四五二

生駒茶良……………四五一—四五九
西大寺榎原宮前(欽傍線)……………四九九—四六五
天理、法隆寺線……………四六四

□南海電車(本線、阪堺線、上町線)……………四六七

難波住吉……………四六八—四七一

住吉濱寺……………四七一—四八〇

濱寺佐野……………四八〇—四八六

佐野和歌山市……………四八六—四九五

淡路洲本町……………四九二—四九三

和歌山市……………四九六—五〇〇

和歌の浦方面……………五〇〇—五〇五

□(南海)高野線……………五一二

汐見橋長野……………五一二—五一五

長野橋本……………五二五—五三四

□加太鐵道……………五〇七

□山東鐵道……………五一〇

□阪神電車……………五三一

梅田西の宮……………五三二—五三八

西の宮神戶……………五三八—五四一

□阪神急行電車……………五四一

梅田石橋(寶塚本線)……………五四二—五四五

石橋箕面(箕面線)……………五四六—五四九

石橋寶塚……………五五二—五五七

十神三神戶(神戸本線)……………五五八—五六三

伊丹線……………五六〇

西の宮寶塚(西寶線)……………五六〇—五六一

□兵庫電車……………五六六

兵庫庫須磨……………五六六—五六八

須磨明石……………五六八—五八二

淡路岩屋……………五八二—五八三

□北大阪電車(新京阪鐵道)……………五八四

□能勢電車……………五八七

□嵐山電車……………五九二

□京津電車……………六〇八

□大阪鐵道……………六一七

新天王寺道明寺……………六一七—六二〇

道明寺柏原長野……………六二〇—六二九

□伊勢參宮と鳥羽の風光……………六三〇

□大和アルプス大峯登山……………六三九

□琵琶湖の周遊……………六四四

□琴平詣と高松附近……………六五二

□寒霞溪の秋色……………六五七

□天の橋立見物……………六六一

□柄と尾ノ道の風光……………六六八

□宮島參詣と島めぐり……………六七三

□大社まうで……………六七九

□紀州の沿岸……………六八四

□遊覧の栞(日かへりの計書)……………六九七

京 都 方 面

- 〔一〕 男山と天王山……………六九七
- 〔二〕 老蘇の櫻と其附近めぐり……………六九八
- 〔三〕 桃山から京都へ……………六九八
- 〔四〕 善峰寺より花の寺へ……………六九九
- 〔五〕 柳谷から光明寺へ……………七〇〇
- 〔六〕 大原の里……………七〇一
- 〔七〕 湖南の靈場めぐり……………七〇二
- 〔八〕 鞍馬詣と加茂まうで……………七〇三
- 〔九〕 横川まわりの比叡登山……………七〇三
- 〔一〇〕 桃山御陵と伏見稻荷……………七〇三
- 〔一一〕 鞍馬から實相院……………七〇四
- 〔一二〕 比叡登山……………七〇四

- 〔一三〕 醍醐山から石山寺へ……………七〇六
- 〔一四〕 宇治から六地藏へ……………七〇七
- 〔一五〕 白川越へ比叡登山……………七〇八
- 〔一六〕 京都から大津へ……………七〇八
- 〔一七〕 醍醐山から岩間山及立木の観音……………七〇九
- 〔一八〕 山科めぐり……………七一〇
- 〔一九〕 醍醐山と牛尾の観音……………七一〇
- 〔二〇〕 嵐山から御室へかけて……………七一〇
- 〔二一〕 三尾の楓と嵯峨の秋色……………七一一
- 〔二二〕 愛宕まゐり……………七一二
- 〔二三〕 保津川下りと嵐山、向日町……………七一三
- 〔二四〕 嵯峨野めぐり……………七一四
- 〔二五〕 保津川下りと嵯峨野……………七一四
- 〔二六〕 宇治の名蹟と青谷の梅林……………七一五

- 〔二七〕 東山と平安神宮の時代祭……………七二五
- 〔二八〕 流璃溪の奇勝……………七二五
- 〔二九〕 彦根附近めぐり……………七二五
- 〔三〇〕 向日町附近……………七二六
- 〔三一〕 稻荷お山めぐりと山科附近……………七二六
- 〔三二〕 京都三日めぐり(一日目)……………七二六
- 〔三三〕 同 (二日目)……………七二七
- 〔三四〕 同 (三日目)……………七二七
- 〔三五〕 永源寺の観楓……………七二八

大 坂 方 面

- 〔三六〕 鳴川から生駒へ……………六九七
- 〔三七〕 枚岡から生駒へ……………六九八
- 〔三八〕 茨木から山崎へ……………六九九
- 〔三九〕 若江から生駒へ……………六九九

- 〔四〇〕 茨木と枚方の櫻を訪れて……………七〇〇
- 〔四一〕 住吉詣でと堺市の名蹟……………七〇一
- 〔四二〕 枚方から男山へ……………七〇一
- 〔四三〕 濱寺から堺へ……………七〇一
- 〔四四〕 瓢箪山から法隆寺へ……………七〇一
- 〔四五〕 北山の毘沙門天……………七〇二
- 〔四六〕 鳴川から郡山へ……………七〇三
- 〔四七〕 十三峠越へ信貴山……………七〇三
- 〔四八〕 天野山と横尾山……………七〇四
- 〔四九〕 観心寺から延命寺……………七〇四
- 〔五〇〕 神峰山詣と柳谷……………七〇四
- 〔五一〕 十三峠から鳴川へ……………七〇七
- 〔五二〕 四條坂から富雄へ……………七〇七
- 〔五三〕 藤井寺の観音と上の太子……………七〇九

〔五四〕 高貴寺から金剛の山麓へ……………七〇
 〔五五〕 赤阪城址から観心寺……………七一
 〔五六〕 金剛登山……………七二
 〔五七〕 有馬越から六甲越……………七三
 〔五八〕 箕面の観楓と能勢の妙見……………七三
 〔五九〕 源氏の瀧から富雄へ……………七三
 〔六〇〕 阿部野神社と住吉詣うで……………七三
 〔六一〕 箕面・勝尾寺を経て茨木へ……………七四
 〔六二〕 八尾から四條畷へ……………七四
 〔六三〕 大阪二日めぐり(一日目)……………七五
 〔六四〕 同 (二日目)……………七八
 神戸方面
 〔六五〕 播州名所めぐり……………七〇
 〔六六〕 書寫山詣と白國の梅林……………七八

〔六七〕 曾根附近と法華寺……………七八
 〔六八〕 鷹取山から太山寺、舞子へ……………七九
 〔六九〕 甲山観音と清荒神……………七九
 〔七〇〕 摩耶山から再度山へ……………七一
 〔七一〕 鷹取山から須磨へ……………七一
 〔七二〕 須磨から明石へ……………七二
 〔七三〕 明石の名所と岩屋の風光……………七三
 〔七四〕 摩耶山から六甲、有馬へ……………七四
 奈良方面
 〔七五〕 富雄から王寺へ……………六九
 〔七六〕 鷲峰山詣うで……………六九
 〔七七〕 法隆寺から郡山へ……………六九
 〔七八〕 信貴山から龍田へ……………七〇
 〔七九〕 龍田神宮と法隆寺……………七〇

〔八〇〕 信貴山より峰傳に生駒山へ……………七五
 〔八一〕 橿原神宮から壺阪へ……………七五
 〔八二〕 丹波市から長谷寺へ……………七五
 〔八三〕 奈良公園と鶯瀧……………七五
 〔八四〕 帯解から三輪へ……………七六
 〔八五〕 奈良の西山めぐり……………七六
 〔八六〕 橿原神宮と談山神社……………七六
 〔八七〕 西大寺、薬師寺を経て奈良へ……………七六
 〔八八〕 長谷から多武峰を経て橿原宮へ……………七九
 〔八九〕 當麻寺から二上山越、上の太子……………七二
 〔九〇〕 笠置山から奈良へ……………七二
 〔九一〕 月ヶ瀬の探梅……………三三
 〔九二〕 赤目四十八瀧……………三六
 〔九三〕 香落峽の奇勝……………三七

〔九四〕 吉野山の史蹟と観櫻……………三五
 〔九五〕 女人高野室生寺……………三七
 和歌山方面
 〔九六〕 日前國懸神宮と根來の観櫻……………六九
 〔九七〕 根來寺から粉川寺へ……………六九
 〔九八〕 日前國懸の宮と龜山社……………六九
 〔九九〕 牛瀧の観楓……………七〇
 〔一〇〇〕 淡輪と淡路洲本……………七一
 〔一〇一〕 犬鳴山と水間の観音……………七五
 〔一〇二〕 深日浦から加太港へ……………七六
 〔一〇三〕 金熊寺の梅林と砂川の奇勝……………七七
 〔一〇四〕 和歌の浦と新和歌の浦……………五〇
 〔一〇五〕 日かへりの高野詣り……………五五
 五十音索引……………
 卷末

— 皇陵巡拜表 —

歷代帝陵巡拜案内表

參拜順序	御陵名	下車驛
一	神武天皇畝傍山東北陵	畝傍 三七八
二	綏靖天皇桃花鳥田丘上陵	同
三	懿德天皇畝傍山南織砂溪上陵	同
四	安寧天皇畝傍山西南御陰井上陵	同
五	宣化天皇身狹桃花鳥阪上陵	同
六	孝元天皇劔池島上陵	同
七	欽明天皇檜隈阪合陵	同
八	天武天皇持統天皇檜隈大內陵	同
九	文武天皇檜隈安古岡上陵	同
一〇	皇極天皇越智岡上陵	御所 三五六

參拜順序	御陵名	下車驛
一一	孝安天皇玉手丘上陵	同
一二	孝昭天皇掖上博多山上陵	同
一三	後醍醐天皇塔尾陵	吉野 三五二
一四	顯宗天皇傍丘磐坏丘南陵	下田 三四四
一五	武烈天皇傍丘磐坏丘北陵	同
一六	孝靈天皇片丘馬阪陵	王寺 三〇三
一七	舒明天皇押阪內陵	櫻井 三〇四
一八	崇峻天皇倉梯岡上陵	同
一九	崇神天皇山邊道勾岡上陵	柳本 三〇〇
二〇	景行天皇山邊道上陵	同

二一	垂仁天皇菅原伏見東陵	尼ヶ辻 四五六
二二	安康天皇菅原伏見西陵	西大寺 四五六
二三	稱徳天皇高野陵	同
二四	成務天皇狹城盾列池後陵	同
二五	平城天皇楊梅陵	同
二六	元正天皇奈保山西陵	奈良 三〇〇
二七	元明天皇奈保山東陵	同
二八	聖武天皇佐保山南陵	同
二九	開化天皇春日率川阪上陵	同
三〇	光仁天皇田原東陵	同
三一	明治天皇伏見桃山陵	御陵前 四二五
三二	桓武天皇柏原陵	同

三三	仁明天皇深草陵	深草 四四〇
三四	後深草以下十二帝深草法華堂陵	同
三五	近衛天皇安樂壽院南陵	墨染 四三一
三六	鳥羽天皇安樂壽院南陵	同
三七	白河天皇成菩提院陵	同
三八	醍醐天皇後山科陵	六地藏 四四六
三九	朱雀天皇醍醐陵	同
四〇	仲恭天皇九條陵	東福寺 四四六
四一	四條以下十二帝後月輪陵	同
四二	後堀河天皇觀音寺陵	同
四三	孝明天皇後月輪東山陵	同
四四	後白河天皇法住寺陵	京都 五

— 皇陵巡拜表 —

西國卅三所一覽表

一、	青巖寺	六四
二、	紀三井寺	五〇五
三、	粉河寺	三六三
四、	施福寺	五〇〇
五、	葛井寺	六九
六、	壺坂寺	四九
七、	岡寺	三八二
八、	長谷寺	三七六
九、	南圓堂	三四
一〇、	三室戸寺	四三
一一、	醍醐寺	四九
一二、	岩間寺	一八七

一三、	石山寺	一八
一四、	三井寺	一七一
一五、	觀音寺	四九
一六、	清水寺	四
一七、	六波羅密寺	三三
一八、	六角堂	七
一九、	革堂	八
二〇、	善峰寺	一六五
二一、	穴太寺	二八一
二二、	總持寺	一五
二三、	勝尾寺	五二
二四、	中山寺	五六

二五、	清水寺	二九五
二六、	法華寺	二五四
二七、	圓教寺	二五九
二八、	成相寺	六四
二九、	松尾寺	六六
三〇、	寶嚴寺	六五〇
三一、	長命寺	一九二
三二、	觀音正寺	二〇一
三三、	華嚴寺	三五

年中行事の要

寅の日	信貴山毘沙門天	三〇三
同	神峰山毘沙門天	一五
卯の日	住吉神社	四二
午の日	能勢の妙見	五九〇
十六日	生駒觀喜天	四三二
十七日	柳谷觀音	一六一
廿一日	大師めぐり	...
廿三日	愛宕神社	六〇五
廿四日	蟾地藏	四八四
廿五日	北野天神	六八
同	天滿天神	一六

一年中行事

一日	惠方詣	...
同	八阪社削掛神事	一〇三
同	六波羅密寺王服茶	二三
四日	鶴斑鳩寺太子祭	一六〇
五日	伏見稻荷大山祭	四三
七日	北野天神若菜祭	六
同	箕面辨天福法會	五五〇
同	清水寺修正會	五
八日	原田神社菜摘祭	五四
同	東寺御修法	三三
九日	西本願寺報恩講	六〇

十日	西宮神社	五八
同	今宮神社	四六
十四日	下鴨社武射神事	八九
同	天王寺修二會	四〇
十五日より	男山八幡厄神祭	四七
十五日まで	枚岡社粥神事	四七
十五日	立木觀音	一八六
十七日	厄除八幡祭	五七〇
十八日	門戸厄神	五〇
十九日	阿部野神社	四六九
廿四日
初午	伏見稻荷	四三
卯の日	男山初神祭	四〇七
節分	我孫子觀音	五二三

一年中行事

同 清荒神……………五五
 同 厄除八幡……………五七〇
 十日 枚岡社大祭……………四七
 十二日 四條暖神社祭……………三九一
 廿一日 仁和寺正御影供……………二七四
 廿五日 北野天神梅花祭……………六八
 三月
 一日より 二月堂修二會……………三〇
 十四日まで 泉涌寺舍利會……………四八
 九日 春日神社祭……………三六
 十五日 釋迦堂の松火……………六〇二
 同 東福寺涅槃會……………四八
 十六日 永觀堂大般若經會……………二〇九
 同 廣田神社祭……………五七

十八日 粉阿寺緣日……………三二
 二十日 彼岸會(諸寺)……………
 四月
 一日 大和神社祭……………三二
 二日 松尾神社祭……………五九
 同日 平野神社祭……………七
 三日 神武天皇祭……………三〇
 同日 梅宮神社祭……………五九
 同日 眞清田社桃花祭……………三三
 四日 龍田神社祭……………三五
 八日 大原野神社祭……………六
 同日 筑摩社鍋釜祭……………二〇八
 九日 稻荷神社……………四三
 十日 今宮社やすらひ祭……………七

十三日 嵯峨虚空藏……………五九
 同 大島社花摘祭……………四〇
 十四日 日吉社山王祭……………七六
 十五日 平安神宮祭……………二〇
 同 梨木神社祭……………八
 同 生田神社祭……………四
 同 建部神社祭……………八五
 十五日より 中山寺無緣經……………五五
 廿一日迄 吉田神社祭……………二五
 同日 寶寺鬼追法會……………一六〇
 同日 家原寺……………四八〇
 十九日 釋迦堂拭佛會……………六〇二
 十九日より一週間 智恩院御忌……………一〇七
 同 黒谷光明寺……………一四

一年中行事

同 百萬遍……………一五
 同 粟生光明寺……………一四
 廿一日 東寺御影供……………三
 同(二週間) 壬生寺大念佛……………六
 同 島原太夫道中……………六
 中の卯日 松尾神社幸祭……………五九
 中の午日 稻荷神社幸祭……………四三
 五月
 一日 上御靈社神幸祭……………八
 同日 下御靈社神幸祭……………八
 一日より 生駒聖天大磐若會……………三
 十日迄 野崎觀音無緣經……………三
 八日迄 今宮神社神幸祭……………七
 五日 向神社私祭……………二

十五日 加茂葵祭……………九
 十七日 東照宮和歌祭……………五〇
 二十日 下御靈社疫鎮祭……………八
 廿三日 愛宕社嵯峨祭……………六五
 廿五日 湊川神社祭……………二
 上午日 下鴨社御蔭祭……………九
 六月
 一日 貴船神社祭……………三七
 五日 加茂社競馬……………九
 同日 藤森神社祭……………三
 同日 宇治縣社祭……………四
 九日 北野神社宮渡祭……………六
 十四日 住吉神社御田祭……………三
 十五日 八坂神社祭……………三

十八日 粉川寺……………三二
 廿日 鞍馬寺竹切會……………一三
 廿五日 北野神社手洗會……………六
 七月
 一日 建勳神社祭……………三
 六日 箕面辨財天……………五〇
 九日 生國魂神社祭……………三
 十二日 湊川神社祭……………二
 十六日 祇園會山鉾宵飾……………二
 十七日 祇園會……………二
 同日 御靈神社祭……………七
 十八日 高津神社祭……………三
 廿一日 難波神社祭……………二
 廿二日 座摩神社祭……………二

廿四日	八坂神社遷幸祭	二〇二	同日	天王寺千日詣	四〇〇	廿日前後	四天王寺彼岸會	四〇
廿五日	天滿天神船渡御	二〇六	十日	水間寺千日詣	四八五	十月		
廿九日	建仁寺布薩會	二二三	十五日	泉穴師神社祭	四八三	一日	北野神社渡御	六八
三十日	明治天皇祭	四四五	十六日	大文字山送り火	二七	五日	手向山八幡祭	三九
卅一日	大鳥社堺渡御	四八〇	廿四日	蛸地藏大縁日	四八四	九日	御香宮祭	四三〇
同日	堺大濱夜市	四七六	同日	開口神社祭	四六六	十日	梨木神社祭	八四
八月			十二日	開口神社祭	四六六	十二日	廣隆寺牛祭	五九三
一日	住吉神社祭	四七一	十三日	龜山神社祭	五二	十五日	粟田神社祭	二〇八
同日	伊崎竿飛び	六五一	十五日	男山八幡中秋祭	四〇七	同日	蹠蹠天滿宮祭	四〇二
三日	石切神社祭	四五〇	同日	離宮八幡祭	一五六	十六日	新日吉神社祭	九二
四日	北野神社祭	六八	十八日	豐國神社祭	四	十七日	住吉社寶の市	四七一
五日	醍醐寺大護摩會	四八	同日	粉川寺曼陀羅會	三三	十八日	豐國神社祭	四
六日	高臺寺施食會	一〇〇	廿六日	日前國懸宮祭	五〇	同日	長田神社祭	一八
九日	中山寺千日詣	五五	廿七日	吉野宮	三三	廿二日	平安神宮時代祭	二〇

同日	鞍馬火祭り	一五六	十三日	稻荷御田祭	四五	十一月		
廿三日	與杼神社淀祭	四二	十五日	眞如堂十夜念佛	二四	一日	清水寺佛名會	四
廿五日	南御堂報恩講	二〇七	十七日	談山神社祭	三〇	六日	智恩院佛名會	一〇七
十一月			廿一日	東本願寺報恩講	五九	七日	水無瀬宮祭	一五六
一日	八坂神社火焚祭	一〇二	同日	佛光寺報恩講	六	十七日	春日若宮祭	三六
八日	稻荷神社火焚祭	四三	三十日	北野神社赤柏祭	六八	十二月		

四季行樂の榮

梅	金ヶ崎梅林	二四六	大鳥神社	四八〇	桃	倉治桃林	三六	土佐稻荷	五一
	丸窓亭	三三六	金熊寺梅林	四九〇		額田部桃林	四六	平野神社	七一
	月ヶ瀬	三三三	米谷梅林	五七		垂水桃林	五六	新日吉神社	九二
	青谷梅林	三八八	寶梅園	五八		填生桃園	六三	圓山公園	一〇三
	高安梅林	四六	岡本梅林	五四		觀心寺	五六	洗水宮	一五三
	枚岡梅林	四七	觀心寺	五六	櫻	栗林公園	六三	觀右衛門屋敷	一五
			後樂園	二六八		造幣局	二七	花の寺	一六七
			白國梅林	二八				醍醐山	四八
								長等公園	一七

坂本	一七六	沙見樓	三三三	石山寺	一八六	長等公園	一七五	觀心寺	五二六
老蘇	一七四	郡山城址	四三三	保津川	二八〇	永源寺	一九八	光瀧寺	五三〇
延命寺公園	一六六	長野遊園	五五五	長岡天神	二六二	瑞寶寺趾	二九二	延命寺	五三二
伊奈波神社	二二〇	天野山	五二九	さつき寺	三六七	四條暖神社	三九一	男山	四〇七
養老公園	二二八	榎尾山	五三〇	最明寺瀧	三五四	清瀧	三九五	東福寺	四〇六
霞間谿	二二五	高野山	五三〇	十善寺	三五四	坂本	一九六	嵐山	四〇五
芳嵐園	二二五	宇治	四三三	林昌寺	四九〇	源氏の瀧	三五六	松尾神社	四〇六
有馬	二九二	嵐山	五九五	躰岡	四九〇	龍田川	三〇五	小倉山	四〇三
岩倉峽	三三七	車折神社	五九四	興聖寺	四九〇	談山神社	三〇四	愛宕山	四〇五
多武峰	三三〇	松尾神社	五九八	紅葉		高雄	三〇七	流璃溪	四〇四
長谷寺	三三六	廣澤の池	六〇七	永觀堂	二〇九	榎尾	二七八	養老公園	二二八
吉野山	三三三	津公園	六〇二	若王子神社	二一〇	榎尾	二七九	赤目四十八瀧	三三六
根來寺	三三三	十三堤	五三三	清水寺	二九五	禪昌寺	二七〇	香落峽	三三七
御室	二七〇	殿島	六七四	鶯瀧	三八	箕面	二八八	鈴鹿峠	三三三
須磨寺	三〇〇	琴平社	六五五	秋葉山	五〇一	勝尾寺	二九一	寒霞溪	三三〇
箕面	五〇八	さつきとつじ		長岡天神	二六一	牛瀧山	四八四	後樂園	三三六
甲山	三三二					鳴瀧	四九五	栗林公園	三三三

日かへり泊二泊 近畿の旅と其附近めぐり

近畿遊覽社著



編者は旅行が好きである。而して編者はその好きな旅行を一般の人士に御薦めしたのである。貝原益軒が著した樂訓に「他郷に遊び、名勝の地、山水の麗しき佳境にのぞめば、良心を感じ、鄙吝をあらひすべく助けとなり、我が徳をすゝめ、知を弘むるよすがなるべし、又いひ知らぬ異郷に行きて、見馴れぬ山川の有様を見て、目をあそはしめ、里人に遇ひて其所の風土をさひ(中略)、あるは海はた、山遠き、眼界展き眺めば萬戸侯の富にもまさされり、又其里におひ出でたる名産の異なる品を見て、其味を試むるも、いさ珍らしく、心慰むわざなり。すべて勝地に遊びて見聞せし事、唯一時の耳目を悦ばしむるのみならず、幾年経ぬれど、其時見聞せし有様、老の後まで折々思ひ出されて、恰も其時見聞せし思ひを成して樂むべし」を旅行の特長を賞揚してゐる。健康の増進、高尚なる趣味の啓蒙上、編者は其行樂の普及に及はずな

一はしがき

一

ら努めてゐるのである。が、近頃各商工組合に定休日を設けられるやうに成つてから、青年諸君間に此舉が漸く盛んに成つて來たのは誠に悦ばしいことである、又自然に親みたいといふ人間本然の性からいつても、さう成つて來るのが眞實なのであるのだ。

たまさかの祭日休日を利用しての、氣散じ——樂み——暢氣な——野の旅、山の旅も只無暗に歩くばかりでは何んの興味も起らない、そこに土地の由緒や名所の傳説、神社佛閣、墓碑、それ／＼の舊蹟を知つてこそ始めて其旅が有意義に成つて來る譯である。

本書はそれらの意味から編んだもので、單に旅行者の精確なる道案内たるのみでなく、汽車を待つ間の退屈しのぎ、又は車中の無聊を慰める爲めや、不圖した通りすがりにも名所舊蹟を知るやうに、本文を驛中心とし、卷末に名所舊蹟を經めぐる順序に「其日歸りの計畫掲げて」「何處へ行かうか」の問題に即答を與へ、記述は成るべく肩の凝らない様に、旁拙い文辭を飾る爲めにあらゆるものから引用して興味を添へたつもりであるし、今後の訂正増補をも怠らない心算であるから誤謬に氣附かれた人や隠れた名所を訪ねた讀者は發行所まで書面で御教示が願ひたい、それは獨り編者の幸福のみではないのである。

大阪の見物

浪華津に咲くや昔の梅の花、今も昔も春風ぞ吹く。

後京極攝政

大阪の沿革

大阪の地は即ち古の難波津である、然し今の繁華なる市街の大部分は浪の華咲く蒼海であつたといふからして驚かされる、その當時の地形は、北尼ヶ崎から南住吉に至る間一面の入海で、其中に媛島たの大隈島、笠縫島等の小島が浮んでゐたといふ、又江口神崎の邊には山城川(淀川)、大和川其他の諸水が集注してゐた爲めに、河水と海潮とが相激して舟を操るに非常に困難であつたこと、思はれる、それで神武天皇が御東征の御砌に浪速と命名されたことが歴史の上に見えてゐる、天皇が御上陸になつた地は、山城川の河口白肩、即ち今の枚方のことである、後灣内は年代を經るに従つて諸水から流出する泥や砂石の爲めに、次第々々に淺くなつて遂には幾多の洲渚が出來、地形の上に大變化を來したのである。

大阪に官居が築かれたのは應神天皇が始めて、三韓が來服してから攝津武庫の水門(兵庫港)が急に船

船の來集する所となつた關係上、大倭の帝都がやゝ遠隔の嫌があるので、此地に行幸遊はされ、大隅の宮を離宮とし在すこと十九年にして崩御せられた、次いで仁徳天皇都を此難波の地に遷させられ、高津の宮に在すこと八十餘年、天皇高臺に登り人煙の稀なるを見そなはし、三年の課役を免ぜられた御仁慈はいふまでもなく、池溝を穿ち、堤防を築き、水利灌漑に便し、大道を通じ、橋梁を造り等、大いに交通の上に大御心を傾け給ひし御事蹟は、大阪の歴史上特筆すべきことである、當時地名を大江、又は大江坂と呼び今の八軒家邊を大江の岸といひ、船場は其名の如く船着場で、島の内は島形の洲を成してゐたといふ、其後聖德太子が玉造の岸上（今の森の宮）に四天王寺を建立、間もなく大化改新の大詔をお布きになつた中興の英主孝德天皇が都せられた、難波長柄豐崎宮といふがそれで、規模頗る宏壯なるものであつたといふ。中古此地を御津の濱と稱へ、鴻臚館を築いて外客の應接の地となすによつて人口漸く加はり、日盛運に向つて來たが、平安の始めから漸時衰運に傾き、遂に西行法師をして、

津の國の浪速の春は夢なれや、蓋のかれ葉に風渡るなり。

西行法師

と詠せしめたのである。

明應元年（凡そ四百三十年前）蓮如上人が石山に向專修の道場本願寺を建て、宗風を起した、最早其當時には大江の坂の江を略して、今の大阪といふ地名が著はれてゐた時分で、眞宗の聖典たる「御文章」に「生玉の庄内大坂といふ在所は」と記されてゐるに依て明かである、文祿年間（凡そ三百四十年前）豊臣秀吉天下の霸權を據つて本願寺の址を擴張し、大坂城を築いて諸侯を朝會せしめ、堺の富豪を呼び寄せて市街を起さしめたので、諸國の町民はわれもくゞ移住して遂に繁華なる巷と化したのである、慶長元和の役で豊臣氏は亡び、商估は四方に離散し、市街は殆ど昔日の佛を留めなかつたが、此地に封を受けた松平忠明が極力市政に盡して流離の民を招び、安井道頓に命じて數多の家を建て、それが居住に充てた、又道頓は私財を投じて南に堀を疏通し、その兩側に家を建てたのが今日の道頓堀である、元和五年（凡そ三百年前）忠明は大和郡山に移封を命ぜられ、幕府は此地に城代を派して直轄することになつた、家光が將軍であつた寛永二年（凡そ三百年前）の人口は廿七萬九千六百餘人で、夫から四十四年後の家綱の寛文九年には四十萬七千三百餘人であつたといふ、徳川の所謂二百諸侯は皆此地に藏屋敷を建て、領地の物産を賣らせることにしたので、大坂が各地物産の集散地となり、此地の物價の高低は直に全國に波及する位に

—大阪の見物—

経済上の中心地となつた。

天正十二年（凡そ三十四十年前）以來東横堀、西横堀、阿波座堀、江戸堀、京町堀、長堀、土佐堀、薩摩堀等を開鑿し、寛永五年（凡そ二百九十年前）に曾根崎、元祿元年（凡そ二百三十年前）には河村瑞軒に命じて九條島を拓き新河を通じて海に至らしめたのが安治川で、同年に難波村、堂島、御池通を市に編入同十一年に堀江、幸町、古川、富島、延享五年（凡そ百七十年前）に高津新地、南瓦屋町、難波新地等が開かれて年々に擴大し、大坂を南組、北組、天満組の三つに分ち、之れを大坂の三郷と名稱した、町數六百餘、これに總年寄が十四人、其下に各町の年寄を置いて三郷萬端の事務を掌らしめた、天保八年（凡そ八十五年前）大鹽の亂に大火を起し、百廿餘町灰燼に歸した、それが爲めに市況はやゝ衰へ勝となつたのを、維新後府をここに置いてから、漸時恢復し今日の繁盛を見るに至つたのである。

地は攝津の東南隅に位し、西南は大坂灣に面し、北は遠く神峰、箕面、妙見、東は生駒、葛城、金剛の諸山を繞らし、西北は神崎川を挟んで兵庫縣と境を分かち、南は大和川を隔て、堺市と接してゐる、淀川の水は東北より來つて市を貫き、土佐堀川、堂島川となり支流は東横堀、道頓堀、西横堀、長堀等の諸川に

疏通して、安治川、尻無川、木津川の三川となつて海に注いでゐる、交通は昔から水陸共に便利よく、物貨の集散地として東洋第一の稱を占めてゐる、又工業の盛んなることはいふまでもなく、諸工業會社や工場から吐き出す煙は全市を蔽ふて「煙の都」とまでいはれてゐる。

市内名所

市内の名所案内は順序として梅田驛から記述することとした、
—梅田、北野方面—

大阪驛—市の北部梅田町(市電梅田驛前)にある、俗に梅田驛といつて市の表玄関口である、鐵道は東京名古屋、京都を経て此處に來り、更に神崎を経て神戸に至る東海道本線を初め、此處を始驛として神崎、伊丹、福知山に至る福知山線、及び市の東端を通じて關西線の市内天王寺驛に至る城東線、市の西部櫻島驛に通じてゐる西成線の諸線輻湊して日夜喧轟を極め、吞吐する旅客の雑沓と貨物の山積は本市の隆盛を物語つてゐる、現在の驛は二十年前建設で、市の發展に伴ふべく近く大々的に改築擴張せられる筈である、驛前

—大阪の見物—

大阪驛
東海道本線
福知山線
城東線
西成線

—大阪の見物—

阪神急行電車

露天神

から東行の市電に乗ると、次ぎの停留所は梅田車庫前で、そこには神戸及箕面、寶塚に通じ、更に能勢、吹田方面に連絡してゐる阪神急行電車（梅田驛の東二丁）の起點がある。

露天神——市電梅田新道交叉點の傍（阪急電車の南三丁）にある、郷社、菅公を祀る、地は菅公左遷のとき大融寺に參詣される道すがら、露が深かつたので

菅公

露を散る涙は袖にくちにけり、都のこころを思ひ出づれば。
この詠があつた舊蹟である、又近松の「此世を名殘夜も名殘、死に行く身を譬ふれば、仇が原の道の霜、一足づつに消れて行く、夢の夢こそ哀なれ。彼數ふれば曉の、七つの鐘が大つ鳴りて、残る一つが今生の、鐘の響きの聞納め、寂滅爲樂と響くなり。」と例の名文でお馴染の曾根崎心中は此社の森でやつたといふので遊女お初の名に因んで「お初天神」ともいふ。

寒山寺

寒山寺——露天神の東北二丁、臨濟宗妙心寺派、寛永九年（凡そ二百九十年前）小濱民部少輔が、豊公の榮耀見御殿を申し受け、其儘伽藍となしたる處で、吳の姑蘇寒山寺に倣ふて「姑蘇名刹」の額を掲げてゐる、又鐘樓の梵鐘が有名だ。

大融寺

大融寺——寒山寺の東北二丁（市電高垣町の南三丁）にある、眞言宗、弘仁二年（凡そ千百餘年前）弘法大師が嵯峨帝の勅によつて草創した處、木堂に釋迦、藥師、觀音の三尊を安じ、境内に不動堂、愛染堂、大師堂等の諸堂と辨財天の社の横に淀君の墓がある、寺僧に弘法大師の開基で、後源融公が發願して大伽藍を修築し、諱の一字を寺號に用ひたと云ふ、市内有数の古刹であるが、星霜と共に頽廢して其昔を偲ぶ由もない、されど賽者常に絶えず、例月廿一日の大師巡りには數萬の參詣者で、非常な雑沓を呈する、寺の附近一帯を北野といひ、上古は菟餓野又は鬮鷄野といつた所で、今も附近に菟餓野町と云ふ町の名が残つてゐる、仁徳帝が八田皇女と共に高臺に登られ、此野の鹿の鳴く音を聴き給ひし事が、舊史に見えてゐる、押照やみつの堀江に船こめて、つけ野の鹿の聲を聞く哉

淨忍法師

師光

曾根崎新地

曾根崎新地——露天神の南一丁（市電船大工町）所謂北の新地で、「天の網島」の小春も「曾根崎心中」のお初もともに此廓の遊女であつたのだ、昔停留所の傍に蜷川とて「餘りぢや治兵衛殿、其程名殘借くは紙書かぬが好いわいの、」昨年の十月中の亥の子に、炬燵明けた脱履とて、まあ爰で枕並べて以來、女

—大阪の見物—

—大阪の見物—

房の懐中には鬼が住むか蛇が住むか、二年といふもの集守にして、辛う母様叔母様のお庇護で、睦しい夫婦らしい廢物語も爲うものと、樂む間も無く眞に酷い無情い、然程心残りには泣かしやんせく、其涙が蜆川へ流れて小春の汲んで呑むやらうぞ、エ、曲も無い恨めしやーと、女房おさんが泣いて夫に三年越の恨みを並べ立てる中にも唄ひ込まれた小川だが、明治四十二年の大火の後、埋められて今は無い。

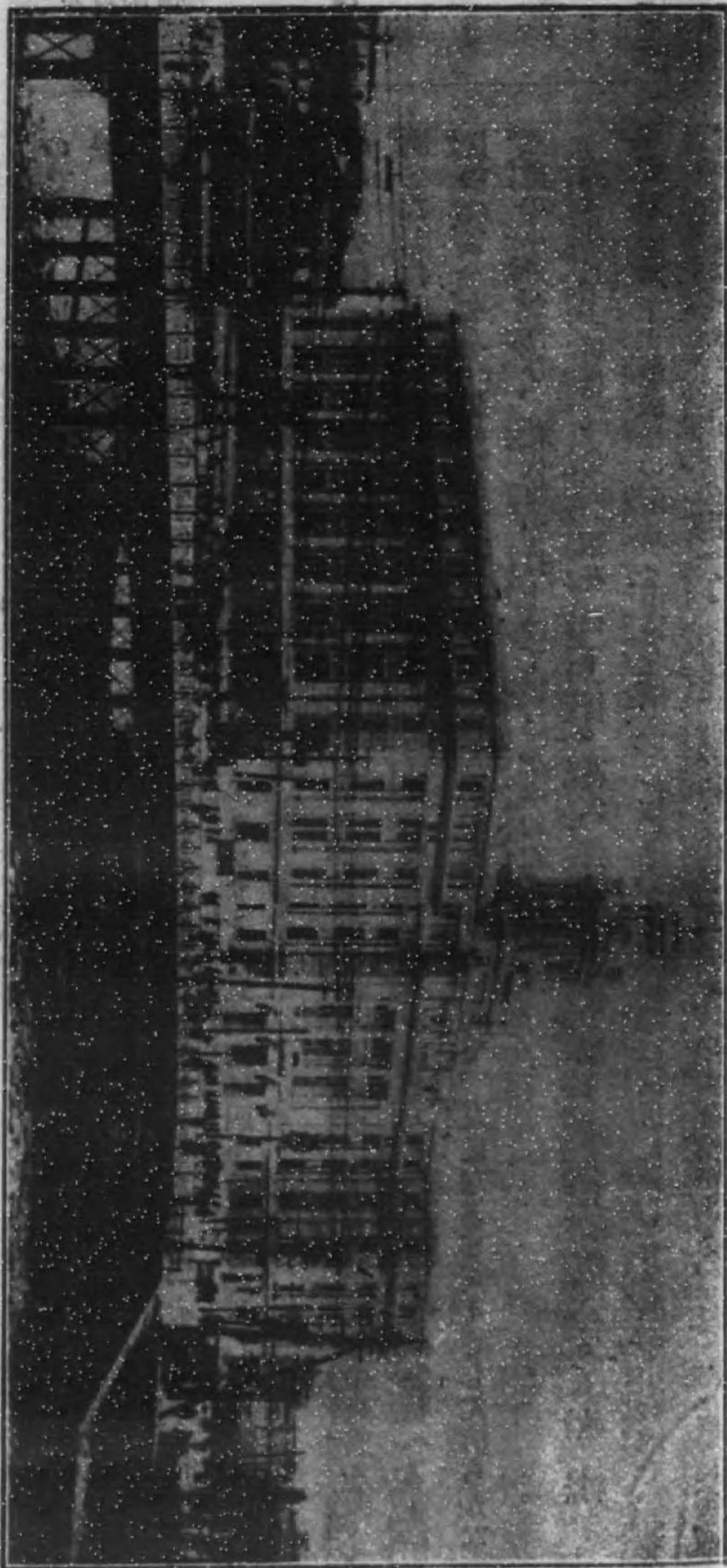
—中の島、北濱方面—

市廳舎
日本銀行支店

淀屋橋
豊國神社
府立圖書館
中央公會堂
大阪地方裁

市廳舎——大阪驛の南七丁大江橋の南詰（市電大江橋）にある、大正七年七月起工、同十年五月落成、其工費三百五十萬圓といふ總石造の大洋館である、その向ひに、希臘の殿堂に模して建てられたといふ、日本銀行支店がある、その南に架けられた淀屋橋は、大阪の豪商淀屋巨菴の架せしもので、淀屋は二世辰五郎に至つて驕奢を極めし爲めに滅びたるは人の知る處である。

豊國神社——市廳舎の東隣にある、別格官幣別社、明治十二年九月創建、大阪の恩人たる豊太閤を祭る、社の東が府立圖書館で、その東にある赤煉瓦造りの宏壯なる建物は中央公會堂である、前者は富豪住友氏の寄附に係るもので、後者は株の仲買岩本榮之助君が、其職ち得たる百萬圓の寄附に依つて建設したるも



判所
大阪ホテル
木村長門守
の誠忠碑
難波橋

中の島公園

株式取引所
三越呉服店

のである、北、堂島川を隔て、見ゆる赤煉瓦の大洋館は大阪地方裁判所である、公會堂から大阪ホテルの前を通つて難波橋のたもとに至ると、木村長門守の誠忠碑が立つてゐる。

難波橋 — (市電北濱二丁目) 北は堂島川、南は土佐堀川に架した一大石橋で、大正四年五月竣工、總長百〇五間、巾十三間、工費四十萬圓といふ、ルネッサンス式裝飾は四邊の風致を和して壯麗を極め、橋頭に扶座する獅子の石造と共に一層美觀を添はる。

中の島公園 — (市電北濱二丁目又は天神橋) 難波橋から東、天神橋に至る間の河面中央部を埋立て、公園となしたるもので、四季折々の花に彩る洋風の庭園、左右を流る、大川の景趣、設備整へる運動場、市民の英氣を養ふ好適の散策地である、昔は大川の涼み舟といつて、夏になると廣々とした清らかな河面に無数の小舟が浮び、花火等を打上げて賑ひを添はたものた。

高々新月上三層樓。舟向瀟花橋下行。花火、迷空紅燭閣。遊人只借納涼名。秋村

株式取引所 — 難波橋の南詰 (市電北濱二) にある、附近の地は當市に於ける金融の中心地で、著名な銀行や會社が多い、取引所の南二丁目 (市電高麗橋) に三越呉服店の大建物がある、その南に隣りてゐる洋風

白木屋呉服店

高麗橋

天神橋

八軒家

の大建物は白木屋呉服店 (市電瓦町) で、共に規模の大きさと内容の充實を説くまでもなく、大阪へ來れば一度は買はないでも見物に行くべき所である。

高麗橋 — 三越呉服店の東二丁目、東横堀川に架せる橋で、當市最初の鐵橋である、長さ卅九間餘、巾三間二尺、藥學者として又活版創作者として有名な、本木昌造氏の設計に係るもので、明治二年の竣工である、橋畔に各府縣の元標に至る里程が示されてゐる。

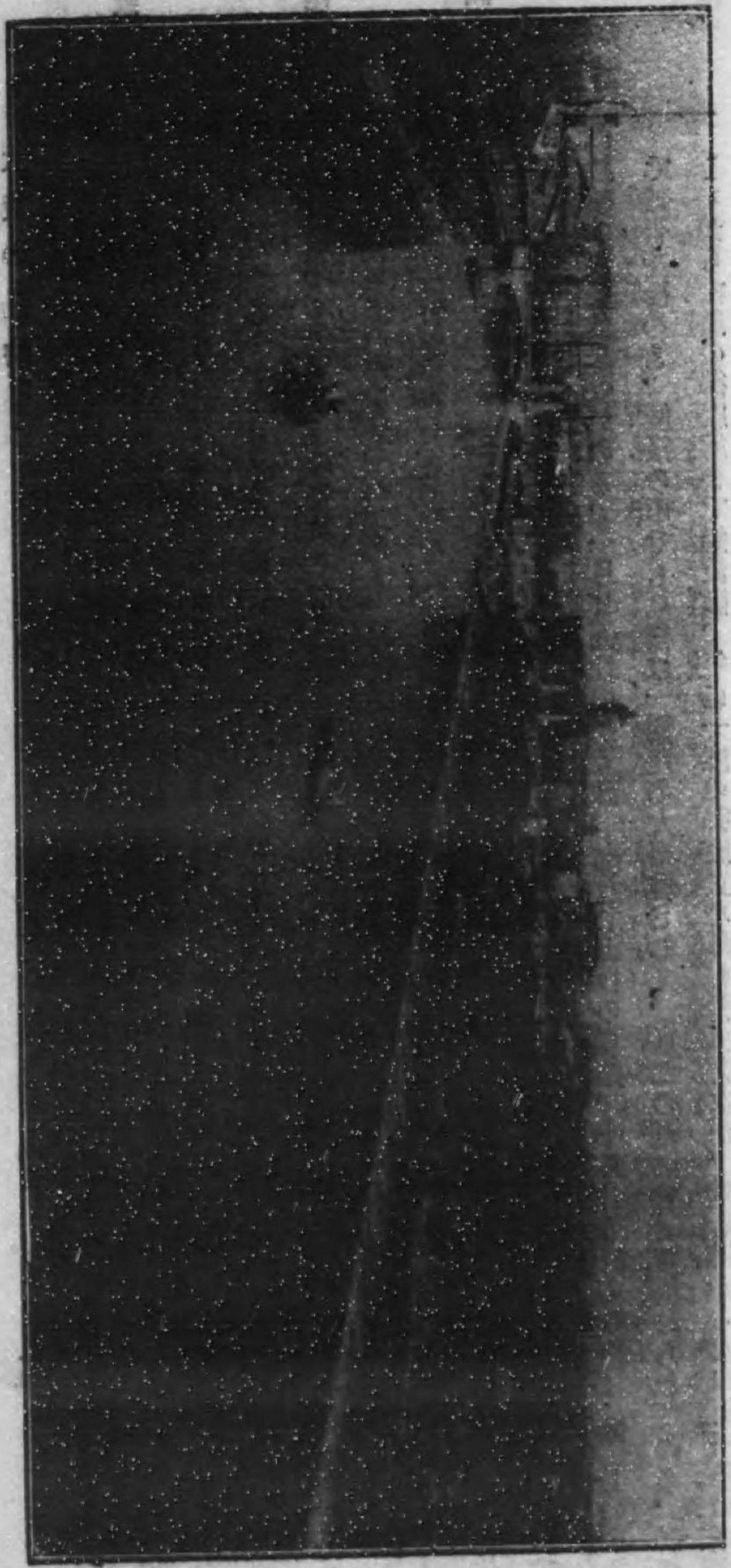
東京へ二四三里二六町、京都へ一三三二里一五町、奈良へ一二二里一五町、和歌山へ一七里一五町、神戸へ九里三二町、大津へ一五里二六町、明石へ一五里一〇町、有馬へ一三三三三町、伊丹へ二里三三町。高麗橋から一筋東の松屋町筋を北にゆく。

天神橋 — (市電天神橋) がある、長さ百卅二間、巾六間の橋桁式鐵橋で、明治十八年の大洪水後、東の天満橋等と共に架けられた大川の一偉觀である、大川は上古の所謂「難波堀江」で、唐船が來集したさいふ御津の浦曲も此邊であつたこと、思ふ、北詰は天神橋筋といつて繁華な街路で、南詰の松屋町に劣らぬ繁榮を示してゐる、南詰から東が、昔伏見通ひの三十石舟の發着所として、般眼を極めた八軒家だ。

「かの彌次郎兵衛北八なる者、伏見の書船に途中より飛乗して、早くも大阪の八軒家に至り、爰より船を上がりたるは最早たそがれ時にして東西を知らず南北を辨へざれば、人に尋ね問ひつゝ、長町を指して行く程に、堺筋道を南に向ひ、日本橋へ出でたりければ、宿引共此所に居合せ、兩人を見掛けて宿の相談をしに来るに、早速きまり直様此長町七丁目なる分銅河内屋といふにぞ連れ行きける。宿引先に願ひかけて、宿引「サア〜お客様を御供して来たわいな。宿屋の番頭「これはようお出で成されました、御機人様で御座います、彌次「ハイ同行四十七人（忠臣蔵の洒落）番頭「ナニ四十七人様、お三さんや、大勢様ぢや、西の奥の間を打抜いて明けさんせ。よう綺麗に掃出したが宜いわいの、コレ久三、お足をお洗ひなさるお湯は何うちやい、温うてもたんだない。水などうめて上げませい、早う〜。時にもし其四十七人様は、いこうお後かいな。彌次「イヤ是は先達で鎌倉へ發足、われ〜兩人は是より泉州堺の天川屋へ。番頭「エ、何の事ぢいな、矢張お二人かいな、コレ〜おつんや、お二人ぢやといな、此方のお一人居やしやる淡い部屋へ御案内さんせ。（膝栗毛）

天満橋

天満橋——八軒家の東（市電天満橋）にある、三大橋中の最も上流に位し、總長百廿間、巾六間の鐵橋で



天 神 橋 難 波 橋 望 む

京阪電車

ある、古來主要なる街道に通じてゐた處まで、史上に見えてゐる「大江橋」「渡邊橋」等は何れも此附近であつたこと、察しられる、南詰に此處を起點として、京都及び宇治方面に通じてゐる京阪電車の天満橋停留所がある。

—天満、長柄方面—

天満市場

天満市場 — 天神橋の北詰から東三丁程の間がそれで、常市に於ける青物の大市場として、雑喉場の魚市場と共に市内兩市場の稱がある、毎朝大川端に積み上げられる蔬菜の量に於て既に衆目を奪ふものがある、近年埋立地に新築して舊態を改めてから一層取引に活氣を加へて見るからに快よい。

天満天神

天満天神 — (市電南森町) 天神橋筋の東一丁、市場を北に抜けるに至る、祭神はいはずと知れた菅原道真公である、天曆の頃(凡そ九百七十年前)村上天皇の勅請によりて創營せられた傳ふ名高い社で、境内に數多の攝社末社がある、一月廿五日の初天神、七月廿五日の夏祭、十月廿五日の秋祭は夥しい参詣者で雑沓を極める、例祭の中でも夏祭は、關西の大祭禮として、京都の祇園會と並稱せられてゐる、神輿はこゝから松島の御旅所まで船渡御、年に一度の御旅立を拜む善男善女が、堂島川から木津川一帯の兩岸と

眞正寺別院

川中を埋た水の上を、さんご船や、囃子船、お迎人形を始め澤山なお供船と共に御船が滑ると、一際に起る拍手の音、炎々さ上がる篝火の緋模様、神々しい此盛観は、水都の夏の偉觀たるを失はぬ、當初の社殿は大鹽の亂に焼け、今は弘化の頃(凡そ七十五年前)の再建である、又社の裏門を出ると寄席、活動寫眞、劇場、飲食店等軒を連らね賑賑を極めてゐるが、往昔は此邊一帯の森であつたそうた。

造幣局

眞正寺別院 — 天満天神の表門の南の辻を東へ二三丁行くに至る、(市電河内町の南二丁)眞宗眞正寺派本尊阿彌陀如来を安置してゐる、舊幕時代には天満郷中の字判を凡て本寺に納める定めであつた、又嬰兒出生の際には必ず参詣する習慣があつたので一に「産寺」の名も遺つてゐる。

泉布觀

造幣局 — 天満天神の東七八丁(市電空町一丁目の東)にある、我國唯一の貨幣鑄造所で、庭内に櫻樹多く、毎年花の頃は城内の通り抜けを許される、局の北隣が宮内省の所屬になつてゐる泉布觀で、明治初年造幣寮の賓館として建設せられたる處、同五年先帝陛下が御西遊の砌「泉布館」なる館號を賜はつた、爾後行幸啓を辱なふせること數回、今尚階上には玉座其他が其儘保存せられてゐる。

澁川橋

澁川橋 — 泉布館の傍から櫻の宮へ架せられた日本式の大長橋で、明治三十五年の竣工、近時東詰の橋

櫻の宮

たもごを拓き、花樹や草花を植附けて小公園となした。

櫻の宮——澁川橋の東詰を北に入つた處にある、淀川の流に瀕して、見るから清々しいお社だ、天照大神を祀る、もご大和川を堤字櫻野から此處に遷したので「櫻の宮」と呼ばれたともいひ、又其名に因む櫻樹が多く、三春の行樂地であつたが、今は煤煙の爲めに枯死して、昔日の佛は憫はれない。

大長寺

大長寺——澁川橋の東詰を南に、交番のある筋を東に行くに至る、曹洞宗、慶長十年（凡そ三百廿年前）外祖江備前守追福の爲め毛利高政が草創したといふ淨刹で、本尊は惠心僧都作の阿彌陀佛である、寺はもご淀川の沿岸にあつたが、前年地を藤田家に譲り、今の處に新しく建てたのである、境内に心中者小春治兵衛の比翼塚及び淀川で獲れた金鱗に巴紋のあつたといふ鯉を埋めた鯉塚といふがある、御馴染の近松の題材心中天の網島から、橋づくしの道行を載せる。

「頃は十月十五夜の、月の見へぬ身の上は、心の闇の印かや、今置霜は明日消ゆる、はかなき豎への夫よりも、先へ消行圍の内、いとし可愛さしめて寝し移り香も何も、流れの蜺川、既に見て朝夕渡る此橋の天神橋は其昔、菅丞相と申せし時、筑紫へ流され給ひしに、君を慕ひて太宰府へ、たつた一飛梅田橋、

跡老松の縁橋、別れを歎き悲しみて、跡にこがる、櫻橋、今に咄しを聞渡る、一首の歌の御威徳、「斯る貴き荒神の氏子と生れし身を持って、そなたも殺し我も死ぬ、元はと問へば分別の、あのいたいけな貝殻に、一杯もなき蜺橋。短き物は我々が、此世の住居秋の日よ、十九と廿八年の、今日の今宵を限りにて、二人命の捨所。爺と婆この末迄も、まめで添はんご契りしに、丸三年も名染いで、此災難に大江橋、あれみや浪花小橋から、舟入橋の濱傳ひ。是迄來れば来る程は、冥途の道が近付」と、歎けは女も籠り寄り、「もう此道が冥途か」と、見交す顔も見へぬ程、落る涙に堀川の、橋も水にや浸るらん。「北へ歩めば我宿を、一目に見るも見返らず。子供の行衛女房の、哀も胸に押包み、南へ渡る橋柱、數も限らぬ家々を、いかに名付で八軒家。誰と伏見の下り舟、着かぬ内に」と道急ぐ。「此世を捨て行身には、聞くも恐ろし天満橋、淀と大和の二ア川を、一ツ流れの大川や、水と魚とは連て行。我も小春と二人連、一ツ刀の三ツ瀬川、手向の水に受たやな。何か歎かん此世でこそは添はず共。未來はいふに及はず、今度の々々、つと今度の其先の世迄も夫婦ぞや。一ツ蓮の頼みには、一夏に一部夏出せし、大慈大悲の普門品、妙法蓮華京橋を、越へれば到る彼岸の、玉の臺に法をへて、佛の姿に身御奉橋、衆生濟度がま、

母恩寺

鶴満寺

毛馬開門

長柄橋

大鹽平八郎の墓

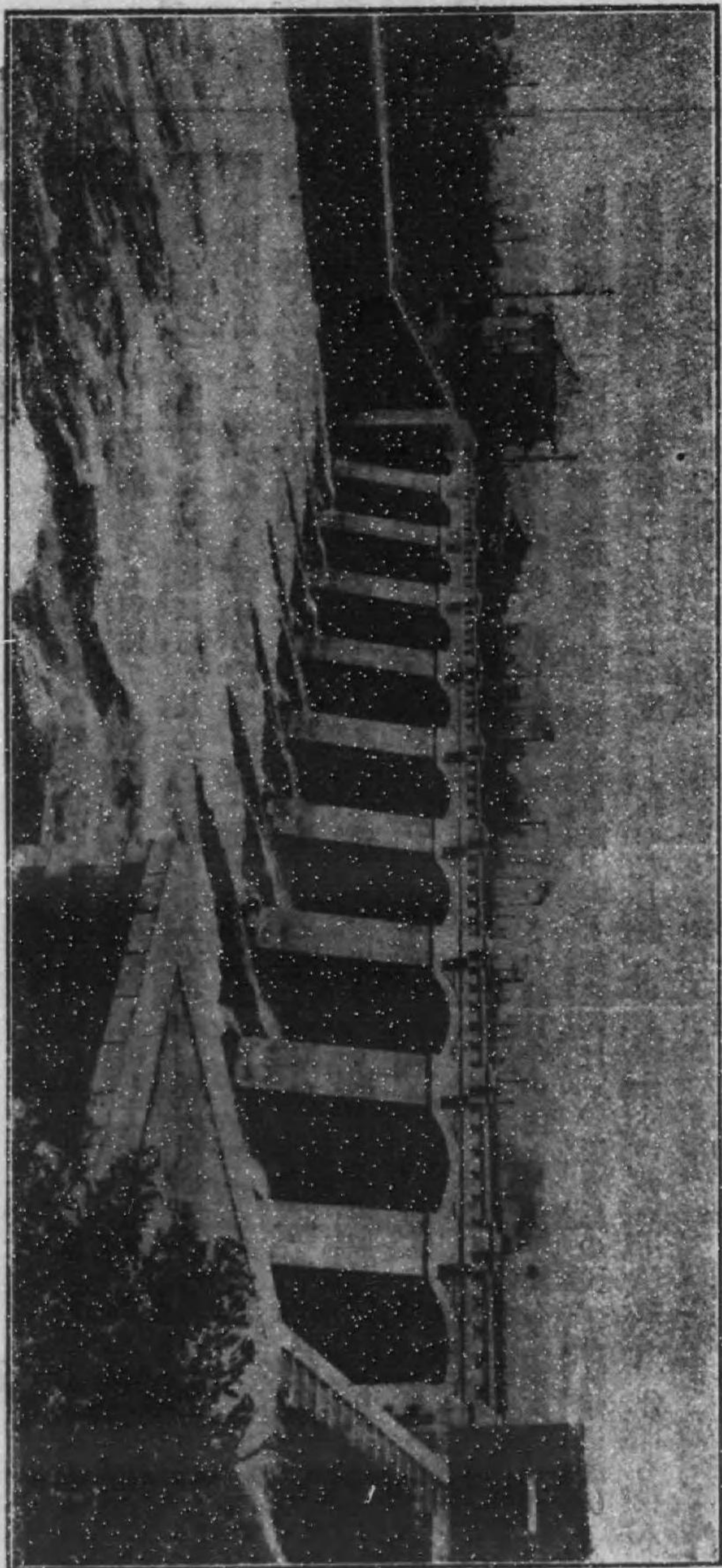
ならば、流れの人の此後は、絶て心中せぬやうに、守りたいぞ」と及びなき。願ひも世上のよまひ言、思ひやられて哀れなり。野田の入江の水煙山の端白くほのくさ、あれ寺々の鐘の聲、「こころくかふしていつ迄か、さても存らへ果ぬ身を、最期急がん此方へ」と手に百八の玉の緒を涙の玉に纏ませて、南無あみ島の大長寺、敵の外面いさ、川、流れ渡る橋の上を、最期所と著にける。(天の網島)

櫻の宮から北八丁善源寺町に蓮花で知られた母恩寺(市電都島橋の東北二丁)にある、その西、都島橋を渡つて二丁には、境内の櫻花で著はれてゐる鶴満寺(市電淀川の北一丁)があるが、共に首日の観はない

毛馬開門——母恩寺の北(市電都島橋の北数丁又は天神橋六丁目の東北方)にある、淀川と新淀川との交叉點で、水量を調節する爲めに造られた洗堰は見事なものである、その西方新淀川に一條の虹を渡した観がある長橋が、

長柄橋——(市電天神橋六丁目の北)俗に傳ふる「人柱」のそれではないが、其の古名に因んだ全長六丁、巾四間といふ大橋で、摘草に涼風に又は観月に蟲の音に散策の杖を曳くも興が深い。

大鹽平八郎の墓——市電南森町の一つ北の停留所、寺町で下車して西二丁、綿屋町の「生正寺」にある、



毛馬開門

大阪の興力で、中齊と號し、陽明學派の學者であつたことは人の知る處、天保八年（凡そ八十五年前）の大飢饉に際し、自己の藏書をも賣拂つて貧民の救済に努め、上書して米藏を開かんせしが用ひられず、遂に叛を謀つて市街を焼き、捕はるゝ及んで自刃した人である、藤田東湖が永井某へ宛た書翰の中に、中齊の性格を知る一文がある、参考の爲めに其一部分を載せよう。

一 平八郎此度の始末心組は、一朝一夕の故には有之間敷、尙八ヶ年以前、播州百姓亂妨有之、右の頭取召捕に相成兼候に付、同役其外懸意之者集會の節、いろく物語り、頭取召捕あまり延引及候由申候へは、其席に平八郎も居候處、いや頭取の急に召捕に不相成も一入御爲に宜しかるべし、一体太平打續候故、天下一統修増長、役人の奸曲の所行のみいたし、最早天道にも御用捨なき筈に候へは、七八年の内には必定大凶作到来、世上難儀可仕候、されは只今の内より御手當有之様其仕方はケ様々々に致し、萬一凶作の備を致候て間に合可申候、左も無之候はゞ、攝津播の民、皆飢饉に及び、必至と難澁善見候間、此事精々工夫之上、度々上訴いたし候へども、分寸の御取用ひ無之、此即ち役人共、己が身上のみ肥し、民の艱苦を顧ざる故に候、されは數年の内、大凶作到来、萬民飢饉に及候はゞ、不得

西山宗因の墓

已候間天道に代り、諸人を救ひ、奸曲の役人共に見せつけべきものと、鋭き目にてにらみつけ候様子、今も尙目に見候様覺候。其節は怪しからぬ大言を吐ちらし候事よと、うはの空に、一同承り居候處今更考へ候へは、最早此頃より心中に有之事と相見候。成正寺から西の寺町橋を渡つて二筋目の角、「西福寺」には、俳諧談林の一派を開いて天下に名を馳せ、俳諧の中興と迄いはれた西山宗因の墓がある。

去れば、こゝに談林の木あり梅の花 宗因

宗因は天和二年、七十八歳で難波の地で歿した、近松葉林子の戯曲と並んで大阪文學の種を植ゑた井原西鶴は、實に宗因門下の巨匠である。西福寺から西北二丁に前記本願寺がある。

—大阪城、船場方面—

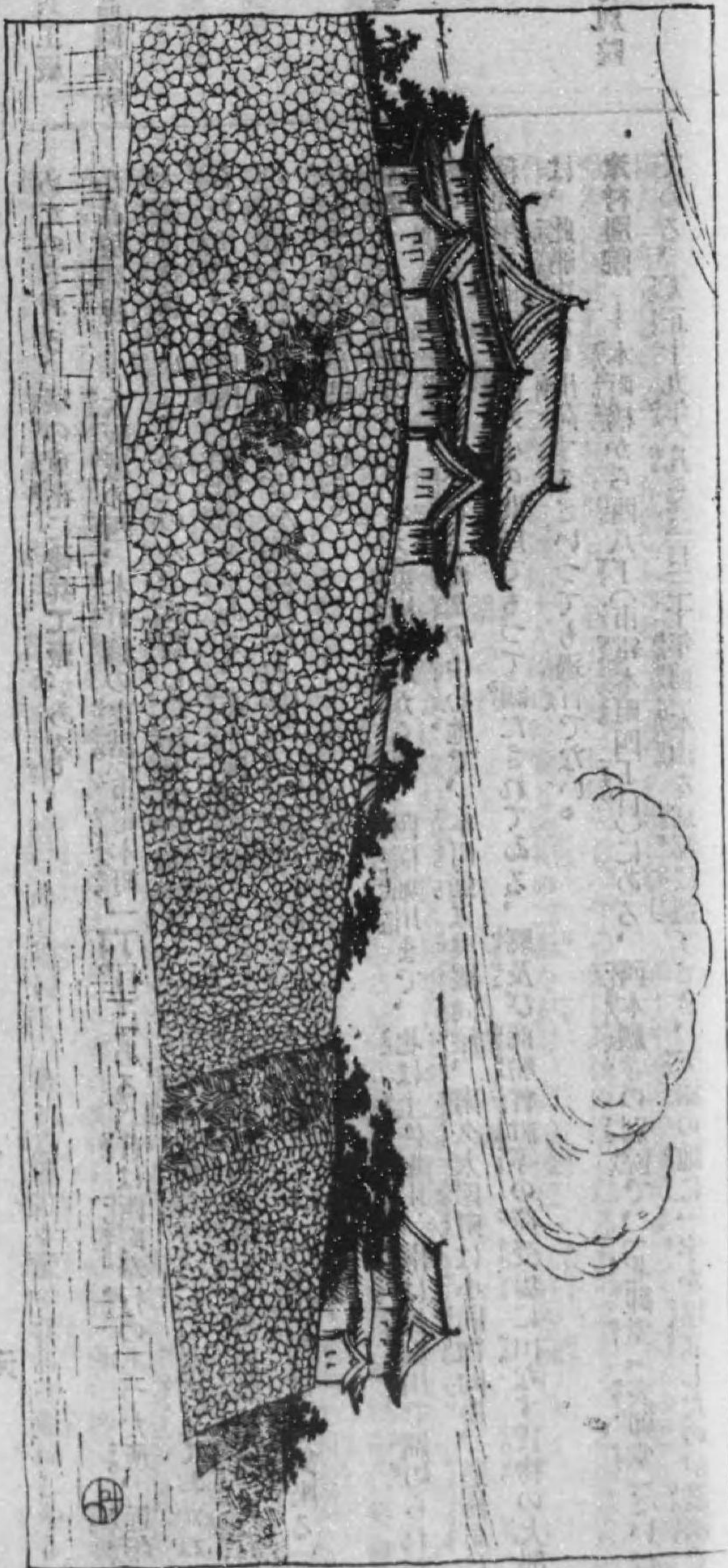
大阪城——市の東部にある、前記天満橋の南詰から東にとつて南に入れば至る（市電谷町二丁目又は三丁目目の東近く）豊太閣の偉業と共に知られた名城で、一に金城ともいふ、地は石山本願寺のあつた處、上古の仁徳帝の高津の宮や、孝徳帝豊崎の宮も此位置であつたといはれてゐる、築城當時は周圍三里に餘り、

大阪城

—大阪の見物—

三

外郭の北は今の淀川の左岸、離は玉造空濠を繞らし、東は平野川、西は東横堀を濠とし、高麗堀を大手口に、塹壁は悉く巨石の花崗石を用ひ、規模宏壯、要害堅固、所謂難攻不落の名を成した、内城又輪奐の美を盡し、千疊敷、朱塗の櫓、朱の多門、千利休の敷寄屋等結構雄大を極めたが、惜むべし慶長元和の役で徳川氏の爲めに外郭を毀ち、空濠は埋められ、豊臣氏亡ぶに及んで大半灰燼に歸した、之豊公築城より三十二年の後である、其後城郭殿舎は西國の大名に讓役して改修したが、萬治三年(凡そ二百六十年前)青屋口の火薬庫に落雷した爲めに火災を起し、寛文五年(凡そ二百五十五年前)には又々落雷して天主閣を焼き、天保十四年(凡そ八十年前)市民に課して殿舎諸門を修理したが、慶應三年(凡そ五十五年前)徳川慶喜大政を奉還して此城に退き、明治元年正月二日兵を率ゐて入朝せんさせしが官軍の爲めに撃退せられ、七日大阪に歸り急に軍艦に移つて江戸に走つた、其翌々日城内に火を失し、僅に追手、京櫓、玉造、青屋の四門と數箇の櫓を残すのみで他は悉く灰燼に歸した、されど今尙周圍一里に及び、白塹の城壁高く城濠の巨に聳れ、巨石を以て疊みたる石垣等(巨石の大なるは十八坪餘)、其宏大な昔の様を伺ふことが出来る、明治二年兵部省出張所を設置、之れ第四師團司令部の濠で、四年大阪鎮臺となり、同廿一年今の名に改



善佳春

城

阪

大

砲兵工廠

めたのである、城の東北に砲兵工廠がある。

商品陳列所

商品陳列所 — 大阪城の西、本町橋の東詰(市電本町一丁目)にある。昔は西町奉行のあつた所、近年まで大阪博物館といつてゐたのを、收束した石造の洋館で、大阪の商品を視察するには是非見ておかねばならぬ所だ、尙所内に發明館等がある。商品陳列所から北へ三ツ目の筋、内淡路町の角屋敷には、大石良雄から頼まれて討入の武器を調製した、俠骨大野屋利兵衛が住んでゐたといふ、「天川屋は男で御座る」と力味返つた男振が思はれる。

船場

船場 — 本町橋の架してある東横堀川から西、西横堀川まで、北は土佐堀川、南は長堀川で區切られた一劃の地をいふ、大阪に於ける商業の中心地で、本町筋は呉服同屋、南久太郎町は小間物同屋、道修町は藥種問屋其他至る處大小の間屋でもつて満たされてゐる、驛及び商船會社等の荷受場に山なす貨物の大部分は、此船場から出荷するといつても過言でない。

津村別院

津村別院 — 本町橋から西八丁(市電本町四丁目)にある、西本願寺の別院で、「北御堂」「表御堂」といはれてゐる、天正十九年(凡そ三百二十年)本山を京都に遷すとき、天満の地に一字を建立したのが濫觴で、

慶長二年(凡そ三百二十年)に准如上人が今の地に移し、同十年家康の命によつて、石山の舊基に授し本堂を造營せしが、享和年間(凡そ百廿年前)に焼失し、今の堂は其後再建したるものである、本尊は安阿彌作の阿彌陀佛で、二尊堂に蓮如上人筆の親鸞と蓮如の二影を安じ、轉輪藏に一切經を藏む。

西風に何ぞ自力の扇つれ

宗因

寺域廣大、殿堂壯嚴、四時稱名の聲靜かに流れて、自ら欣求淨土の念を起さしめる。

御靈神社

御靈神社 — 津村別院の北三丁(市電京町堀の東二丁)にある、天照大神外四座を祀る、創建年代は詳でないが「中相津村宮」と稱したと傳へ、舊幕時代には城代の崇敬が篤かつた社といふ、境内の西南隅にある文樂座の人形淨瑠璃は、浪花文藝の精華として名高い。

文樂座

難波別院 — 津村別院の南三丁(市電本町四丁目の南方)にある、東本願寺の別院で、「南御堂」「裏御堂」といふ、文祿四年(凡そ三百廿年前)教如上人が攝津渡邊の地に一字を建立して、大谷本願寺と稱したのが創始で、慶長三年に今の地に遷し、正徳二年(凡そ二百十年前)本堂を上棟し、本尊は阿彌陀佛で、兩脇壇に親鸞と前住の二影を安じてゐる、門を入れば、殿堂高く聳れて、そゞろ他力本願の法惠を想はしめる、本

堂の北手の小丘に

庭に病み夢は枯野をかけめぐる

芭蕉

芭蕉絶吟の句碑が垣の間から見ゆる、芭蕉終焉の地は門前の南久太郎町、御堂筋東入花屋仁兵衛の小庵で翁の最後は聞くもあはれである。

座摩神社

座摩神社——南御堂の裏、穴門といふ石燈門を抜けて南に半丁(市電阿波座中通の東二丁)にある、古來生國魂神社と並稱せらるゝ延喜式の官幣社で、宮城地の靈たる生井神以下五柱を祀る、神功皇后三韓より凱旋の後、御船を浪速の岸、浮見石に寄せられて神靈を奉祀し給ふと傳ふ、舊時は大江の岸の國府町(今の石町)に鎮座されたのを、寛永年間(凡そ三百年前)に現在の地に遷座したのである。社殿壯嚴、境内に稻荷社、陶器社、大江社、田養社の攝社がある。

「かくて彌次郎兵衛北八は思ひもよらず百兩の富にあたり。忽ち勢ひをゑて、座摩の社をいでしより煮うり茶屋に入りて酒汲みかはし、ほろ酔ひ機嫌となり、心おもしろけに浮かれ立ちて、案内者の佐平次にひかれ、難波御堂の穴門より御境内を順拜しながら

おふみさまと聞けば女の名にも似て、あらありがたの穴かしこなり。

それより仁徳天皇の社にまゐる。これは世俗に博勞町稻荷といふ、博勞稻荷は別に境内にあり。

博勞のいなりといふもこそわりや、繪馬賣りて食ふ店も見ゆれば。

田樂茶屋「お入りな、お入りな、田樂の焼きたて上らんかいな」北八「エ、知れた事をいふ。田樂のさ

めたのがいけるものか」芝居の木戸「サア今が盛衰記無間の鐘ちや、評判々々」彌次「無間の鐘もすさま

じい、こつちは百兩取つてゐるは途方もね、コウ北八ナント是から新町さやらへ云々、(膝栗毛)

難波神社——座摩神社の東南三丁にある、天正の頃(凡そ二百五十年前)に平野郷から遷座された社で、仁徳天皇を奉祀してゐる、本社西側に稻荷神社がある、俗に博勞町稻荷といはれてゐる。

——心齋橋、道頓堀、高津方面——

心齋橋

心齋橋——難波神社から東へ一筋よると心齋橋通で、南に三四丁行くに至る(市電心齋橋)、長堀川に架した長さ廿間一尺、巾四間といふ美麗な石造の眼鏡橋で、明治四十二年の竣工である、此橋の通り筋は「心齋橋筋」といつて、小賣商業の中心地で、店頭綺麗を競ひ、顧客の目を惹いてゐる。心齋橋から南に數丁

御津八幡
三津寺

八幡筋を西に三筋目、佐野屋橋筋の角に御津八幡がある、行基が神託に依つて豊前宇佐から勧請したる社で、島の内の氏神である。又もこの心齋橋筋にかへり、一筋南の辻を西へ入ると、三ツ寺がある、眞言宗で大福院といひ、行基作の十一面観音を安置してゐる、當寺は毎月行事の大師めぐりの打ち留にて、其日は賽者で雑沓を極める。

道頓堀

道頓堀——戎橋の南詰から東、日本橋の間が道頓堀での最も股賑を極めてゐる、此堀は安井道頓が私財を投じて、梅津川と呼ぶ小渠を開鑿した處で其名がある、後芝居が許可せられて、所謂五座の繁昌に三郷隨一の榮華を競ふた、其住時を偲ぶには餘りに現代化してゐるが、今尙浪花、中、角、朝日、辨天と五つ櫓が軒を列べ、扇負々々の幟が賑しく立つてゐる、戎橋の西が九郎右衛門町で、その南が難波新地、東の阪町櫓町と道頓堀の對岸宗右衛門町との五ヶ所を總稱して南地五花街といふ、柳は緑、花は紅の色街である、春には芦邊踊が演舞場で催される。

南地五花街

千日前

千日前——道頓堀から道を南に入つた所で(市電千日前)、往昔は千日寺の刑場とて、陰慘を極めた處だが明治初年難波溝の側の見世物に移されて、忽ち華やかな地區に變じた、恰度東京の淺草、京都の新京極と



道頓堀

樂天地
芦邊劇場
法善寺
自安寺
竹林寺

戎橋通

難波驛

湊町驛

大乗坊

安井道頓の
紀念碑
法案寺

いつたやうな處で、晝夜燈子の鳴物が絶えない、樂天地といふ大娛樂場や芦邊劇場を初め、数多の活動寫眞館、其他様々の興行物、飲食店等が集まつてゐる天下屈指の平民娛樂場である。附近には、自安寺、竹林寺等がある。法善寺には落語の寄席や料亭等があつて、日夜雜沓を極め、竹林寺には弘法大師、自安寺には妙見菩薩を安じてゐるので、場所柄でもあり花柳界の女達が纏らす盛況をしてゐる。千日前の一ツ西の筋が戎橋通で、北の心齋橋筋に劣らぬ繁昌を示してゐる。戎橋通を南に突當ると、和泉、和歌山方面に通じてゐる南海電車の難波驛がある。又道頓堀を西に行くに湊町で、そこには河内、太和、伊勢、名古屋方面に通じてゐる關西本線の湊町驛がある。

大乗坊 千日前から東に出で、日本橋筋を南に三丁(市電日本橋三丁目)にある、弘法大師の建立、本尊は春日作といふ日本四毘沙門天の一つである、今の堂は明治二十七年の再築、俗に長町の毘沙門さんといはれ、賽者が常に絶えない、日本橋筋を北に、道頓堀に架した日本橋を渡るに、安井道頓の紀念碑が建つてゐる、先年有志者の手によつて建設されたもので、そこを東に一丁(市電)行くに北側に、法案寺がある、俗に「南の坊」といひ、此處には歡喜天を安置してゐる、同境内に辨天堂や大師堂があるので、例月廿一日の

高津神社

高倉稻荷社

お大師巡りの雜沓はいふまでもなく、場所柄花柳界の女が絶えず自分勝手なお詫を列べに來る。

高津神社 法案寺の東五丁(市電下寺町の東北)にある、仁徳帝以下五柱を祀る古社で、考證すべき確たる記録はないが、貞觀八年(凡そ千六十年前)奉幣使を遣はされたといふ傳説もある、古は石山(今の大阪城の地)にあつたのを、豊公築城の際奉遷したものである、境内に高倉稻荷社及び仁徳帝の高臺紀念として建築された望遠亭がある、地高燥、市の西半を一眸に望み、殊に雪景色は知られてゐる、西門の石段は俗に三下り半と稱へ、夫婦連れで通ると縁が切れるといひ傳へる、箸豆や浮氣者は是非試むべきである

「遠眼鏡屋」サア見なされ、見なされ、大阪の町々蟻の這ふまで見わたる、近くは道頓堀の人の群集あの中に坊様が何人ある、お年寄にお若いしゆ、お顔のみつちやが何んぼある、女中方の器量、不器量ほつこり買ふて喰べてござるも、濱側でしなざるも、橋詰の非人が褌袴の虱なんぼ取つたといふまで手に取るやうに見ゆるが奇妙。また風景を御覽なら、住吉沖に淡路島、兵庫岬、須摩、明石、大船の船頭が飯何杯くた、何くた角たもいつきに分る。また不思議は、此眼鏡をお耳にあてるに、芝居役者の聲色、つけ拍子のかたりく、残らず聞えて見たも同然、お鼻によすれば、いろはの饅頭にほひぶんく

さ、あがつたも、然、たゞの四文では見るがお徳ぢや。千里一目の遠目鏡これぢやこれぢや」彌次「めがね屋さん、音に聞いた新町ぢやらも近く見るかね」めがね屋「さよちや、このお山のツイねきに見ゆるわいな」彌次「それぢやア、ちかくに見ゆるのぢやね、遠く見ゆるのだ」めがね屋「なぜもし」彌次「ハテ此高津と新町との間は、たつた一寸三分ほかねにもせぬものを」めがね屋「ソリヤおまい大阪の繪圖で見てかいな」彌次「さやう／＼ハ、先づお宮へまゐらう、ハ、アいかさまい、お宮た」二人とも神前にぬがづき奉り。

もろ／＼の神に背比べしたまはゞ、さこそたか津の宮のたふごさ。(藤栗毛)

生國魂神社
北向八幡宮
浄瑠璃神社

生國魂神社——高津神社の東三丁(市電下寺町)にある、官幣大社、大八州の靈と崇め奉る生國魂、足國魂の二柱を祀る、當市最古の宮居である、往昔は今の大阪城の位置に鎮座されたのを、豊公築城の際今の地に遷座せられたのである、先年南區の大火に延焼し、現在の社殿は大正五年の造營で、八ツ棟造りの神殿甚だ壯嚴を極め、境内高燥繪馬堂からは遠く茅停の海を隔て淡路の青線が見ゆる、昔は生魂の夜櫻といつて、新町の九軒と併稱せられたものだが今はない。社前を右に入ると北向八幡宮、左に浄瑠璃神社

がある、北向八幡宮は慶長年間(凡そ三百年前)創建、大阪城鎮護の爲め北向にせるより其名がある、又近松の戯曲でお馴染の生玉心中は、此社の附近でやつたといふ。

祭文「阪町邊のな通筋、柏屋内におさがきて、年は廿のヨイ花盛り、客茶客茶の揚詰を、貸の賈ふの暇無き、愁ひ勤の中に扱、深い願は一つ屋の、嘉平次故に身を陥めて、變るまいこの七夜起請、書て二人が取替す、小指の血汐杉原に、押て心を御垣守、衛士の焚火と品替る、彼小林が舞扇。是れも浮世の形見こそ、今は仇なれ松風や、無常の風も立騒ぐ、辨財天の饅口の、饅口の口より恐しき、追手の聲のあれ／＼、追へて爰に北向の、八幡宮の燈明も、自然と濕り行先は、罪業の程思はれて、呵責恐し鬼窟の寺の敷垣物凄く、身を顛はしてぞ立にけり。(生玉心中)

浄瑠璃神社——は竹本義太夫を祀る處、義太夫は天王寺村の農で五郎兵衛といひ、音吐清明、宇治嘉太夫の門に入り、近松門左衛門を作者として自ら仕打となり、竹本座を創立し浄瑠璃の普及に努めた人である生國魂社の表門前を南に、源正寺阪に到ると昔から彼岸櫻で著はれてゐる隆専寺がある。

——五造、上本町方面——

大阪の見物

隆専寺
浄瑠璃神社

玉造稻荷

玉造稻荷——(市電東雲町)停留所から二筋東の辻を、北へ二丁にある、宇迦靈神以下五柱を祀る、曾ては「姫の宮」ともいつた社であるが、創建年代は詳でない、天正年間(凡そ三百年前)兵火に罹り後豊臣秀頼が再建したといふ、近年地区の発展に伴ふて、大いに面目を改めたので一層尊嚴を加へた、境内敷多の攝社未社がある、社後の舞臺の眺望は世に知られてゐたが、今は人家建ち連つて駄目になつた。社の東北四丁、森の宮東の町に森の宮がある、聖徳太子の御父用明天皇を奉祀する社で、日本紀に鶴を難波の森に養はしむとあるは此地のことで、社の左側に蓮如上人が立がらの松を植付たものが生育したと傳ふる、枯木の太株がある。

森の宮

真田山

三光神社
姫山稻荷社
壽老神社
ドンドロ大
師
圓殊庵

真田山——玉造稻荷の南二丁(市電玉造の西南近くにある)城南に當る丘陵で、真田幸村が出丸を築いたといふので真田山と號び、又加賀幸村が陣を此處に設けたとも傳へるので又の名を幸相山といつてゐる、今は其一端に仁徳帝を祀る三光神社及び、姫山稻荷、壽老神社等がある。真田山を北に、石段を下つて空堀通を西に、三ツ目の筋を西南に阪を上ると、登りかけに阿波鳴戸の淨瑠璃で知られてゐる、ドンドロ大師がある、二丁程いつて餌差町を西に曲り、尙一丁程も行くに北側に圓殊庵がある、庵は國學者として有名な

仁徳帝高津宮趾

梅川忠兵衛

産湯稻荷

契沖阿闍梨の舊居で、境内に鎌八幡、續觀音等がある、圓殊庵から一ツ西の、學校のある筋を南に、初めの辻を東に折れると、仁徳帝高津宮趾がある、仁徳帝千五百年祭に篤志の人々が集まつて建碑したものであるが、果して宮趾なるやは信じ難い。途次傳光寺に梅川忠兵衛の墓がある。

梅や先仁徳の御代所の春

宗因

産湯稻荷——高津宮趾の南方、(市電上本町六丁目の東四丁)小橋東の町にある、天兒屋根命十三世の後胤大小橋命が御誕生の砌、産湯に用ひられたといひ傳へる「玉の井」といふ清泉があるに因んで名づけられたる社で、特筆すべき程の由緒はない、祭神は豊受大神であるといひ、丘側に穴が多いので俗に狐穴たと呼んでゐる、近年迄此附近一帯は桃林であつたが、今は人家建ち詰つて「桃山」の名を残すのみである、又日本紀に見えてゐる小橋の里は此邊の地名であるといふ。

しのぶれと人はそれぞとみつの浦に、わたりそめにしいかい津の橋

小野小町

産湯稻荷の西(市電上本町六丁目)に大軌電車がある、同線は此處を起點として、生駒、奈良、郡山、丹

大軌電車

—大阪の見物—

波市、岨傍方面に通じてゐる。

井原西鶴の墓

井原西鶴の墓——大軌電車の北方上本町四丁目の「誓願寺」にある。西鶴は元禄初年大阪に在りて、戯作に従事したる人で、「五人女」「一代男」等の著述は有名である。元禄六年此地で歿した、行年五十二歳、

浮世の月見過ごしにけり末二年、西鶴

近松門左衛門の墓

誓願寺の北の辻、墓の谷を西へ三ツ目、谷町を南に入つた「法妙寺」に、近松門左衛門の墓がある。性を杉森、名を信盛といひ、通稱を平馬と呼んでゐた、號を平安堂又は巢林子といひ、長州萩の人である。中年

宇治藩太夫、坂田藤十郎等の爲めに脚本本を作り、元禄二年大阪に来て竹本座の座附作者となり、著作數百種、英の文豪沙翁に比す者がある、博學多識の文才で、大阪趣味の種を植へた人である。

吉祥寺

吉祥寺——市電上本町八丁目の西、又は推寺町の北二丁、六萬體町にある、赤徳の城主淺野内匠頭が深く歸依した寺で、山門に掲ぐる扁額は侯の筆である、尙同寺に四十七士の木像がある、寺の西南方夕陽ヶ丘は新古今集の選者家隆卿が隱棲して、

夕陽ヶ丘

契りあれば難波の里に移り来て、波の入日を拜みつるかな。

家隆卿

大江神社

大江神社——夕陽ヶ丘の南、勝曼坂の上（市電推寺町から西に、電車路に沿ふて南に折れ、初めての辻を西に曲ると至る）、祭神は豐受大神で天照大神、猿田彦、日吉稻荷等の攝社がある、土地高燥、舞臺の眺望がよい。

勝曼院

勝曼院——大江神社の東隣で、昔聖徳太子が勝曼經を誦じ給ふ舊蹟として其名がある、本堂に變染明王を安置し、多寶塔に大日如來を安置してゐる、此地戦國時代には勝曼壘のあつた處で、本願寺が織田信長と戦へる時に築きしものといふ。大江神社から西手の坂を下ると、下寺町の角に遊行寺がある、圓成院と號ひ、薬師如來を安んじてゐる、寺は一週上人の舊蹟で其名がある。

遊行寺

新清水寺

新清水寺——大江神社から南一丁、冷人町にある、本尊は聖徳太子作の十一面觀音で、初め京都清水寺の別院に安じてゐたのを、寛永十七年（凡そ二百八十年前）阿闍梨延海が此處に遷し當寺を建立したのである。舞臺から左へ石段を下ると、音材の瀧といつて申譯だけの瀧があるが、常に門を閉て入れない。

—大阪の見物—

—天王寺、新世界方面—

大阪の見物

四天王寺

- 石の鳥居
- 五重の塔
- 金堂
- 太子堂
- 講堂

四天王寺——市電天王寺西門——新清水寺から南に二丁電車道に出で、東向く名高い四天王寺の石の鳥居が見ゆる、天皇宗、荒陵山と號ふ、聖徳太子が守屋征討に際し、四天王の冥護を得給ひ、用明天皇二年(凡そ千三百三十五年)玉造の岸上(今の森の宮附近)に創建、後故ありて推古天皇元年(凡そ千三百二十年)現在の地に移轉、從來塵々兵燹に罹り、今の七堂は享和元年(凡そ百二十年)雷火で全焼の後、島の内の紙屑商淡路屋太郎兵衛が勧進して再建したるものであるが、その堂の配置だけは飛鳥時代の面目をその儘傳へてゐる東西八丁、南北六丁に亘り寺城二萬九千三百餘坪に及ぶ、南門、仁王門、五重塔、金堂、講堂、六時堂、食堂の百濟式七堂伽藍を初め、用明殿、引鑿堂、布袋堂、短聲堂、納骨堂、經書堂、三昧堂、大黒堂、元三天師堂等の四十近い堂舎がある、南門が本門で西門にある石の鳥居は高さ二丈七尺額書は小野道風の筆といふ、五重の塔は高さ廿四間餘雲水の彫刻があるので雲水塔の名がある、料金を拂つて登ると四邊目を遮るものなく、頗る眺望に富んでゐる、金堂には百濟傳來の金銅佛本尊如意輪觀音、脇に彌勒佛四天王の像を安置し、東南の一廊太子堂には太子自作十六歳の尊像を安じてゐる、堂の傍にある猫の門は名人左甚五郎の刻せるものとして世に名高い、講堂は太子が經典の講義をせられし所、彌陀、觀



四天王寺の石の鳥居

六時堂

音、勢至、盧舍那、四天王像等を安置す、六時堂は六時禮讃動行の場所であり、始め傳教大師が比叡山の根本中堂を移して造營したもので、禪定の席までも設けてある又境内の北部にある大梵鐘は大きさにかけては世界一といふが今に一度も鳴つたことがない、兎に角日本佛法最初の伽藍の地として、春秋彼岸會の如きは、參詣者で非常な雑沓を極める、又楠正成の天王寺の陣が名高い、元弘二年の夏、楠正成が和泉河内の兩國を靡け此處に陣を構へた、其事が早くも兩六波羅に聞これ、關田、高橋を大將として五千騎討手に向つたが、正成の計略でさんぐに討ち破られ道々の體で京都へ逃げ歸つた、其後へ宇都宮公綱が僅かに七百騎をもつて攻め寄せて來た、正成合戦の勝負は兵の大小に依らず、志を一にするこそざるにありとし、天王寺を去つて勝を宇都宮に譲つた、四五日を経て正成は方々の峰に篝火を焚かしめ、今にも大軍が押し寄せせるかの様に見せかけて、一戦をも交へずして遂に宇都宮を走らしたことが太平記に見えてゐる。

庚申堂

庚申堂——天王寺の南門から南へ一二丁にある、大寶元年の正月（凡そ千二百廿年前）に感得したといふ我國最初の庚申で、歳日の申の日は參詣者で雑沓を極める、近松の「心中宵庚申」や「心中二腹帯」などは此

舍利寺

處でのことであるといふ。
舍利寺——天王寺の東門から東十丁餘にある、聖德太子の開基、本尊釋迦如來を安置してゐる、太子が唾子の口中から舍利三顆を出して唾を治されたに起因するともいひ、天王寺建立に際し、佛舍利を預けられた處ともいふ、境内に西國卅三所の靈場に模した石像がある。

一心寺

一心寺——天王寺西門の西二丁（市電天王寺公園前）にある、淨土宗鎮西派、圓光大師（法然上人）草庵の舊跡で、同大師廿五跡の一といふ、文治二年（凡そ七百四十年前）上人四天王寺の慈鎮和尚の招請に應じ、西門に草庵を結び「新學院」と號して茲に住せらる、中興は本譽上人で本尊阿彌陀如來を安じてゐる、境内の數寄屋は小堀遠州の好みで、八ッ窓の茶亭殊に名高く、本多忠朝や、小西來山、八代目團十郎等名士の墓もある。

安居天神
眞田幸村戦
残の碑

安居天神——一心寺の向ひがそれである、菅原道真公を祀る處、境内に眞田幸村戦歿の碑がある、元和元年五月七日、幸村は最後の血戦に老帥家康を屠らんものご、敵の一二軍を撃破し、それやつては一大事と遮る本多忠純や日根野吉明を二撃に走らし、旋風の如く家康の本營に突入つた、早くもそれを知つた家康

—大阪の見物—

は身を以て逃れ危機を脱した。幸村は本營の急を見て、集まり來つた諸將の重圍を衝き破り、一地點に身方を蒐集し、再び機を見て家康の本營を突いたが、厚運なる家康は又々危難を免れた、奮戦數刻、遂に首を敵に授けたのである、享年四十六歳。

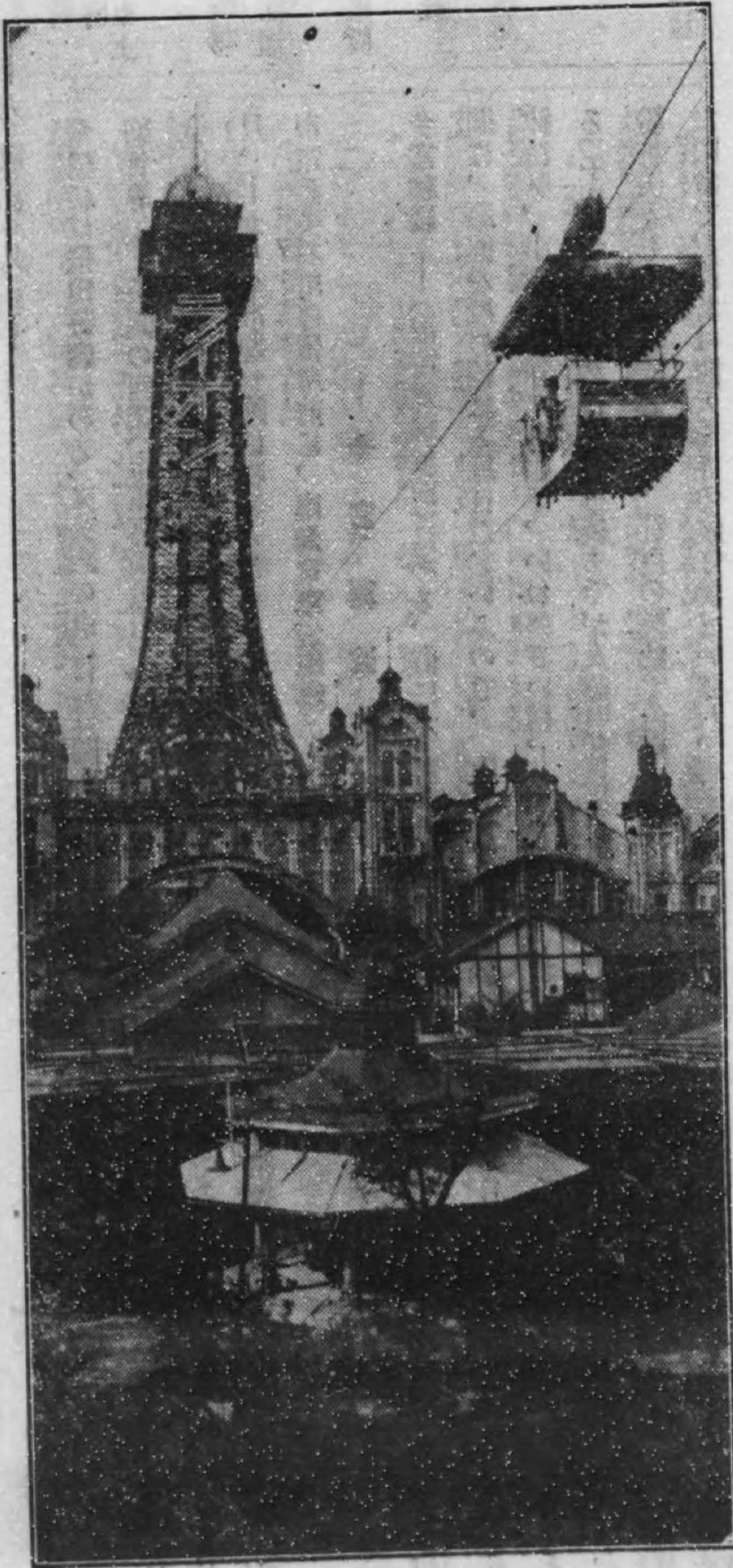
茶臼山
邦福寺
合邦ヶ辻

茶臼山——一心寺の南方に見ゆる小さい山がそれだ、山は古墳で、松樹雜木密生して「荒陵」の名を思はしめる、元和の役に徳川家康が陣所を構へた處で、木村重成が血判を迫つて、老雄家康の膽を挫いたのもこゝだが、四邊の風物移り變つて慶元の昔を偲ぶ由もない、麓の池を河底池と呼んでゐる、南岸にある邦福寺は、俗に「雲水」といひ、精進料理で知られてゐる。又戯曲で名高い合邦ヶ辻は一心寺の西、市電公園前停留所の處をいふ、石像を安じてゐる閻魔堂には、香煙縷々として賽者常に絶ない、往昔は此處に學寮のありし爲め「學寮の辻」が何時しか合邦の辻と訛傳されしものといふ。

天王寺公園——市電天王寺公園前地は明治二十六年第五回博覽會の催された跡、面積四萬餘坪、東部は四季の草花色彩る西洋式で、西部は雅趣ある日本式の風致を備へてゐる、運動場、公會堂、市民博物館、武徳殿、奏樂堂、植物温室、動物園等があつて花によく、月に涼しく、本市最大の公園である、公園の南方

天王寺公園
運動場
公會堂
市民博物館
武徳殿
奏樂堂
植物温室
動物園

新 世 界



飛田遊廊
天王寺驛
南海電車上
町線
新世界
ルナパーク
通天閣
うしウム温
泉
國技館
南海電車阪
堺線
今宮神社

飛田には飛田遊廊がある、又公園の東口には關西本線の天王寺驛及び南海電車上町線の起點がある。
新世界——公園の西隣(市電惠美須町)、市民歓娛の一廓、ルナパークを初め、劇場、活動寫眞、寄席、飲食店、酒樓等あらゆる色彩を集め、日夜股賑を極めてゐる、天空高く聳れてゐる通天閣は、高さ二百五十尺、上から全市を一瞬に收めることが出来る附近に、ラジウム温泉、大阪相撲協會の國技館等がある。又市電惠美須町停留所に、南海電車坂堺線の起點がある。

—今宮、難波方面—

今宮神社——(市電戎神社前)にある、俗に「今宮の戎様」と呼ぶ神社、毎年一月九日、十日、十一日の三日間は、福德を授け給はる縁日たさいふので、夥しい参詣者が郡集する二十日戎の賣物は、はぜ袋にさり鉢錢、小判に錢箱立鳥帽子、いれ鉢さい槌、たばね炭斗、お笹をたたくて千鳥足」と俗語に唄はれてゐる「子寶」や、鈴、鳶口等と布袋までが友達甲斐に賣物となつて景氣を添はる、南地遊廊から藝妓や舞子が粉粧美々しく寶惠籠さいふ、紅白の縮緬で色彩つた吊籠を打たせて、参詣する行事がある、然し平素は甚だ閑寂で、往昔は四天王寺の鎮守神といはれ、毎秋西門の鳥居際まで、神輿の渡御もあつたが今は全く廢

廣田神社

された、社の北二丁に天照大神の荒魂を祀る廣田神社がある。附近は「今宮は虫さこなり響なり」と暗に當局を罵倒した、小西來山の十萬堂のあつた處、來山は享保元年此地で没した、辭世に

來山は生れたさかて死ぬるなり、それで怨みも何もかあなし。 來山

大國神社

木津助助の銅像

大國神社——今宮神社から西へ電車路に沿ふて、次の停留所大國町を北へ二丁(市電大黒神社前)にある、祭神は七福神の大黒さんで、甲子の日は殊に参詣者が多い、近時社の南手に、木津助助の銅像が建設された。附近の市場は子守唄に「ねん／＼ころいち、天満の市よ、大根揃へて船に積む、船に積んたら何處まで行きやる、木津や難波の橋の下、橋の下には鷗がおぢやる、鷗とりたや竹ほしや」等と唄はれてゐる木津の市場である。

木津の市場
八坂神社

八坂神社——大國神社の一ツ北の停留所(市電八坂神社前)を西に入るに至る、祭神は素盞男尊、境内に稻荷社、天満宮、八王子社等の攝社がある、俗に難波の綱曳きヨイ／＼といふのは、此神社の神事をいふのである。

鐵眼寺

大阪の見物

鐵眼寺——八坂神社から、もこの電車路に出て、北へ三丁(市電元町二丁目)にある、黄檗宗、慈雲山瑞

赤手拭稻荷

龍寺といふのが本名で、往昔は薬師寺といつてゐたが、寛文十年（凡そ二百五十年前）鐵眼和尚が中興してから今の名に改めた、延寶四年（凡そ二百四十年前）に信徒の淨財を以て本堂、禪堂等を上棟したといふ巨刹で、本尊は薬師如来である、又中興の鐵眼和尚は一切經六千七百七十一卷、その木版六萬枚といふ大冊を收版したといふ傑僧で、天和二年（凡そ二百卅年前）の大飢饉には、一ヶ月間、日に一萬餘人に飯米を施したといふ美譽もある、鐵眼寺から西方十丁稻荷町に赤手拭稻荷がある、（市電赤手拭）社の附近は昔一面の藍畑であつたが今は市の發達につれて町の真中になつて仕舞つた、社について赤手拭を着けた狐云々など、面白い傳説がある。

—堀江、新町、棧島方面—

四ツ橋

四ツ橋——心齋橋の二ツ西の橋で、前記鐵眼寺からは北行の電車に乗ると至る、（市電四ツ橋）長堀川と西横堀川の交叉する處、東に炭屋、西に吉野屋、北に上繋ぎ、南に下繋ぎの四橋が、井桁の様に架してある、近時電車の橋が一ツ殖れて五ツ橋になつた、橋畔に

涼しさに四ツ橋を四ツ渡りけり 來山

新町遊廓

の句碑が立つてある、今は電車の交叉點として交通の要樞を占めてゐる。

新町遊廓——四ツ橋の北近くにある、寛永年間（凡そ二百九十年前）芹原を拓いて遊廓となし、一名瓢箪町と稱した處、日本三遊廓の一で、南通を越後町、北通を九軒と呼ぶ、九軒の夜櫻は古くから聞これた所だが、今はその面影を留むる位の櫻よりない、一碑あり

たまされて来てまこさなり 初櫻 千代

又戯曲夕霧伊左衛門の故事を以て有名な、吉田屋には夕霧の遺物が今尚残つてゐる。

「編笠深く打かぶりた 占者の、口から出次第、「サー、御遠慮はない、お出なされ、當卦、本卦、墨色の考、濃いか淡いを當るが奇妙、うせ物は存せず、待人は遅いか早いか、來るか來らんかの二ツ、當るも八卦、當らぬも八卦、何ちらでも見料は十六銅づ、申し受る、是ばかりは間違ひ御座らぬ、サー、これへく、彌次「ナント北八、おいらが明日百兩さる事、知れるか知れねへか、何にも慰み、見て賣ふ、「北八「コリヤお面白へ」彌次「モシ、わしが運を見てくんせへ」十六文出せは、占者、彌次郎の顔を横目に見ながら算木をならへ 占者「へ、アお前ららる仕合なことが出来るわいな」、彌次「左様

—大阪の見物—

吾

さ、大きに心當りがありやす、占者「卦は坤の卦、坤はこんくはい、俗に申す狐、即ち狐福と申して、誠に降つて湧いた様な幸が来るぞ見えます」、北八「コリヤ奇妙よく當りやした」占者「然し變卦は乾の卦、乾は、けんけれつの象、本卦の坤と變卦の乾と合して之を考ふる時は、易に曰く、乾坤二つ間をぬけ、離の卦に當つて中絶したり。さては玉なき空鐵砲と申す事御座れば、萬事にお心を附けらるゝがよござります」彌次「こいつはすこたんく。さういふ譯ぢやアねへ、もう此方の手に握つたも同然たもの、延喜のわるい」占者「イヤそこで當るも八卦、當らぬも八卦」北八「もうよしねへ、十六文たゞすてた」こ小言いひながら、こゝを打過ぎ行く程に、早新町橋を打ち渡りて瓢箪町にぞいたりける(藤栗毛)。

阿彌陀池
瀬江遊廓

阿彌陀池 — (市電阿彌陀池)にある、本名を和光寺と號ひ、元祿十一年(凡そ二百廿年前)智善上人の開基本尊は一光三尊の阿彌陀佛で、境内に阿彌陀池といふがある、偶然地名の相通じた處から、難波堀江の古い傳説に絡んで「普光寺如來の出現の靈蹟」なごあらぬ縁起で名高くなつた、例年淫樂會と灌佛會には賽者雜沓し、門前には一大植木市が催される。阿彌陀池の東にある遊廓が堀江遊廓で、阿彌陀池から西に二丁行くこ。

土佐稻荷

土佐稻荷 — (市電玉造橋の南)がある、舊土佐藩の藏屋敷跡で、今尙其名がある、倉稻魂命を祀る、明和七年(凡そ百五十年前)伏見から勧請したもので、維新後三菱の私有地となり、その寄進で社殿も立派になつた、境内櫻樹多く、花の頃は掛茶屋等を設け、夜櫻を賞観しに来る人で非常に賑ふ。

松島遊廓

松島遊廓 — 土佐稻荷の西(市電千代崎橋)、木津川と尻無川とに挟まれた、細長い半島形の處で、昔は寺島と呼んでゐた、明治初年に所々に散在してゐた小遊廓をこゝに集め、松島遊廓と名づけた、妓樓櫛比し、昨今櫻筋に數多の櫻樹を植附けて面目を一新した、廓内の南、花園町に天滿天神の御旅所がある、天神様でも一年に一回は此松島にお通ひた。

—九條、築港、江の子島方面—

竹林寺
美住吉

竹林寺 — 松島の西に架した花園橋の西詰を北に入ることある(市電花園橋)、淨土宗、元祿の頃(凡そ二百三十年前)に九條島を拓いた香西哲雲の建立した處、本尊の阿彌陀如來が、境内の竹から出現されたといふので其名がある。

美住吉 — 竹林寺の二ツ西の電車筋(市電花園橋)にある、祭神は表筒男、中筒男、底筒男の三神と神功皇

—大阪の見物—

九條新道

後の四柱を祀る、往昔淀川の下流は芦荻生茂りて、海波の荒むに委してあつたのを、元祿二年幕吏西哲雲が土豪池上某と謀つて四貫島、九條島を拓く時、産土神として勧請した社で、市の發展につれて遂に今日の如き社頭の殷賑を見るに至つた。附近の九條新道は、當市西部熱鬧の中心地で、小賣店軒を連ね繁榮を極めてゐる。

市立大運動場

市立大運動場——市の西部八幡屋町(市電運動場前)にある、停留所の西手に望める城郭のやうな頗る宏大なグラウンドスタンドがそれた、第六回極東オリムピック大會を皮切として永久的に施設されるもので總面積の中でトラックフィールドの坪数は一萬一千五百五十餘坪、トラックは一週四百米突、幅八米突、特別観覧席の前方には二百米突の直線コースが設けられてゐる、特別観覧席は全部鐵筋コンクリートで幅七間長さ七十間、十八階から成る腰掛が正しい段目を現して中央の一段高い所が貴賓席になつてゐる、此スタンドだけに七千人の觀衆を收容することが出来るさうで、普通観覧席はトラックの周圍大弓形に長さ百八十間、コンクリートで十五段の階段が造られ其收容人数は約二萬、尙其外に二萬人位の兒童を入れることが出来るやうになつてゐる、其他水泳場や野球グラウンド、庭球コート等遺憾なく整つてゐる理想的運動場である。

築港

築港——市の西方(市電築港)にある、北は安治川口より、南は木津川口に至る間に施設されたもので、海の大坂を一層偉大ならしむる爲めに、工費二千萬圓を投じて企畫せられ、爾來廿餘年、未だ大成の域に達せないが、其實易年額既に數億圓を上るの盛況を現じてゐる、内港は南北の突堤によつて圍まれ、中に二百五十間の棧橋及び數箇の船渠がある、水深は優に一萬噸以上の汽船を雙をも棧橋に横附にされる様になつてゐる、近く臨港鐵道其他施設が完成された曉は、商都の一大關門として海外にその覇を揮するであらう。附近に商船會社の汽船乗場及び大潮湯がある、大潮湯は毎年夏になると海水を引いて、陸上海水浴場を設ける。

川口波止場

川口波止場——茨住吉の北(市電本田三番丁)の西にある、安治川の上流で、數百の汽船が錨を下してゐる、商船會社、尼崎汽船會社等があつて、夥しい貨物が道の兩側に山積せられ、荷役の掛聲は汽笛と交錯して喧噪晝夜を分たぬ、中國、九州、四國の諸港はいふまでもなく、遠く朝鮮、滿洲に至る本邦第一の河港である。波止場の東が舊居留地で、支那人の商估が多い、木津川に架した、木津川橋を渡る江の子島

舊居留地

商船會社乘船場
大潮湯

大阪の見物

大阪府廳
警察本部
府會議事堂

雜喉場

大阪朝日新聞社
大阪毎日新聞社
中央郵便局
米穀取引所

大阪土産

で、そこに大阪府廳がある。明治七年に建てられた洋風の大建築物で、其隣に警察本部や府會議事堂等がある。
雜喉場——府廳の東雜喉場橋(市電山の子島)を渡るこそれた、大阪第一の魚市場で、東京の魚河岸といつた様な所、威勢のよい掛登や金鱗躍るの盛観は他に較ぶものがない。

——中の島(中央)、堂島方面——

大阪朝日新聞社——市廳舎の西、前記雜喉場から東行の市電に乗つて、信濃橋で北行に乗替へ渡邊橋で下車すればよい、朝日新聞社の北、堂島長町(市電渡邊橋)に大阪毎日新聞社がある、何れも石造の大洋館で共に東洋の代表的大新聞として、古い歴史と最も新しい設備を有してゐる。朝日新聞社の前が中央郵便局で、渡邊橋の北詰を東に行くに名高い堂島の米穀取引所がある、渡邊橋から北へ四丁(市電阪神電車前)に、尼ヶ崎、神戸方面に通じてゐる阪神電車の起點がある。こゝよりもこの大阪驛へは僅に東一丁である。

大阪土産——岩をこし、蒲鉾、昆布等。

大阪の交通

大阪の交通——

市内電車——全線賃金均一、片道七錢、往復十三錢、回数券十六回一圓、卅三回三圓。
東海道本線——大阪驛より、東、京都、名古屋を経て東京方面、西は神戸姫路を経て下の關方面に至る
福知山線——大阪驛より、神崎、有馬福知山に至る
西成線——大阪驛より市内櫻島驛に至る。
城東線——大阪驛より市内天王寺驛に至る。
片町線——市内片町驛より、大和木津方面に至る。
關西本線——湊町驛より、奈良、伊勢、名古屋方面及び王寺より、高野口、和歌山市驛に至る。
阪神電車——梅田町より尼ヶ崎、神戸に至る。
阪神急行電車——梅田町より、箕面、寶塚、神戸に通じ、更に、能勢、吹田方面に連絡してゐる。
京阪電車——天滿橋より、枚方、宇治、京都に至る
大軌電車——上本町六丁目より、生駒、奈良、郡山丹波市、畝傍に至る。
南海電車本線——難波より、堺、岸和田、和歌山市に至る。
同坂線——惠美須町より、堺大橋、濱寺、及び平野郷に至る。
同天王寺線——阿部野橋より、住吉(大阪府)に至る
同高野線——汐見橋より、橋本(紀州)に至る。

大阪の見物

京都の見物

26

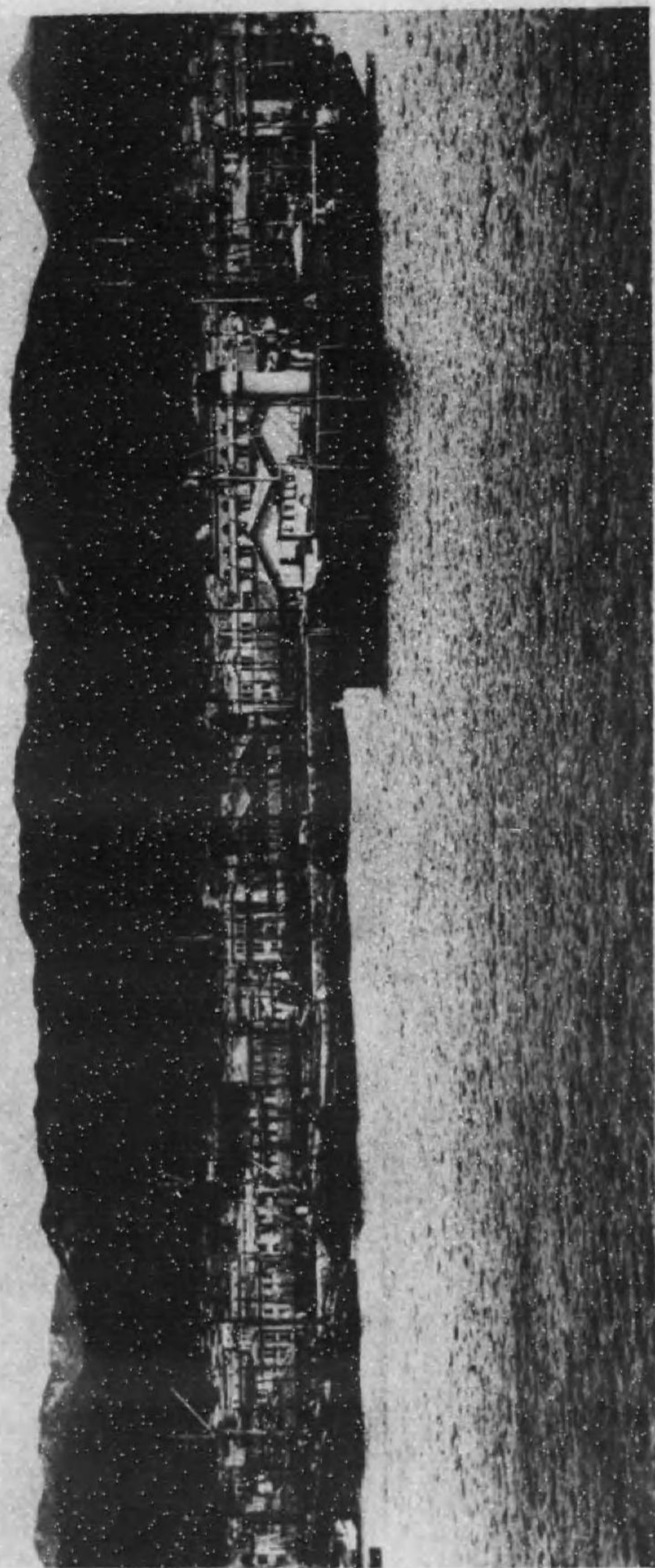
京都の沿革

ほこ、ぎす平安城を筋違ひに 蕪村

京都は人の知る如く、古の平安京で、桓武天皇都せられてより、七十二代、實に千七十五年間の帝都の地である。桓武天皇即位し給ふにあたり、奈良の都は地利不便なるのみでなく、永年の積弊が多くして、到底國運の進歩に伴ふことの不可能なるを思召し、都を遷して人心を新にし、皇紀を正さんものごと、初め山背國乙訓郡長岡に都を遷させ給ひしが、土地狹隘、永年の帝都たるの地でないが爲め、和氣清麿の奏請により、此地に新都造營の工を起さしめ、延暦十三年（凡そ千百卅年前）遷幸し給ふ、土地平坦、東、北、西の三面は山を資ひ、南面に清流を帶ぶ、即ち山河襟帶自然の城郭を成すによつて、天皇は山背を山城と改め、新都を平安京と名稱し給ふたのである。平安京は奈良の平城京と制は同じで、北は一條から、南九條迄、東は東京極から、西は西京極に至る間で、大内裡はその中央の北に位し、大極殿、武德殿、皇后其他百司の諸寮があつたのだ、大内裡の南北に通ずる大路を、朱雀大路と名付け



清水寺 (五九事記)



路を境として、左加茂川の礫を限り左京（東京極）といひ、右雙ヶ岡（今の花園村邊）を限りとして右京（西京）と名付けた。新都造營の工に着手したのは延暦十二年で、すつかり出来上つたのは、同二十五年即ち十三年の後であるから、宮城の尊嚴はいふまでもなく、新都の規模頗る宏大なることが伺はれる。されど市街の西部即ち右京は人家少く、新都造營より百八十年程後の天延の頃には「二十年以來東西京を歴するに、西の京は人家漸く稀にして殆ど幽墟に幾し、人は去るあれども來るなし」と、古書にあるが如くに、人家稀なる田園に化して仕舞つた。之に反し、左京は大家頗る多く、年と共に繁昌は東遷し、洛外白河の地迄も延び「京白河」の名を起さる位に繁榮を來した。

此地の隆盛期は延暦造營の後、二百年間程が、其最たるもので、即ち平安朝時代の文華が燦然たる時である。藤原氏の政權衰へ、源平二氏の興るに及び、市街は屢々劍戟の音に脅かされ、清盛の福原遷都に至つて甚だしく衰頽した。福原から舊都を訪ねた、後徳大寺實定が歌つた今様に

「ふるき都を來て見れば、淺茅ヶ原とぞなりにける。月の光はくまなくて、秋風のみぞ身にはしむ。」
 と當時の狀を遺憾なく物語つてゐる。賴朝天下を一統し政治の實權は鎌倉に移つた、續いて承久の亂があ

り、建武中興の大業も久しからずして世は南北朝の争ひとなるなど、此地は殆ど兵塵の絶ゆる間もなかつたに、又々應仁の大亂に禍せられ、市街は一大修羅場と化し、内裏を初め社寺、邸宅は焼かれ、資財は掠奪にあひ、市民は四方に離散し、京都は實に荒涼殘破たる曠原となつて仕舞つた、應仁から永祿（凡そ三百六十年前）に至る百年間程が、此地の衰微時代の極で、紫宸殿の御築地は破れ、兒童は御縁側に戯れ、三條の橋から内侍所の燈が見えたといふ程だ、永祿十一年細田信長、正親町天皇の密勅を受け、兵を擧げて此地に入り、禍亂を平けて皇居を尊崇し、同十二年廢頽せし皇居を造營、次で豊臣秀吉京都復興を志し、右京の大部分を郊外とし、市街を整齊して其周圍に土疊を築き、溝渠をめぐらしなごして、防禦に備へ、大内裏舊址に聚樂第を營み、天正十四年（凡そ三百三十年前）正親町天皇の行幸を仰ぎ、諸侯を率ゐて朝觀の盛典を行ふ、世に聚樂行幸といふのがそれである、斯くて京都は復活の機運に會ひ、徳川幕府の抑制手段も其功を奏せずして發達し、元祿年間（凡そ二百三十年前）には、人口五十萬を數ふる大都會となつて、今日に及んだのである。

地は山城の中央に位し、地勢平坦、東部一帯は、蒲團着て寝たる姿の東山三十六峰相連り、西に嵐山、天王山、北は所謂北山一帯の山峰、南に京都平野、東に鴨川、南に巨椋ヶ池、宇治川の清流を控へ、山河襟帶、千年の首府たる自然の城郭を爲してゐる。市街は整々として碁盤目の如く貫通し、三條通を境として北を上京、南を下京の二區に分ち、南北を縦、東西を横となし、北に往くを上るを稱し、南に往くを下るを稱す。風俗は優雅に、山水は秀麗、名所舊蹟は至る處にある、文學、美術、建築其他あらゆる方面に於て、古典的文明を保存してゐる唯一の都である。

市内名所

市内の名所案内は順序として京都驛から記述することとした。

— 本願寺・東寺・二條方面 —

京都驛
東海道線
山陰線
關西奈良線
東本願寺

京都驛 — 市の南部七條（市電七條驛前）にある、俗に七條驛といひ、當市の女關口である、鐵道は東京より、神戸に至る東海道線を初め、此處を始驛として、舞鶴、福知山方面に至る山陰線及び大和木津、奈良に通ずる關西奈良線の諸線輻輳して喧轟を極めてゐる。

東本願寺 — 京都驛から北へ、烏丸通を約五丁（市電東本願寺前）にある、眞宗大谷派の大本山、慶長七

東本願寺
西本願寺
根穀殿

根穀殿

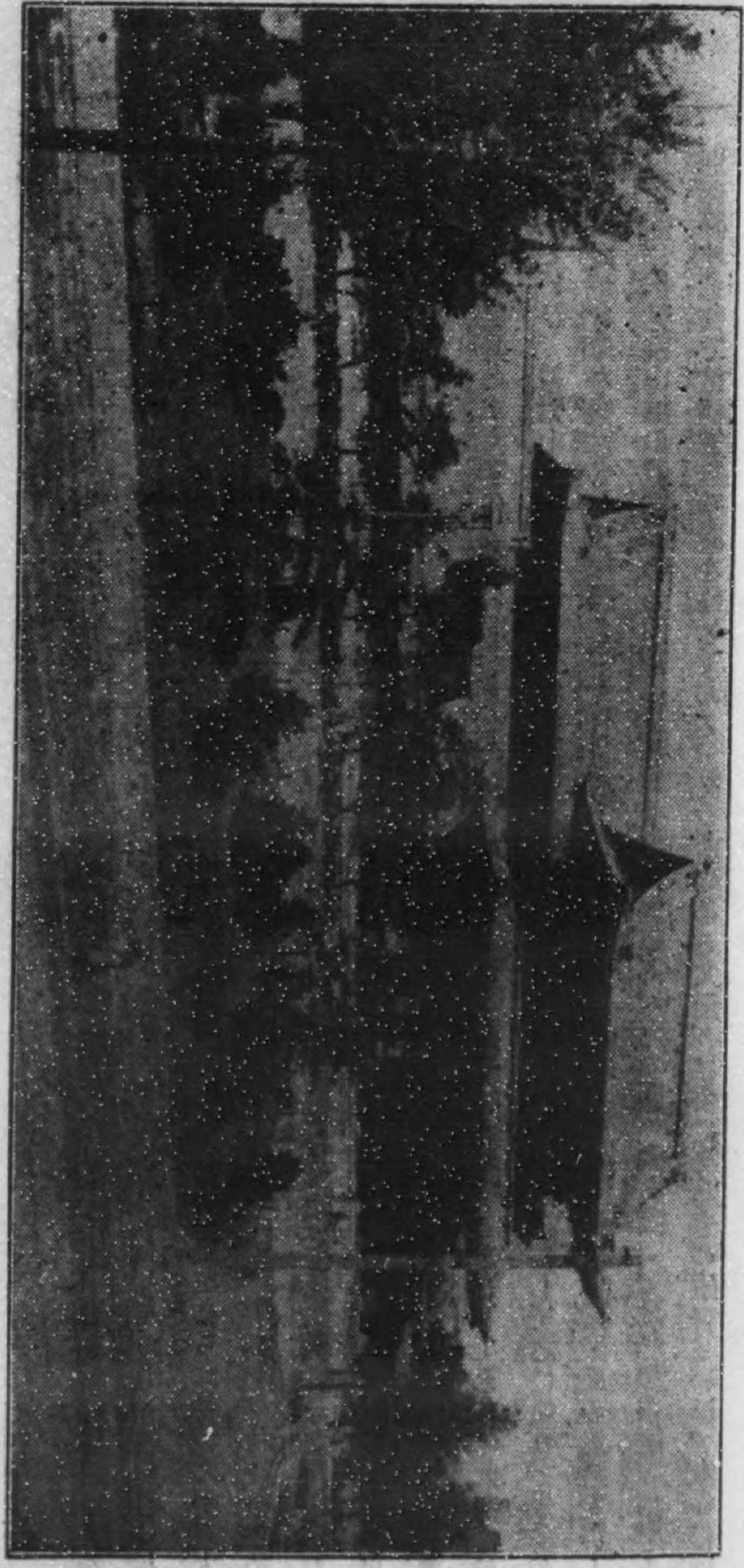
西本願寺

年（凡そ三百年前）見真大師十二世の孫教如上人の開基、創建當初の堂宇は、天明八年、文政六年、安政五年の火災及び元治の兵火に罹り、今の堂宇は明治廿八年に建築したものである、本堂に安阿彌作の本尊阿彌陀佛を安じ、大師堂に見真大師（親鸞）自作の木像を安置してある、其外山門、勅使門、大師堂門等何れも結構優美宏壯なるもので、大寢殿、小寢殿、官御殿、白書院、黒書院、能舞臺等の殿舎が建ちならんである、現今大いに防火に意を用ひ、水を蹴上の溜から地下を通じて引き、其噴霧力百卅餘尺、一朝火災の場合は一時に堂宇を水煙の中に包む設備が出来てある、「お上りさん」の團體は大半本願寺参りさいはれてゐる位に、西本願寺と共に宗教界を風靡してゐる。表門から東二丁行く本願寺の別荘、根穀殿がある、殿舎林泉の結構を以て聞けてゐる、地は謠曲「融」にある鹽竈の舊蹟で、「嵯峨天皇の御宇に、融の大臣陸奥の千賀の鹽竈の、眺望を開きし召し及ばせ給ひ、此處に鹽竈を移し、あの難波の御津の浦よりも、日毎に潮を汲ませ、こゝにて鹽を焼かせつゝ、一生御遊の便りとし給ふ」とある處、

手作たこ鹽を諸卿にわけてやり

川 柳

西本願寺——東本願寺から北に、堀に沿ふて西に、新町通を南に、御前通を西に行くに突當りにある（市



寺 願 本 東

電西六條の西二丁、眞宗本派の大本山、親鸞上人の墳墓を大谷に築き佛閣を建立、後龜山天皇紫宸殿を下賜せられ、勅願所となし阿彌陀本願寺と名稱給ひしが本寺の濫觴で、八世蓮如上人大いに宗風を起せしに、叡山の僧徒の襲ふところとなり、殿堂悉く燬失、其後弘通の爲めに流浪、盛衰定まらなかつたが、天正十九年（凡そ二百卅年前）豊臣秀吉が現在の地を寄附してから、漸く基礎が定まり、堂宇宏壯殿を極め、宗運日に加はりしを、徳川家康の忌處となり、其勢ひを割かんが爲に地を教如に寄せ、新に一寺を創建したのが東本願寺で、これから眞宗が東西の兩派に分れたのである、創建當初のものは元和元年（凡そ三百年前）に灰燼と化し、今の本堂は寛永十年（凡そ百六十年前）の再建で、春日作本尊阿彌陀佛を安じ、眞影堂に掲ぐる見眞の二大字の勅額は明治天皇の宸筆である、堂に見眞大師の座像を安じてゐる、此像を骨肉の眞像といひ、親鸞七十一歳の時自ら刻したるもので、入寂後茶毘の灰を漆に和して之に塗り、幾多の法難に門徒が身命を犠牲として保護し、今日に傳ふるもので一宗根本の眞像である、聚樂邸の遺物に移した飛雲閣、伏見桃山城の遺構である四脚門及能舞臺、其他車寄、大女關、大廣間、白書院、黒書院等何れも特別保護建造物で結構宏敞華麗を極めてゐる、又堂前にある大銀杏は俗に水吹き銀杏といひ、本寺に回縁

眞正寺

本國寺

六孫王神社

東寺

の厄があれば、水を噴飛してこれを消すと傳ふる名高いものだ、寺域三萬五千二百坪に餘り、東本願寺と共に本邦宗教界の一大重鎮である、西本願寺の南に、眞宗眞正寺派の本山眞正寺がある、圓嶺山と號し今の堂宇は明治四十四年の再建で莊麗なるものだ、又西本願寺から北に堀川を渡つて、西の筋を北へ入ると、日蓮宗四本山の一といふ本國寺がある、日蓮上人が開いた、鎌倉松葉谷の法華堂を、貞和元年（凡そ五百七十年前）ここに移した處、今の堂は文化年間（凡そ百四十年前）の再建といふ、本堂に日助僧都一字三禮の法華經と兩側に釋迦、多寶の二佛を安じ、掲ぐ扁額の妙法華院の文字は水戸光圀の筆である、祖師堂には日蓮以下四高弟の像を安置、其他境内に二王門、立像堂、羅刹室、番神社、加藤清正の祠がある、本國寺から西に大宮通に出で南に約十丁、八條通を西へ更に二丁行くと六孫王神社（市電七條大宮）がある、地は六孫王經基の邸址で、經基と相殿に天照大神、八幡大神を祀る、多田滿仲の創建で、今の社殿は元祿年間（凡そ二百卅年前）の再建である。

東寺——六孫王社の南、（市電七條大宮の南七丁）にある、眞言宗の總本山、教王護國寺といふのが本名で、又俗に左寺ともいはれてゐる、桓武天皇が左右兩京鎮護の爲めに、平安城の南門即ち羅生門の左右に

東西の兩寺を建立せられた左、所謂東の寺が本寺で、東寺の名それに起因するのである。嵯峨天皇弘仁十四年（凡そ千百年前）東寺を弘法大師に賜ひ、密教流布の道場とせられ、大師親ら仁王護國の本尊を刻して安置し教王護国寺と名稱けた、金堂は豊臣秀頼の再建で、藥師佛を安じ、講堂に大日如來、五大尊、四天王を安置してある、其他南大門、觀音堂、蓮華門、大師堂、毘沙門堂、北大門、八足門、慶賀門等坊舎がある、有名な五重の塔は高さ卅六間、寛永年間徳川家光の造営に係るもので、金剛界四佛を安じてある、寺域廣闊、市内屈指の大伽藍である、寺の西三丁に、昔鬼が棲んでゐたので、源頼光四天王の隨一渡邊の綱が、それを見届けに來たといふ傳説のある羅生門（平安城南大門）があつたのだが、今は其片礎をも認められない、「羅生門綱おれが行くべい」と言ひ「是でかう握みましたと綱斬し等の川柳がある。

「綱は上意を蒙りて、羅生門にぞ着きにける、折しも雨風はけしき後より、兜の鍔を引摺み引き戻さんご曳とひく、綱も聞ゆし強者にて彼曲者に諸手をかけ、止やれ離しやれ、鍔が切れる、鍔切れるは厭ひはせぬが、たつた今結た鬘の毛が損じるへく、七ツ過には行かねはならぬ、何處へ行かんすが此方氣にかゝる、誰れぢやなく、鬼じや無いもの人じやものサツサ兜も鍔も何も入らねへ、サツサ持つてけ背負



東寺

春佳畫

島原遊廓

てけ、(端唄)

島原遊廓 — 本國寺の南の筋を西、(市電島原口の西三丁)にある、島原は上古朱雀野といひ、外國の賓客を接待する鴻臚館のあつた處、肥前島原に亂があつた當時、こゝが開かれ共に人心を騒がした?で戯れに島原と名附たといふ。

入口のあいそになびく柳かな 一 茶

昔の所謂一刻千金、豪華の遺跡として、今尙毎年四月廿一日に太夫の道中を催す、他に其類例がないので遠近から態々見物に来る人が多い。青樓で著名な角屋は二百五十年前の建物で緞子の間、青貝の間等昔の豪者を物語る室や器物が残つてゐる。

壬生寺

壬生寺 — 市電島原口から北に、三ツ目の停留所、佛光寺通りを西に行き、其西端の北側にある、寶幢三昧寺、小三井寺、地藏院等と澤山な名前がある寺で、宗旨は律宗、本堂に佛工定朝が一刀三疊千日の丹誠を凝して作つたといふ地藏菩薩を安置してゐる、有名な壬生狂言は當寺の中興圓覺上人が俗人を佛道に導く方便に創めたもので、四月廿一日から五月中頃まで、その猿樂を催す、言語を云はず、たゞ動作のみ

圓山應翠の墓
神泉苑
嵐山電車

で演る頗る異つたもので、「カンデン〜カンカン〜カンデン〜」と鉦や太鼓で面白く雑す。

狂言は南無とも言はず壬生念佛 太 祇

寺から北に四條通に出で、通を東に行くに圓山應翠の墓がある「悟真寺」、又大宮通に至るに南角に嵐山電車の起點がある。嵐山電車の起點から、大宮通を北へ七丁(市電堀河御池の西三丁)に神泉苑ある、平安京造營のとき造られた禁苑で、其當時は平安第一の稱があつた位廣大な林泉、桓武天皇以下歴代の遊覽所であつたさうだが、今は其一部分が修補せられて存してゐるに過ぎない、池中の小島に善女龍王と辨財天を祀る祠がある、

ここはりや日の本ならば照りもせめ、さりさてはまた天が下さは 小野小町

川柳に しつほりさ小町も一度は雨に濡れ

二條離宮 — 神泉苑の北(市電堀川二條)にある、即ち舊二條城で、慶長八年(凡そ二百廿年前)徳川家康が築いた所、慶應の末に慶喜公がこゝで大政返上の表を捧呈し、維新の頃には太政官代となり、明治の初年

二條離宮

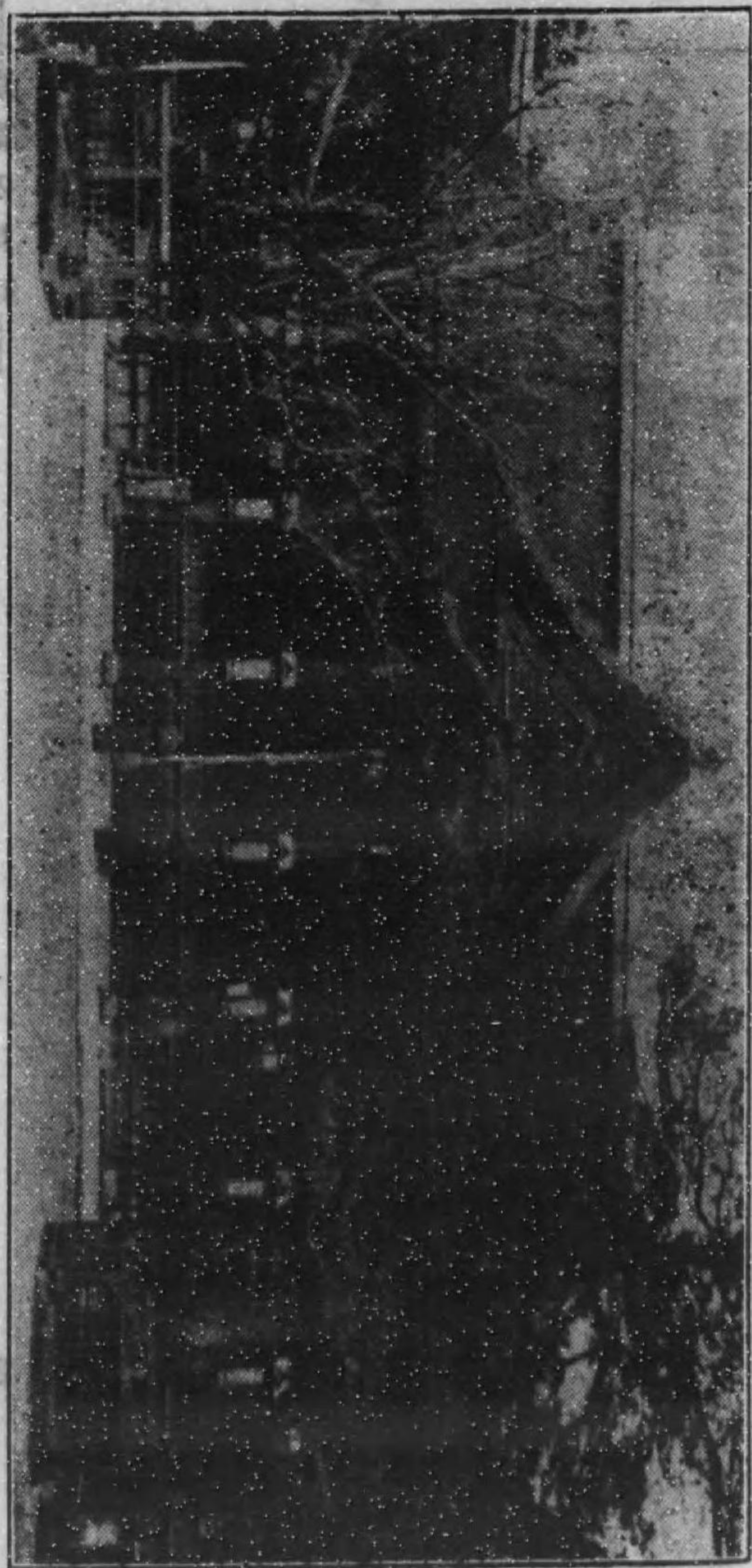
豊樂弟址
大極殿址

には京都府廳が置かれ、同十七年に現在の離宮となされたのである。
大極殿と豊樂弟址——二條離宮の西北（市電千本丸太町附近から北、千本中立賣附近一帯）の地をいふ、
延暦平安奠都の時、大内裏を造營せられし處、又天正十四年（凡そ三百卅年前）豊臣秀吉が其舊地に樂樂
弟を營んだといふから、やはり此附近であつたことは間違ひない。

——北野天神、金閣寺、大徳寺方面——

北野天神

北野天神——（市電北野終點）にある、官幣中社、菅原道真公を祀る。天曆元年（凡そ九百七十年前）の創
建、爾後曆朝の崇敬篤く、行幸せられたことが史上に見えてゐる、今の社殿は慶長十二年（凡そ三百十年
前）豊臣秀頼の再建である、中門、拜殿、本殿、東門等何れも特別保護建造物で、中門を俗に三光門とい
ひ後西院天皇宸筆の扁額を掲げてゐる、境内は往昔の右近の馬場で、論曲に「けに名にしおふ神垣や、北
野の春も時めける、神の名所數々に、眺むれば都の空のはるく」と、霞渡るや北の官居、御覽ぜよ時を
て、花櫻葉の官所、花の濃染の色分けて、紅梅殿や老松の「こ唄はれてゐる、賽路石の鳥居の東北、老樹繁
茂してゐる處を、雪見丘といひ、昔豊太閤が北野大茶會を催した舊蹟であるといふ、又無數の石燈籠が略



北野天神

の左右に立ち並び、殊に梅樹多く花の頃は美しい。

「彌次郎兵衛北八、右近の馬場にいたる。此處は何日も借馬數多出で馬の糞古あり。見物夥し、北八「オヤ凄じい人だ、何かあるさうだ」立寄りて人を押し分け見れば、馬に乗る人「ヒヤアドウく」見物「皆ほらい下手ぢや、然しアノ薙鬚玉見た様な頭の親爺めが、ほらうよう乗りくさるわい」見物「アリヤ知れたこつちやわいな、博勞の親方ぢや」北八「おれも一鞍乗りてへな、向に見てゐる姉様に」人込みの中女づれが二三人立つて見てゐる後へまはり、見物しながら、前にある娘の尻をちよいと抓る。娘「オ、痛やの、誰さんぢやいな、コレおまるさん此方へ来てんかいな」まる「何ぢやいな」娘「誰ぢややら私がおいさを抓つたわいな」まる「ソリヤ女のなない國で、生れた人ぢやる、構はんすな、投つておかんせ」彌次「エ、北八か、悪い洒落をするなへ」北八「ナニおいらア知らねへ」といひさま、憎さも憎し、かの年増女の尻を抓つてやらうと、側目しながら側に寄り、年増の尻を思ひ、おぶつてゐる子供の尻を思ふさま抓る、子供「ア、痛い」とわつと泣く、まる「誰ぢやいな、悪い事さんすわいな」子供「アノ伯父さんが抓つたわいのう」まる「エ、好かん人さんぢやわいな」彌次「堪忍しなせへ、さりとは外聞の悪い

平野神社

男た「さ足早にスゴく此所を過ぎて、南の門より入りて天満宮の本社へまゐる。(膝栗毛)

平野神社——北野神社の北門を出で、西に紙屋川に架す櫻橋を渡る。行當りにある、官幣大社、日本武尊、仲哀天皇、仁徳天皇、天照大神の四座と、別に天穗日命を祀る、延暦十三年(凡そ千百卅年前)大和より衣笠山の東麓に遷座、後現在の地に奉祀、圓融天皇以下歷朝の行幸せられし崇敬の篤い社である、今の社殿は寛永年間(凡そ三百年前)の造營、拜殿は巧に接木を箝め合せたもので、建築の模範にされてゐる、又掲ぐる三十六歌仙の額面は有名なものだ、境内に櫻樹の異種多く平野の夜櫻とて花頃は掛茶屋等を設け、見物人で雑沓を極める。社前を北へ四丁程行く人家の後に、花山天皇陵がある、尙ほ二丁程行つて西へ曲り約三丁に、

花山天皇陵

金閣寺

金閣寺——がある、臨濟宗、鹿苑寺と號ふ、應永四年(凡そ五百卅年前)足利三代將軍義滿此地の勝景を愛して山莊を營み、剃髮して法名を道義と改めて此處に住む、薨するに及び長子義持に遺命して淨刹となしたる處、池に臨む三層の閣を金閣といひ、寺の名それに因るのである、金閣は寶形造りで、頂上に紫銅の鳳凰を置き、下層を法水院といひ、運慶作の彌陀、觀音、勢至の三尊を安置し、東壇に開基の夢想國師

西壇に義滿法體の木像を安じてゐる、中層は潮音洞と呼び、惠心僧都作の觀世音、弘法大師作の四天王を安置し、天井の天人奏樂の圖は狩野正信の筆といふ、上層を究竟頂といひ掲ぐる簾額は後小松天皇の宸筆で、天井の板は一枚楠を用ひ、上下四方は悉く黄金の箔で押してあるので其名がある、池を鏡湖池と名づけ、中央の島を蘆原島といひ、西の島を淡路島、其西を出島と呼び、赤松石、島山石、夜泊り石、夜啼石、龜石等の名石が巧に配置せられてゐる、老樹繁茂、紅葉山には楓樹多く秋は美しい風致を添ゐる、尙境内に南天の床柱、萩の違ひ棚で有名な夕佳亭及び義滿が世をこゝに遇れてから尙政務を聽きて其威を振ふたといふ拱北樓、本堂、大書院、小書院等の殿堂がある、寺城二萬七千三百餘坪、結構宏壯、林泉又有數の名苑である。寺の前の小徑を北へさると約三丁に、三條天皇陵がある。

建勳神社 — 金閣寺の東十二丁、(市電今出川淨福寺の北方) 船岡山の頂きにある、別格官幣社、織田信長と其長子信忠を祀る、維新の初め朝廷信長の勳王を追褒せられ、明治二年に社殿を造營せられたのである、船岡山は小丘であるが非常に眺景に富んだ所で、應仁の頃には屢々修羅の巻となつた事が史上に見ねてゐる。

三條天皇陵
建勳神社

金閣寺

春佳畫



大徳寺

大徳寺——船岡山の東北五丁(市電今出川大宮の北十三丁)紫野にある。臨濟宗の大本山、元應元年(凡そ六百年前)大燈國師開基、創建當初の伽藍は應仁の兵火に罹り、今の堂宇は文明十一年(凡そ四百四十年前)一休和尚が再興したものである。佛殿を大雄殿といひ、釋迦三尊の像を安じ、勅使門、山門、法堂、唐門、方丈等何れも特別保護建造物である。天正十年(凡そ三百四十年前)羽柴秀吉が山崎の甲合戦に明智を一蹴し、此處で信長の法會を営んだ。焼香のころから先輩の柴田や瀧川の荒膽を挫いたのは人の知る處又千利休が此寺の山門に自分の像を置いた爲めに秀吉の怒に觸れ、遂に死を命ぜられた有名な話がある。一休の庵室であつた眞珠庵は方丈の北に、千利休の墓がある聚公院は西に、聚光院の西隣なる總見院址は即ち信長法會の舊蹟で、五尺餘の五輪の石塔は信長の塔で其左右に信忠、信雄の塔がある、其他龍光院孤蓬庵、黄梅院等の子院に蒲生氏郷、小早川隆景、細川忠興、豊臣秀長、片桐且元等の名士の墓がある、境域廣潤、當市屈指の大伽藍である。

今宮神社

今宮神社——大徳寺の西北四丁、府社、古は紫野社といつてゐた社で、素盞男尊、稻田姫命を奉祀してゐる、本殿は明治三十五年の再築、四月十日のやすらひ祭は、古から有名なもので、綵花で飾つた大

傘の下に、赤毛黒毛の冠を被り、鉦鼓を鳴らして歌を唄ひながら、踊つて行く珍らしい神事である、又名物あぶり餅が知られてゐる。

——六角堂、新京極方面——

六角堂

六角堂——六角通鳥丸の東(市電鳥丸三條)にある、天臺宗、頂法寺と號ぶ、用明二年(凡そ千三百卅年前)聖德太子の開基、本尊は一寸八分の黄金佛の如意輪觀世音で、聖德太子七世の守本尊であるといふ靈像、西國第十八番の札所である。

わがおもふ心のうちは六つのかご、たゞまるかれと祈るなりけり。 詠 歌

昔眞宗の開祖、親鸞上人が比叡山から、百日の間此寺に通夜して、觀音の靈告を受け、遂に一宗開發の動機を擱かした所といふ、本堂の構造が六角であるので其名がある、今の堂は明治十年の再建で、有名な生花の家元、池の坊は本堂の後にある、六角堂から西に五丁、油小路を南に一丁蛸薬師の角に

空也堂

空也堂——あるが(市電堀川蛸薬師の東)、紫雲山極樂院光勝寺といふ、空也上人に歸依した平定盛が俗體のまゝで瓢を叩いて上人作の無常和讃を唱へて市中を徘徊したといふ遺風で、此寺の徒弟は染衣を着し

ながら頭を剃らなかつたのである、膝栗毛に、彌次郎餘りに合點ゆかず、堪へかねて、彌次一モシお隣のお客様。私等は遠國の者で御座りやすが、所々歩いてあるうち、いろ／＼な珍らしい事も見聞しやしたけれど、御出家方の髪結うたを見るは、眞に今が初め、何うも合點が行きやせぬ、卒爾ながらお前方は何處のお方で御座りやすね」僧「へ、ア、此頭の御不審かいな、こちや空也堂の僧ぢやわいな、こちの宗體は昔から由緒があつて、こないに身には染衣を着ながら頭は大俗凡夫ぢやわいな」こある、本堂に空也上人自作の像と地藏、毘沙門及び阿彌陀佛を安じてある、空也堂から南に油小路を五丁、高辻を西に曲るこ。

住吉神社
菅大臣神社
紅梅殿神社

住吉神社 — がある、後白河天皇が藤原俊成に勅して勸請せられし社で、天照大神以下五柱を祀る、住吉神社から東四筋目の佛具屋町を北に入ると菅大臣神社がある、菅原道真公大己貴命を祀る、道真公研學の舊蹟として後人が社殿を營んだ所といふ、社の北佛光寺通を隔て、紅梅殿神社がある、一に北菅大臣社ともいひ、菅公の邸址で菅公筑紫に左遷のとき、こち吹かば香ひおこせよ梅の花、あるじなしとて春なわすれそ。菅公と詠じ給ひし舊蹟であるこうな、

川柳に 東風吹く日配所の障子あけて待ち

悪筆がよつて筑紫へやる工面

五條天神社

五條天神社 — 菅大臣神社の西南近く西洞院通にある、天照大神、大己貴命、少名彥命を祭る、往昔は神殿壯嚴を極めたといふ、文鏡上人が配流のとき此社の鳥居の下に黄金を埋めたといつて水手を吹いた話がある、謠曲に「是は西塔のかたはらに住む武藏坊辨慶にて候。我宿願の仔細有つて、五條の天神へ、丑の時詣りを仕り候。今日満願にて候程に、只今参らばやま存じ候」こあるは此社のここで、今でも内辨慶は毎日参詣するこことである。五條天神の南、西洞院通萬壽寺の角に大泉寺がある、九條關白兼實の別弟の舊址、一に花園殿の稱がある、親鸞聖人が法座を開いた處で、本堂に見送りの如來、見眞大師九十歳の繪像等を安じてある、見送りの如來は親鸞流罪のとき見送りに出られたといふ縁起をもつた阿彌陀佛で有名だ、尚境内の庭園が知られてある。又五條天神社から南門を出で、松原通を東に二丁程行くこ五津島神社がある、紀州和歌の浦玉津島の神を勧請した社で、往昔は五條松原社といひ、社城廣潤、松樹繁茂せるより松原の町名之れに起因するこいふ、今の社は最近の造營である。

大泉寺

玉津島神社

因幡薬師

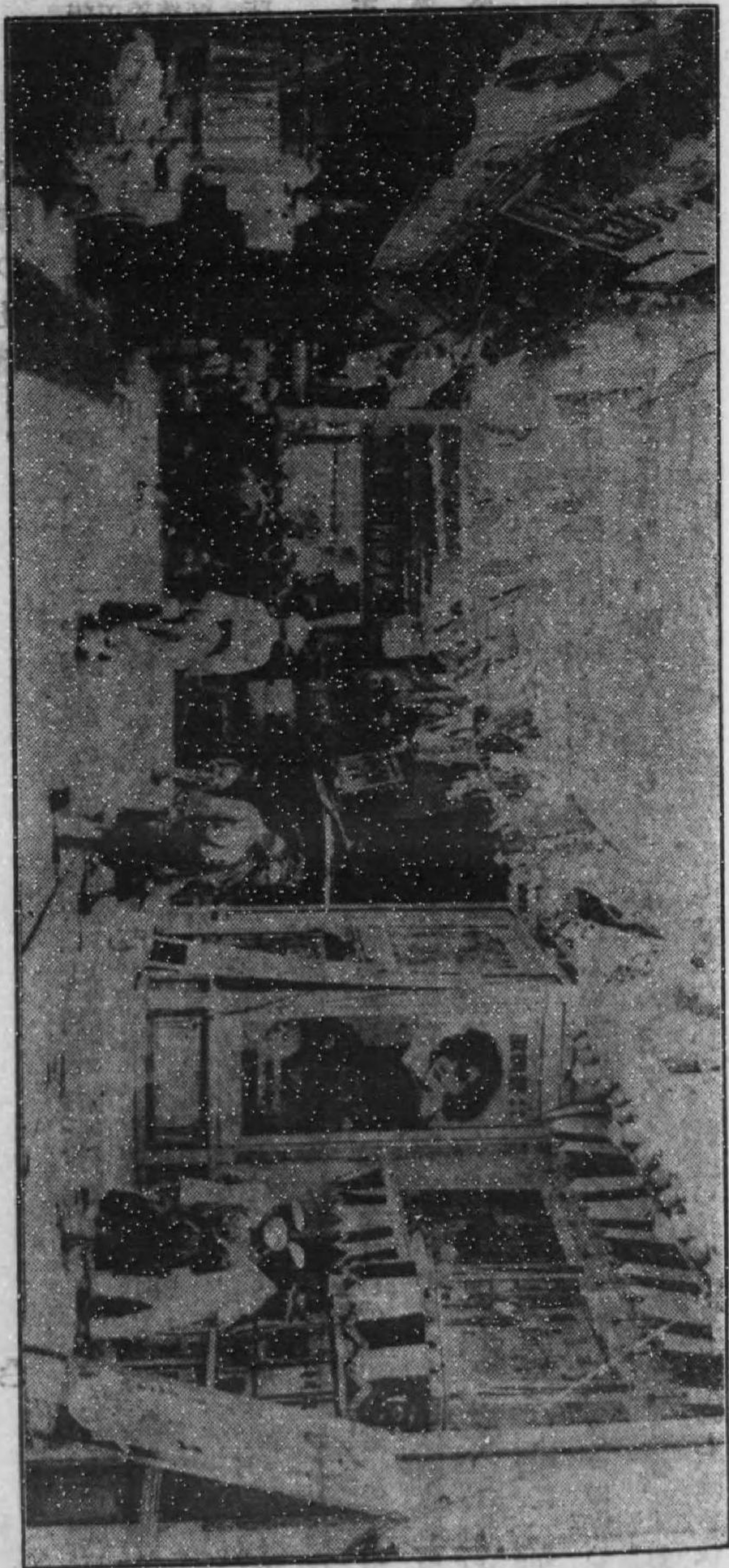
因幡薬師 — 前記六角堂の南七丁、玉津島神社の東二丁（市電烏丸松原）にある、因幡堂平等寺と號ふ、本尊の薬師佛は、日本三如来の一で、嵯峨の釋迦と善光寺の阿彌陀と共に、並稱せられてゐる有名なものた、寺傳によると、因幡の海から現れた本尊の薬師佛を、小堂に安じて置いたのが、長保の頃（凡そ九百廿年前）勝手に飛來して、京にある因幡の國司であつた、橋行平の邸に入つた、そこで邸を寺にして安置したのが今の因幡堂であるといふ。因幡薬師から北に佛光寺通に出で、東一筋高倉に至る。

佛光寺

淨教寺
大雲院
染殿地藏

佛光寺 — （市電烏丸佛光寺の東）がある、眞宗佛光寺派の本山、親鸞上人の開基、昔は眞正寺といつてゐたが、盗まれた本尊の阿彌陀佛が、殿中で光明を放つてゐたので、それから今の寺名に改めたのである、大師堂に見眞大師自作の像を安じ、阿彌陀堂に慈覺大師作の本尊阿彌陀如来及び其左右に聖徳太子、圓光大師各自作の像を安置してゐる、佛光寺から東に寺町通に出で、北に曲ると東側に平重盛の墓がある、淨教寺、織田信長父子の追福の爲めに建てたといふ大雲院等と附近に染殿地藏がある、弘法大師作の裸形の地藏菩薩で、染殿皇后の敬信が深かつたので其名がある。

新京極 — （市電新京極の北）南は四條通、北は三條通の中間、寺町通の東にある、市内第一の熱鬧地で



新 京 極

金蓮寺
錦天神
安養寺
蛸薬師
誓願寺

京都座、明治座、歌舞伎座、三友劇場等の芝居や活動寫眞其他の諸興行物が集まつて、その中に雜貨店飲食店等の商賈が軒を列べ、雜沓又雜沓を極めてゐる、丁度大阪の心齋橋と千日前を一所に寄せた様な所だ附近に金蓮寺、錦天神、安養寺、蛸薬師、誓願寺等がある。

金蓮寺
錦天神
安養寺

金蓮寺——は時宗四條派の本山で、後伏見天皇の后が御難産の時、靈夢に依つて此寺の開祖淨阿上人に祈らしめ給ふに皇子安々と御出産あり、之光嚴天皇で、勅願に依り當寺を建立せしめ給ふといふ縁起をもつてゐる、尙境内に足利義教が想々聞きに來たといふ杜鵑の松がある。錦天神は菅公を祀る處、錦小路にあるを以て其名がある、安養寺は惠心僧都の妹、安養尼が住寺せし處とて名がある、本尊は倒蓮華の阿彌陀といつて名高いもので佛師春日の作といふ。蛸薬師は本名を妙心寺と號ひ、淨土宗である、昔此寺の僧が病める母の請に委せ、市で蛸を求め持歸つて之れを見るにアラ不思議や蛸の姿は消失して中に一卷の藥師經があつた、母は其佛德に依て病は自ら癒れたといふので蛸薬師の名があるといふ、タコの作つた蛸の縁起はタコウも言はれぬが、聞く人の耳もタコに成つてゐるたろう。誓願寺は淨土宗西山派、本尊阿彌陀如來を安じてゐる、昔は廣大なる寺域と數坊を有してゐたといふが數度の兵火に鳥有に歸し、維新後上地

誓願寺
蛸薬師
安養寺
錦天神
金蓮寺

で寺域を狭められた、一各歸る法の場人、實にも妙なる稱名の數々、虚空に響くは、音樂の聲、異香薫じて、花降る雪の——と謠曲にあるが今は虚空に響く音樂は三味や太鼓の音色に替はり、香烟も肉や天ぶらの異臭に變じて、謠曲を作りたる當時の佛が惚はれない。

本能寺

本能寺——誓願寺から北に三條通に出で、西の寺町通を北に一丁程行くに至る（市電二條寺町の南）、法華八品派の本山、本尊は題目の寶塔で、境内に織田信長の影塔がある、本能寺といへば琵琶歌の「斯て士卒を打揃へ、中國勢を援げんと、偽り向ふ大江山、心の駒も鳥羽玉の、時に亂るゝ足並も、東を指して進みける、時しも六月二日の朝またき、露の身かろき軍兵が、本能寺を取り圍み、鬨を作りて攻め入りけるにこの文句を存べる、信長が光秀の爲めに弑殺された當時此寺は、今の西南方六角通の油小路邊にあつたのだが、後今の所に移されたのである。三條通から此寺に至る途路に、京都六地藏の一なる矢田地蔵がある、満米上人の開基した寺で、本尊は同上人作の五尺餘の地藏菩薩である。

矢田地蔵

御所附近、下鴨方面

京都御所

京都御所——市の北部（市電堺町御門）にある、舊皇居のある所で、東は寺町、西は烏丸通、南は丸太町

京都の見物

内裏

大宮御所
仙洞御所
御苑

宗像神社

白雲神社

護王神社

北は今出川に至る凡そ廿五萬餘坪の間で、此境域に内裏、仙洞御所、大宮御所がある。

内裏——は堺町御門より入つて正面に見ゆるものがそれで、南面の正門を建禮門といひ、東門を建春門、西門を宜秋門、北門を劔牛門といふ、又内廓の中央に承明門、東に日華門、西に月華門の三門があつて其の中に紫宸殿、清涼殿、宣陽殿、常御殿、小御所、御學問所等の宮殿がある、現在の御所は安政三年（凡そ六十五年前）の御造営に係るもので、内裏の東南の北にあるを大宮御所といひ、南を仙洞御所といふ、御苑は即ち皇居周圍一帯の青芝で、昔は公卿の邸宅がこの中にあつたのを維新後すっかり取拂はれて現在の御苑となされたのである、松樹多く、花樹點綴して清浄の地に一段と風致を添ゆる。

宗像神社——内裏の西南（市電烏丸下立賣）下立賣御門内にある、地は花山院家の舊址で、田心姫命、湍津姫命、市杵島姫命を祀る、社の北に白雲神社がある。

護王神社——御苑の外郭に沿ひて北に、下長者町を西に入ると至る、別格官幣社、祭神は和氣清磨である、當社は初め高雄の神護寺にあつたが、嘉永四年（凡そ七十年前）に正一位護王大明神の號を贈られ、明治十九年に現在の地に遷座されたのである。



所 御

梨木神社

淨華院

下御靈神社

草堂

梨木神社——御苑の東(市電廣小路)にある、地は三條家の舊址で、光格、仁孝、孝明の三帝に歴史した功臣右大臣從一位二條實萬を祀る處、明治十八年の創建である。梨木神社の向ひ側に、淨土宗鎮西派、四本山の一なる淨華院がある、木堂に圓光大師、阿彌陀堂に阿彌陀、觀音、勢至を安じ、不動堂に泣不動尊の諸像を安置してゐる、泣不動尊を一に身代不動といひ、師の坊の身代に一命を捨てんとした三井寺の智興内供の弟子證空を泣いて救はれたといふ縁起のある尊像だ。梨木神社の南七丁寺町通丸太町の南に下御靈神社がある、府社、伊豫内親王以下不遇なりし人々の靈を祀る社で、今の社殿は天明八年(凡そ百卅年前)内侍所の餘材を賜りて造營せしものである。

草堂——下御靈社の南近く(市電夷川)、天臺宗行願寺といふ、本尊は加茂の神木で刻んだといふ千手觀世音で、西國第十九番の札所だ、

花を見て今はのぞみもかう堂の庭の千草もさかりなりけり。 詠歌

開基の行圓上人が俗身の時、田獵に出で、誤つて牝鹿を射殺したので菩提心を起し、遂に佛門に入り、其牝鹿の革を着て頭陀の行をなしたので世人が行圓を革上人といふに至つた、又當寺を建立したので草堂の

名が起きたのである。

相國寺

相國寺——御苑の北方、(市電同志社學校前の北三丁)禪宗五山の二、萬手山相國承天禪寺と號ふ、明徳三年(凡そ五百卅年前)後小松天皇の勅を奉じて、夢想國師の開基した所、當初の堂宇は、應仁の兵火に罹り、後秀頼や家康が再建したのも、天明八年(凡そ百卅年前)に焼失し、あますものは僅に法堂のみであつたが、年を追ふて今は開山堂、選佛場、二層塔、方丈等が建立された、法堂は即ち秀頼の再建に係るもので、方丈と共に特別保護建造物である、中央に釋迦、左右に阿難と伽葉の二佛、西壇に達磨、臨濟、夢想國師、東壇に足利義滿の像を安じてゐる。

勅なれはいともかしこし驚の、宿はさ問はゞいかに答へむ。

と紀貫之の女が詠んだ名高い鶯宿梅は境内の林光院の庭にある、寺域二萬三千餘坪、樹木繁茂、頗る幽雅な巨刹である。

上御靈神社

上御靈神社——相國寺の北三丁、府社、祭神は下御靈社と同じく、不遇の人々を祀る、樓門、本殿、拜殿繪馬堂等がある、曆朝の崇敬の篤かつた社で、改造毎に内侍所の權殿を賜つたといふ由緒を以てゐる。

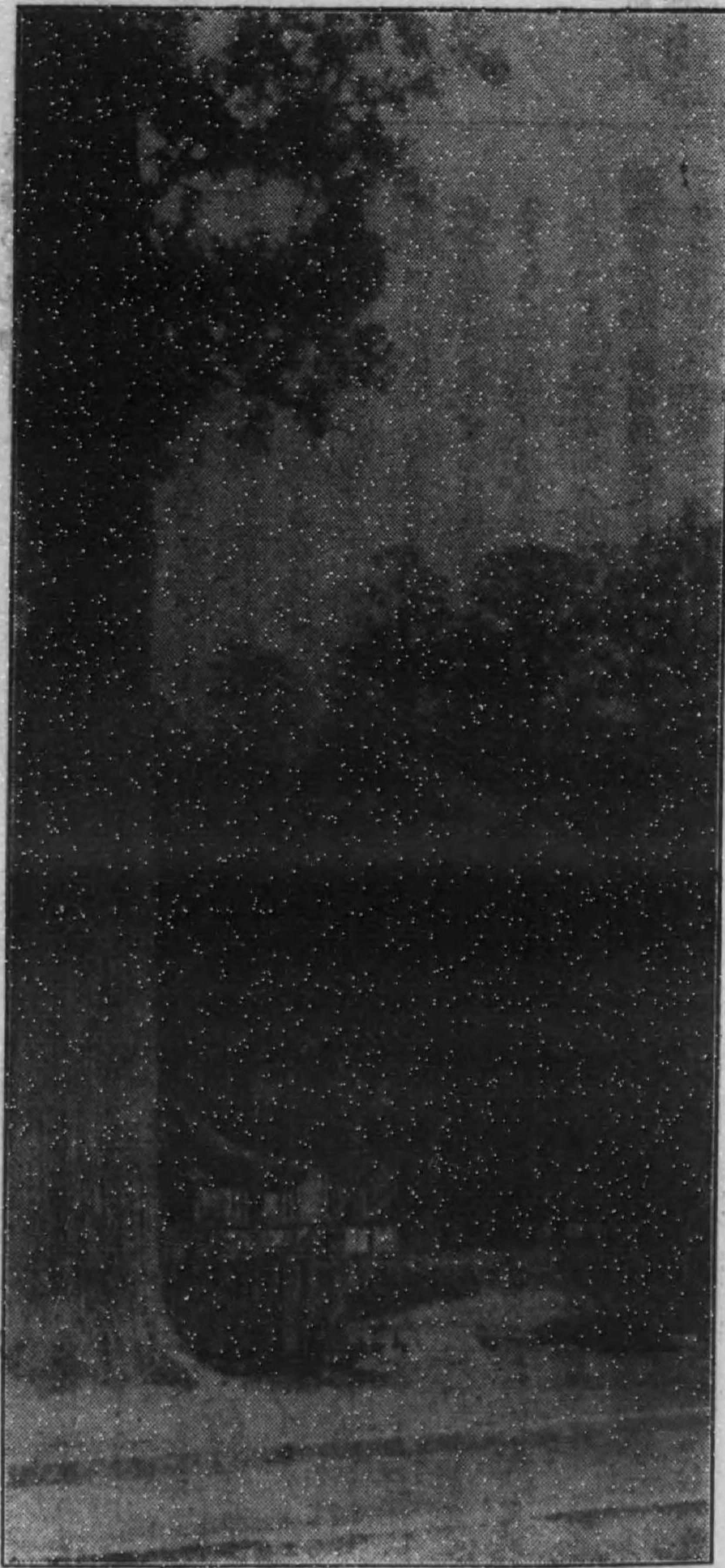
日峰宮

瑞光院
瑞龍寺
辰橋

白峰宮——御苑から今出川通を西に六丁（市電堀川今出川）にある、官幣中社、崇徳、淳仁の兩帝を祀る明治天皇が孝明帝の御遺志を繼承せられて畿岐白峰陵下の頓證寺から崇徳帝の神靈を、淡路天王森の山陵から淳仁帝の神靈を奉迎せられて、奉祀された處である。白峰宮から堀川を北へ八丁、瑞光院町に、赤徳四十七士の墓がある瑞光院、又その反對に西堀川通を南に入ると瑞龍寺に至る、日蓮宗、俗に村雲御所といひ、古來同宗唯一の門跡寺である。尙ほ南に一條通に出ると有名な辰橋が堀川に架かつてゐる。昔三善某が死んで葬列のさき、熊野から其子が入浴して此所で逢ひ、佛天に祈念して遂に蘇生せしめたといふので名がある、又俗に渡邊綱が鬼女に出會つたといふ傳説のある所だ。

「又叢立し雨雲の、陰もる月を、よすがにて三下り」「たゞる大路に人影も、灯影も見えず我影を、若や人かど驚きて、被衣に身を忍ぶ措、けふの細布ならずして、女子心に胸合す、思ひ憫みて來りける」「卯月の空の定めなく、降らぬ内にも思へども、爰は一條の辰橋、見れば往來ふ人もなく」「ア、便りにもなやと佇みて、暫し休らひ居たりける」「綱は小蔭を立出て」「女性は何れへ參られるぞ」「妾は一條の大宮より、五條のわたりへ參りまするが、唯一人故夜道が恐く、爰に佇み居りました」「恐いと申すは尤も

上加茂神社



清明神社
名和長年の
碑

なり、五條のわたりへ登るごあらは、某送つて遣はせう「御詞に従ひますれば、お伴ひ下さりませ」折から空の雲崩れて、月の光に見かはす顔「ハテあでやかな」水に寫りし影を見て「ヤ、今水中へ映りし影は「エ、」夜更ぬ内にいざさくく「西へ廻りし月の輪に、遠く望めは愛宕山、北野は近く清瀧の森を越へ來る時鳥、初音床しく振返り、見上る顔にはらくと、樹々の雫も雲運ぶ、雨かこ暫し立休らひ(中略)「夫は御身の思ひ違ひ、斯る名もなき田舎武士、誰れが思ひをかけやうぞ「イエく立派なお名故に「何立派な名こは「當時内裡を警衛に、都へ上りし源の、頼光朝臣の身内にて、渡邊源次綱殿故「ヤ如何致して其名をば「戀しく思ふ殿御故、さくより存じて居りまする「戀しく思ふ言は偽り御身が我名を存せしは妖魔の術であらうがな「星をさされて打驚き「何妖魔の術は「斯よき女に化するごも、其本性は悪鬼ならん、「ヤ、「汝は心附ざりしか、月の光りに映りたる、影は怪しき鬼形なりしぞ「ヤア「其本性を現はせよ「言に妖女も忽ちに、憤怒の相を現はせは(常磐津辰橋)辰橋の附近に清明神社及び名和長年の碑がある、清明神社は天文博士安藤晴明を祀る社で、社地は其邸址であるといふ、長年の碑は明治十九年の建碑で碑面の文字は三條實美の筆である。

下加茂神社

下加茂神社——上御靈社の東九丁(市電出町橋北方九丁)官幣大社、火雷神と玉依姫を祀る、欽明天皇の朝(凡そ千三百八十年前)の創祀、白鳳二年に初めて社殿を造營せられたもので、桓武天皇御京都以來歴朝の崇敬篤く、屢々行幸せられたことが古書に見えてゐる、伊弉諾尊の御子火雷神が丹塗の矢さ化して玉依姫に合ひ、上加茂社に鎮座せられたる加茂別雷神を生み給ふたことは山城風土記等に説いてある、本殿、樓門、舞殿、拜殿、橋殿、中門、幣殿、細殿、祝詞殿等何れも特別保護建造物で壯麗神嚴を極め、毎年五月十五日の葵祭は、京都祭禮中最も古雅優美なるものとして知られてゐる、又社の森は紅の森といつて、南北朝時代に戰場となつたことが太平記等に見えてゐる森で、謠曲に「御手洗の、聲も涼しき夏陰や、聲も涼しき夏陰や、紅の杜の梢より、初音ふり行く時鳥、なほ過ぎがてに行きやらで、今一通り村雨の、雲もかけろふ夕づく日、夏なき水の河隈、汲ますごも陰は疎からじ」さある古來の避暑地だ。

上加茂神社

上加茂神社——下加茂神社の西北方一里、上加茂にある、官幣大社、別雷神を祀る、下加茂の祭神は即ち當社の親君で御祖の號がある、共に平安京以前の鎮座で、今の社殿は寛永五年(凡そ二百九十年前)の修造である清流神前を繞り社殿樓閣麗る壯麗を極めてゐる、境域廣潤、細殿、拜殿、樂の屋、橋殿、舞殿

土の屋、本殿等保護建造物になつてゐる、五月十五日の葵祭に紅袍、紫衣、白馬整々と行列して、長橋を渡る有様は、昔の繪巻物を見る様だ、又六月五日の競馬は赤、黒の装束で、二組に分れ先を競ふ様等頗る優美なものである。

— 卅三間堂、大佛・西大谷方面 —

三十三間堂

三十三間堂——京都驛の東八丁、驛前から東山通行の市電に乗り、七條大橋東詰に下車して、伏見街道を右に入ると至る、天臺宗、蓮華王院といふ、地は後白河院、法住寺の舊址、法皇の祈願によつて建立、千手観音一千體を安置された處、又源平盛衰記等によると、鳥羽院の祈願で、平忠盛を奉行とし鴨川の東に、徳長壽院を建立、一千體の観音像を安ずるから、鳥羽院の徳長壽院は即ち蓮華王院の前名であると思はれる、今の堂は文永三年（凡そ六百六十年前）の再建で、堂の長さ六十六間、二間毎に柱があるの、卅三間堂といふのだ、本尊は二丈七尺の千手観音の座像で、外に一千體の観音を安置してゐる、一京の卅三間堂の佛の数は、三萬三千二百二十三體云々」と俗語等にもあるが一千一體よりない、昔は此の堂で「通し矢」の「矢數」など、いつて弓術の競技をやつたものた、通し矢の額が數多掲げてある。

養源院

養源院——卅三間堂の前にある、淀君が父淺井長政追善の爲めに創建した寺で、長政の法名をとつて養源院と號ふ、長政の子盛伯法師の開基、今の堂は伏見桃山城の遺構で、血天井といふのは、家康が關ヶ原へ出陣中、西軍が眞先に伏見城を攻めた、家康の守將鳥井元忠が防戦して力盡き、城陥るに及んで屠腹した、其血痕の附着する板を天井に張つたもので、伏見落城の悲惨な紀念である。

京都博物館

新日吉神社
智積院

京都博物館——卅三間堂の北近くにある。明治二十五年起工、同二十八年に落成、其工費十六萬圓、佛國ドリツク式に倣ふて建築したもので、内部は、歴史、美術、工藝の三部に分つて陳列されてゐる。博物館の南門前を、軌道に沿ふて東に行くとき突き當りに眞言新義派の總本寺智積院（市電妙法院前）がある。門前の南北の筋が東山通で、寺の北「豊國廟参道」と署せる大石標のある路を東にさると、右に新日吉神社がある、永暦元年（凡そ七百六十年前）後白河上皇が江州日吉の神を勧請された社で、往昔は日吉坂の邊にあつたのを、後智積院の北に移し、明治二十年豊國廟修築の際、此地に遷座されたのである。

豊國廟

豊國廟——新日吉神社から四百八十餘級の石段を登ると至る、（石段の右に女坂の間道がある）東山の一峰、阿彌陀ヶ峰の頂上で、五輪の大石塔が巍然として聳れてゐる、秀吉は朝鮮出陣中の慶長三年（凡そ三

百廿年前に伏見城で薨じたが、遺命によつて喪を秘し、諸將凱旋の翌四年、此處で壯嚴無比なる葬儀を營んだ、朝廷より正一位を贈られ、豐國大明神の號を賜つたので、山麓に社殿を造營して、結構壯麗を極めたが徳川氏の寛文年間（凡そ二百六十年前）に取毀たれ、墳墓も林草の間に横はつて、誰用ふものも無かつたが、明治元年朝廷、秀吉の勲功を追録せられ、社殿再興後、有志者が集まつて豐國會を起し、同三十年に現今の廟が出来上がったのである、東近くは歌中山、北に清水が見ゆ、東南に山科、醍醐の山峰をめぐらし、西は市街を隔て、西山の翠巒を望み、南に伏見、淀の人烟、八幡山一帯が見渡され眺望實に絶佳である、又石段の下に櫻樹多く花の頃は美しい。智積院の北、參詣道を隔て、妙法院がある、天皇宗延曆寺の別院で、座主三院の一といふ有名な巨刹である。

大佛殿方廣寺

妙法院の西門前を西に往くと至る（豐國神社の北）俗に京の大佛といはれてゐる處で、大佛殿方廣寺——妙法院の西門前を西に往くと至る（豐國神社の北）俗に京の大佛といはれてゐる處で、天正十四年（凡そ二百四十年前）に秀吉が創建した所、當初のものは慶長元年（凡そ二百廿年前）に地震の爲めに破損せしを、後秀頼が再建し金銅の佛像を造つて安じたが再び地震の禍する處となり、其後佛像を木像に改造せしに、今度は雷火の爲めに佛像、本殿、仁王門等悉く烏有に歸した、今は僅に盧舎那佛半體

の木像を安じてゐるに過ぎない。「國家安康」の四字で、家康に物議を醸した、有名な梵鐘がある、秀頼が片桐且元に命じて造つたもので家康はそれを護ごし、秀頼か淀君を江戸へ人質として渡すか大坂城地を差出して、他に領地を請うかこの二つの難題を吹きかけ、遂に大兵を動かすの口實と成したのである、

川柳に 片桐も因るは質さかねのこさ

彌次「ナント聞いたよりか、がうせいなものぢやねへか、アノ斯うして御座るお手の平へ疊が八疊しけるさうだ」北八「狸の金玉と同じ事だ」彌次「勿體ねへこさを云ふもんだ、アノお鼻の穴から人が傘をさして出らるゝさ」北八「ソリヤまたしも、人が差して出るからいゝが、おらが方のほうたら八が鼻の穴からは、瘡がひさりでに、吹き出したは」彌次「馬鹿アいふな、お後へ廻つて見やう、オヤお有中に窓が開いてゐらア」北八「あれは大方潮を吹く處たらう」彌次「鯨ぢやアあるめへし（膝栗毛）」

豐國神社——方廣寺の南近にある、別格官幣社、豐天閣を祀る、慶長四年（凡そ二百廿年前）に豐國大明神の神號を賜ひ、社殿を造營、壯嚴華麗を極めたが、徳川氏の寛文年間（凡そ二百六十年前）に取毀たれ、自後二百餘年、その遺址も認められなかつたが、朝廷秀吉の功勞を追褒せられ、明治初年現在の處に再建せ

豐國神社

耳塚

られたのである、現在の社地は、古の大佛殿の舊址、唐門は伏見城門の遺構で、特別保護建造物である、石段下の西南、五輪の石塔のある小丘が耳塚で、川柳に 三韓の耳に日本の草が生へ などある處、俗に文祿の征韓の役（凡そ三百卅年前）に敵の首級數萬の耳を切つて持ち歸つたといふ耳を埋めた塚だ。

正林寺

正林寺——妙法院前の東山通を北へ、馬町を東（市電廣道馬町の東）五六丁にある、地は九條兼實の別荘のあつた處、後惠空上人を開基として精舎をなしたのである、本堂に圓光大師の像を安じ、阿彌陀堂、開山堂、樓門等がある、正林寺の西に、小松谷といふ小溪がある、昔平重盛の山莊のあつた處で、同所から燈籠堂の文字ある石を掘出したといふ、重盛が「心のやみの深きをは燈籠の火こそ照すなれ、彌陀の誓ひを頼む身は照さぬ所はなかりけり、」の今様を聽聞した舊蹟たさうな。又此處から東、清閑寺を経て、山科村花山に至る山道を、澁谷越といひ、昔は此道から東海道へ出たといふ。

西大谷

西大谷——妙法院の北方（市電五條坂）の東にある、眞宗、本派本願寺の廟所で、祖廟はもと吉水の北、

小松谷

小松谷——

澁谷越

澁谷越——

お俊傳兵衛

大谷即ち今の智恩院内にありしを慶長八年（凡そ三百廿年前）徳川家康智恩院を造營する時、遺骨を東西の兩寺に分け、命じて此處に遷さしめたのである、「大谷」の名これに起因するといふ、門前の蓮池を皎月池と呼び、架せる石橋を圓通橋又は俗に眼鏡橋といつてゐる、邊りの風致殊によく、紅白の蓮華咲き亂れる夏秋の頃は更に美しい。西大谷の北の裏門から東に坂を上つて、清水寺の境内に至る間、谷に亘つて一帶の墓地になつてゐる、「鳥邊山」「鳥邊野」といひ、古くから知られた火葬場だ、清水寺に至る途次、一本「壽寺」の境内にお俊傳兵衛の墓がある。

— 清水寺、圓山方面 —

清水寺

清水寺——西大谷の東北五丁（市電廣道松原の東六丁）音羽山の南腹にある。「そも、當寺清水寺と申すは、大同二年の御草創、坂上田村麿の御願なり。昔大和國子鳥寺といふ所に、賢心といへる沙門、正身の觀世音を拜まんと誓ひしに、ある時木津川の川上より、金色の光さし、を尋ね上つて見れば一人の老翁あり、かの翁語つて曰く、我は是れ行教居士といへり。汝一人の檀那を待ち大伽藍を建立すべしとて東をさして飛び去りぬ。されば行教居士といへば、これ觀音薩埵の御再誕、又檀那を待てとありしは、是れ田

村丸」と謠曲田村に當寺の縁起をあつかつてゐる、今の堂は寛永十一年（凡そ九十年前）徳川家光の造営したものである、本堂に化人の作といふ、本尊十二面千手眼觀世音と延鎮作の勝軍地藏及び勝敵毘沙門の三尊を安置し、西國十六番の札所になつてゐる、

松風や音羽の瀧は清水のむすぶ心はずゞしかるらん。

詠歌

奥の院、阿彌陀堂、釋迦堂、地主權現、三重の塔、田村堂等と奥の院の懸崖に音羽瀧がある、境内櫻楓多く、謠曲に「春宵一刻、價千金、花に清香、月に影、けに千金にもかへじとは、今此時かや、あら／＼面白の地主の花の景色やな」と陽春櫻花の美が歌れ、楓は「新高尾」の名に依つて世に著はれてゐる、

清水の上から出たり春の月、許六

舞臺の眺望又洛中第一の稱がある。

老僧、參詣を見かけて、一常山觀世音の御願はこれから出ますぞ。誠に靈驗あらたなる事は、盲がものいひ、歩いて來た壁がなほる。一たび拜する輩は、いかなる無病達者なりとも、たちまち西方極樂淨土へすくひさらんこの御願ぢや。ごなたも頂いてお歸りなされ。冥加錢は澤山にお心もち次第。御信心



清閑寺

の方はござりませぬかな（膝栗毛）

清閑寺——清水寺の音羽の瀧から南に五丁、歌の中山にある（前記正林寺の東から此處に至る路がある）、眞言宗、延暦廿一年（凡そ千百年前）創立、中興は佐伯公行である、本堂に千手観音、不動明王、弘法大師の尊像を安置してある、境内に西郷隆盛と月照上人が國事の密議をなしたといふ郭公亭、及び高倉六條兩天皇の陵と小督局塔がある、附近を「歌の中山」といふは、昔眞燕僧都が道行く女に心うつり、もの言ふべき便りなくて、清水への道を尋ねしに、

見るにたに迷ふ心のはかなくてまことの道をいかで知るべき。 化 人

と、忽ち姿消へ失たりといふに起因するのである。

清水寺の樓門前を「清水坂」といひ西に下ると、路が三つに分れてある、其北側に大日堂經書堂がある、そこから西に坂を下ると松原通で、南に下ると「五條坂」である、五條坂は清水坂と共に陶器で知られた處だが、清水坂の金彩燦然たる土産式に反して、此處は名工の瀬叢さもいふべく高雅なる陶磁器を製産してある、經書堂から北に下る石段の坂を「三年坂」といひ高臺寺を経て圓山方面に通じてある、坂は大同等

靈山正法寺

年に拓いた處で其名がある、又清水の子安塔に至るので又名を「産寧坂」といつてある、三年坂を下ると右に又石段がある、三年坂に對して「二年坂」といひ、こゝを下ると靈山正法寺に至るのである。

表忠銅碑
木戸公神道
碑

靈山正法寺——延暦年間（凡そ千百年前）傳教大師唐より歸朝後、此山に登り天竺の靈鷲山に擬して伽藍を建立し靈鷲山と號ふ、靈山は即ち靈鷲山の略稱である、往昔は名刹七十四箇寺に數えられ、堂塔四十有餘もあつたといふが維新後土地によつて寺域を狭められ、明治卅五年火災に罹り、今は僅に流祖殿を残すのみである、流祖殿に中興國阿上人、傳教作三面大黒天、空海作辨財天、菅公作毘沙門天等の諸像を安置してある、山上に靈山招魂塚がある、其中央に表忠銅碑が立つてある、碑面の六大字は、有栖川宮熈仁親王の御筆で、其南の高所に木戸公神道碑がある、尙城内に木戸孝允、中岡慎太郎、阪本龍馬、吉村寅太郎、藤本鐵石等名士の碑石が澤山ある。

八坂塔

八坂塔——二年坂を下る反對に、西へ往くと至る（市電廣道松原の東北近く）法觀寺といふ、聖徳太子が草創せられた塔で、本邦寶塔の嚆矢といふ、往昔は伽藍壯麗極をめたが今は只寶塔と他に太子堂、藥師堂の二字があるのみだ、塔の下層に、大目、釋迦、阿難、寶勝の像を安置してある。

もうちつと祈る。塔は又たふれさ川柳にある通り、昔此塔が傾いたとき、僧淨藏が祈り直したといふ傳説がある、今は特別保護建造物になつてゐる。

高臺寺

高臺寺——八坂塔の東北近く（市電安井北門の東）にある、鷲峰山と號ふ、地は往昔の雲居寺のあつた舊蹟、慶長十一年（凡そ三百年前）秀吉の北政所高臺院が、夫の冥福を祈る爲めに建立した巨刹で、殿堂の多くは政所の殿材を用ひ堂塔頗る壯觀を極めたが、後數度の火災に罹り、其多くは焼失し、今は只開山堂によつて往昔の結構を偲ぶのみだ、山上に豐太閤及北政所の廟がある、佛殿、方丈等の建物は何れも近年に再建されたものだ、地は靈山の下、蒼樹繁茂、櫻樹多く、殊に萩は古から知られてゐる。

双林寺

双林寺——高臺寺の北にある、天臺宗、本堂に傳教大師作の薬師如來を安置してゐる、豐臣秀吉こゝに花見の宴を催し、前田玄以に命じて花の制札を書かしたといふ舊蹟で、治承元年（凡そ七百年前）藤原成親、僧俊寛等と平氏を滅さんとして鬼界ヶ島へ流された、平康頼の山莊のあつた處、康頼教されてこゝに歸り

ふる里の軒の板間に苦むして、思ひしよりも洩らぬ月哉 康 頼

と詠み、建久二年（凡そ七百年前）西行此處に庵を結び、傍に櫻樹を植付けて

願はくは花のももにてわれ死なむその如月の望月の頃 西 行

と吟じ同九年此寺で入寂した、其後西行の跡を慕ふて來た和歌の名手頼阿が庵を結び

あこしめて見ぬ世の春を忍ぶかなその如月の花の下蔭 頼 阿

以上三人の墓が本堂の傍に並んでゐる。寺の入口の南に、西行、頼阿共に自作の像を安じてゐる西行庵、

同庭内に西行樓がある。西行庵の西に芭蕉の像（許六作）を安じてゐる芭蕉堂がある。

柴の戸の月やそのまゝ阿彌陀坊 芭 蕉

の名吟の舊跡さて門人が營んだ處といふ、芭蕉堂の北に畫家池大雅の大雅堂舊址がある。

東大谷——双林寺の東北にある、大谷派本願寺の廟所で、始め大谷の智恩院内にありし祖廟を東西に分ち

其一部を納めた處で、廟の上に大師が愛撫してゐたといふ虎石がある。

長樂寺——東大谷の北、圓山公園東南の山上にある、宇多天皇の建立、此の地、支那の長樂精舎に似てゐる

長樂寺

— 京都の見物 —

西行庵
芭蕉堂

大雅堂舊址

東大谷

長樂寺

吉水院

るので、その名がある、本尊千手八臂十一面観音を安置してある、鐘樓の前に時雨の楓といふ一株の老楓及び北の山上に頼山陽、浦上春琴等の名士の墓がある。

吉水

吉水院——長樂寺の北、圓山公園の東方にある、圓山と號し、安養寺といふ、傳教大師が開いた寺で、慈

將軍塚

鎮利尙の再興、吉水禪房と稱へ法然上人が法錫を留めた舊跡である、名工粟田口吉光が用ひて名刀を鍛いたといふ吉水は庵室に至る傍、辨財天祠の畔にある。

八坂神社

將軍塚——長樂寺、吉水院の後峰東五丁華頂山の頂上にある、桓武天皇御奠都のごき、王城鎮護の爲に八

尺の土隅を造つて、甲冑を着せ、弓箭を持たして、西向に埋めた塚だ、天下に變亂があるときは塚が鳴動するこ爾來いひ傳へられてある、眺望展けて頗るよい所だ、大日堂の附近から清水寺に至る路がある。

真葛ヶ原に、そよ／＼と、秋は色ます華頂山、時雨をいさふ傘の、ぬれて紅葉の長樂寺、思ひぞつもの圓山に、今朝も來て見る、雪見酒エ、そしてやぐらの差向ひ、ヨイ／＼／＼／＼ヨイヤサ。(端唄)

——祇園、粟田口、南禪寺方面——

八坂神社

八坂神社——四條通の東行當り(市電祇園石段下)にある、聖武天皇の御宇、吉備大官唐より歸朝の際、播

州廣峰に垂跡し給ふを、後遷座した社で、素盞鳴尊、妃稻田姫及び尊の八王子を祀る、即ち古の祇園精舎で、明治元年八坂神社と改め、大正六年官幣大社に列せらる、今の本殿は承應三年(凡そ二百七十年前)徳川家綱の改造した、殿舎造りの壯嚴なるものだ、外陣の狗犬は運慶の作といつて名高い。尙境内に石の鳥居、樓門、拜殿、神樂殿、繪馬堂等と數多の末社が散在してある、其祭禮が有名な祇園會で古來京都の盛觀と稱せられてある、毎年七月十六日の夜は、宵山といつて氏子の軒前には、御神燈が掲げられ、幔幕を張り、家の内は屏風を繞らし、又生花を置く等、町々には鉾や山棚が配置される、同十七日に御渡御、同廿四日に還幸の儀がある、結構宏壯、粧飾華麗、眞に美術の精華を鐘めたる祭典だ。

祇園會や真葛ヶ原の風薫る

蕪村

鉾に乗る人のきほひも都かな

其角

圓山公園

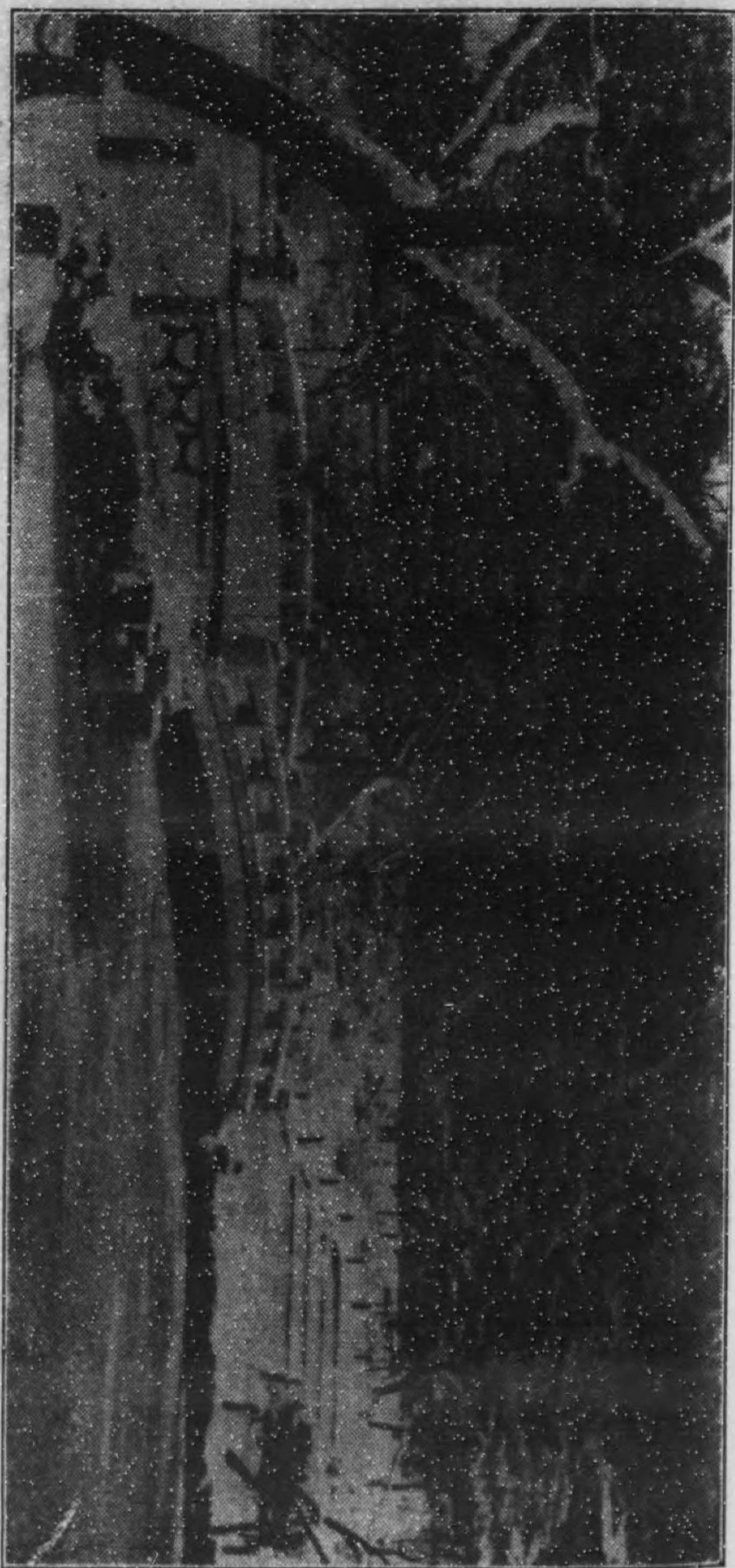
圓山公園——八坂神社の傍にある京都第一の公園で、古來真葛ヶ原ともいひ、

春は花、いざ見にごんせ東山、色香あらずふ夜櫻や、うかれ／＼と、粧も不粧も物がたい、二本差しでもやはらかふ、祇園豆腐の二軒茶屋、みそぎぞ夏は打連て河原で集ふ夕涼み、ヨイ／＼／＼／＼ヨイヤ

サ。(端唄)

なご、唄はれた景勝の地である、池あり、山あり、噴水あり、梅、桃、櫻樹多く清香、落紅遊人の情思を惹く趣がある、小高き丘に有名な枝垂櫻がある、花時の美観はいはずもがな、祇園の夜櫻さて天下に鳴り響いてゐる。

「彌次郎兵衛北八、祇園の社を悉く順拜して、南の方、樓門を出ると二軒茶屋、豆腐田樂の名物にて、赤前垂したる女ども大勢門に立ちてしやべる。女中「お休みなされ〜、お支度なさらんかいな」彌次「ハ、ア、こゝが川柳點に、豆腐切る顔に祇園の人たかりさいつた所だな。アレ北八見や。こいつは妙たく〜と覗いて見れば、女の豆腐切る音トント、トシ北八「ホンニ面白へ、イヤ時に此處で一盃やらかしては何うだ、チト腹が北野の御神木だ」女中「サア奥へお入りなされ」と兩人奥へ通る、女中「お茶お上りませ」北八「田樂で飯にしやう、酒も少し」女「ハイ〜」(中略) 彌次「サア〜女中勘定を頼みます」女中「ハイそれへ」と書附を持ち来る、彌次「ドレ〜北八見や、ざつとした所が此書附だ」北八「オヤ〜十二分五分たア、がうせへにたけへ〜、二朱位のものだ、彌次さん、まけて貰ひなせへ」彌次「イヤ安



いものた、ソレつりを持つて來な、サアノ北八荷物が出來た、皆持つてけへるのた、と硯ぶた、大平、井なご皆鼻紙にて拭き片附る、北八「彌次さん、それを何うする、」彌次「コレ女中、コリヤ皆持つてけへりやすぞ」女中「イエそれは」彌次「ハテ、さつき此井はいくらたご聞いたら、五分たごいつたぢやアねへか。硯ぶたは二匁五分、大平は三匁、よしか。此鉢はご聞いたら三匁五分と貴様云つたに違ひあるめへ。そこで締た所が十二匁五分渡したから、言ひ分はあるめへ」と眞面目になつて風呂敷に包まうとする故、女中肝を潰して、女中「モシナ私のいつたのはお肴の事で御座りますはいな」彌次「ハテ肴の直段聞く氣なら、此硯ぶたに盛つてある肴は幾何と聞きやす、それを此硯ぶたごいつたら二匁五分たごいつたぢやアねへか」と言ふ處へ、委細を聞いて前垂したる男、勝手より出で、男「ハイこれは貴君の御尤も、宜しう御座います、お持ちなされませ。其代り、道具の代は頂きましたが、召し上つた肴の御拂ひはまた頂きませんはいな。それを御勘定下さいませ」彌次「成程々々、食つた物は高が知れてある、拂ひやせう、いくらた」男「ハイ七十八匁五分で御座いますはいな」、彌次「飛んだ事をいふ、そんな事があるもんか。何でも食つた物の代は二匁はかりやらう、」男「イエ、ハテ高

いご思召すなら、あがつた物を残らずお戻し下さりませ」と此一言に困り、理屈詰にあひて大閉口となり、彌次「いまくしい、言ひ分があれご勘定づくで恰好が悪い、了簡してやらう」とにらみ廻して立上り、這々此所を出づれば、女中「ようお出で、又お近いうちにへ」、彌次「糞をくらへ、ハ、ハ、ハ、」

又しても祇園の茶屋に田樂の、みそを附けたる身こそくやしき（膝栗毛）

知恩院

知恩院——圓山公園の北隣にある、淨土宗鎮西派の總本山、華頂山大谷寺と號ひ、東山第一の巨刹である高倉天皇の安元元年（凡そ七百五十年前）法然上人叡山を出で、東山の吉水に草庵を結び、吉水禪房と號ひ念佛法門を開創した處、創建當初のものは上人が流罪中に荒廢に歸し、上人入寂後法門益々傳播し、堂塔伽藍壯嚴を極めたが兵火に罹り、後秀吉、家康、秀忠と相次いで伽藍を造營せしが、又々火を失し、今の堂は寛永十六年（凡そ二百九十年前）に徳川家光の建立せるものである、本堂の明照の額は今上陛下の御宸筆で、本尊圓光大師自作の像を安じてある、堂の庇天井裏にある、火除さかいふ呪の傘がある、堂の後が俗に千燈敷といふ衆會堂だ、阿彌陀佛を安じてある、この廻廊が驚張といつて左甚五郎の造つたものといふ、歩む毎に鶯音を發するので名高い、方丈の梅、菊、柳、鶯等の各間の襖繪は、何れも狩野諸大家

の書けるもので有名だ。

降る雨も小春なりけり智恩院

一 茶

地は華頂山の西麓、寺域四萬坪に餘り、全山老樹鬱蒼、山門、阿彌陀堂、茶堂、勢至堂等と北地の高地に圓光大師の廟がある、境内櫻楓多く、春秋の頃は美しい。

青蓮院

青蓮院——智恩院の北隣にある、俗に粟田御殿といふ、傳教大師の開基、行立和尚の中興である、書風で名高い御家流は、當時の住職であつた、尊圓法親王が筆法に精通せられて傳へられたものである、青蓮院の北が植髮堂で、親鸞上人九歳のときに自像を作られて、自髮を植ゑられたといふ像を安置してゐる。

植髮堂

青蓮院の門を出た東西の筋が三條通で西、白川橋から東、山際に至る間を粟田口と呼び、東海道五十三次を経て京都に入る要衝で、陶器師多く粟田焼の名と共に古くから著はれてゐる、植髮堂より北に行く大道を應天門通といひ疏水に架す慶流橋(市電慶流橋)を渡るに岡崎公園である、前記植髮堂から三條通を北に行くに右側に粟田神社がある、(市電廣道の南)素盞鳴尊、大日貴命外十座を祀る郷社で、十月十五日の例祭劍鋒の供奉は有名だ、ここから東數丁行くにインクライン(市電三條驛上)である、三丁餘の急坂を船

粟田神社
インクライン

南禪寺

が昇降する状、所謂船山に登るの觀がある、インクラインの上乗場から舟に乗ると隧道を抜けて、大津へ出られる、インクラインに沿ふて下り、疏水に架す橋を渡つて東に行くに、南禪寺の山門に出る。

南禪寺——(市電南禪寺前)の東にある、臨濟宗の總本山、瑞龍山太平興國南禪寺と號ふ、大明國師の開基龜山上皇此地の風光を愛で給ひ離宮を營み給ふ處、正應の頃宮中に怪異あり、上皇東福寺の僧普門(大明國師)を召して祈らせ給ふに怪異遂に止む、上皇親感の餘り、正應四年(凡そ六百卅年前)離宮を國師に賜ひて寺となしたる巨刹で、本堂は明治四十一年の再建、本尊釋迦佛を安置してゐる、舞臺の石川五右衛門が大きな煙筒をくわねて春宵を惜んだのは此寺の山門で、今のは寛永四年(凡そ二百九十年前)藤堂高虎の再建である、大方丈は清涼殿、小方丈は伏見桃山の別殿で、山門と共に特別保護建造物に編入されてゐる、其他金地院、南禪院、聽松院、天授庵等の子院が境域にある。

水觀堂

水觀堂——南禪寺の北にある、淨土宗西山派の總本山、聖來迎山禪林寺といふ、弘法大師の高弟眞紹僧都の開基、中興は永觀律師である、本堂に安置せる本尊阿彌陀佛は、世に見返り阿彌陀にて其の名を知られてゐる、中興の永觀が、朝行道のとき本尊が壇を下り、永觀の先に立つて行道された、永觀餘りの勿體

なさに躊躇してゐるに、本尊は永観を見返り、遅しと宣はれた、律師の願によつて、今もそのまゝの姿であるといふ、堂前に永観が、實を病人に與へたといふ悲田梅と名付けた老樹や、祖師室、傳法堂、辨天池等がある、又楓は永観堂の名によつて、著はれてゐる。

若王寺神社

若王寺神社——永観堂の門前を北に、道を東にさるゝに至る、國常立尊以下四柱を奉祀する處、後白河天皇紀州熊野權現を勸請せられ、天照大神の別號若一王子を以て若王寺神社と號ひ、又往昔は櫻樹多く足利義政が花見の宴を開いた所といふ、丘上に楓樹多い、又山中に十一面、千手、如意輪の三瀧がある、若王子社から北へ、安樂寺、法然院を経て銀閣寺に道が通じてゐる、又社から西に道をさるゝ岡崎町に至るもので、岡崎神社や平安神宮へ出られる。

——岡崎、銀閣寺、黒谷方面——

平安神宮

平安神宮——(市電慶流橋の北)にある、官幣大社、桓武天皇を祀る、明治二十八年平安奠都千百年祭に際し、新に工を起して社殿を造営せし所、社殿の前に平安城の往昔を偲ぶべき大極殿、廻廊、蒼龍白虎の兩樓及龍尾壇を構へ、其南に應天門がある、碧瓦紅欄、燦として輝け、華麗壯嚴、東山の翠と相輝映して

平安神宮

春佳畫



武徳殿
美術館
岡崎動物園
岡崎公園
商品陳列所
圖書館
平瀬貝類館
熊野神社

洛中の一美観である、本殿の後が神苑で、東の池を蒼龍池といひ、西の池を白虎池と呼んでゐる、花樹多く花の頃は美しい、又私祭の時代祭は神宮創建と併せて執行せられたもので延暦遷都以來文物制度の變更を區別し、其當時の服飾を装ひて神幸に供奉する祭典である、例年十月二十二日の當日、早朝神興平安神宮より市會議事堂に入御、午前九時行列を整へ、同所出發、先頭を列外として山國隊、弓箭隊と次ぎ、徳川時代の將軍名代の上洛式、織田信長上洛式、城南流鏑馬式、藤原文官參朝式、延暦武官出陣式、同文官參朝式、以上の順序で、寺町を北に、二條を西に、東洞院を南に、松原を東に、寺町を北に、休憩所に入り、午後一時同所出發、寺町を北に、四條を東に、大和大路を北に、三條を東に、應天門通を北に、神宮へ遷幸されるもので、京都の一名物として著はれてゐる、大極殿の西に、武徳殿東に美術館がある。

岡崎動物園——大極殿の東南（市電廣道）にある、園内廣濶、大噴水あり、花卉あり、世界の奇鳥、珍獸を悉くここに集め四季の逸樂に備へてゐる、附近に岡崎公園、商品陳列所、圖書館等動物園の傍、廣道橋を渡るに、有名な平瀬貝類館がある。

聖護院
京都帝國大學
第三高等學校
高等工藝學校
大學病院
第一中學校
吉田神社
滿願寺

權現を勧請せられし帝都三熊野の一で、往昔は社殿樓門宏大壯麗を極めたといふが應仁の兵火に灰燼と化し、今の社殿は天明年中（凡そ百四十年前）の再建である。社から一ツ北の筋を東一丁に、天皇修驗道の總管聖護院がある、昔は常光院といつてゐたが、九世管主覺忠が白河天皇の護持僧となりしより今の名に改めたのである本堂に本尊不動明王を安じてゐる。聖護院の東の通を北に五丁、突當りに京都帝國大學がある、其向ひが第三高等學校で、大學の西隣が高等工藝學校だ、附近に大學病院や第一中學校等の大きな建物がある、大學の東近く神樂岡に吉田神社（後記）がある。

滿願寺——應天門の前から冷泉通を東に二三丁、南側にある、日蓮宗、日享上人の開基、本堂に釋迦佛を安置してゐる、境内に祖師堂と堂の南は關伽井がある、これ法勝寺の關伽井で、鬼界ヶ島へ流された法勝寺の執行俊寛僧都の舊跡であるといふ。

岡崎神社——滿願寺の東の筋を、北に入ると至る、素盞鳴尊と同妃及び其王子を祀る、岡崎町の産土神で往昔は東天王社といひ、頗る盛觀であつたといふが應仁の兵火に罹り、今の社殿は其後再建したるものである。

岡崎神社

黒谷光明寺

黒谷光明寺——岡崎神社の北近く宇黒谷にある、浄土宗、鎮西派の本山、紫雲山と號ふ、昔法然上人が叡山の西塔黒谷から山を下つて、念佛宗を弘通せんとして、紫雲光明を認め、一堂を建立して光明寺と名づけ、又地名に因んで白河禪房といつた處、熊谷直實が上人の戒を受けて蓮生房と改めたのもこゝだ、本堂に上人自作の像、阿彌陀堂に惠心僧都作の尊像、觀音堂に行基作の千手觀音を安じてゐる、其外熊谷堂、勢至堂、文珠堂等と境内に春日局が奇進したといふ極樂橋、熊谷直實が佛門に入る時に懸けたといふ鐘懸松や開祖が石上に腕いて動化有縁の地を祈つた時、紫雲が石下から起つて天空に漲つたといふ紫雲石が文珠塔の北約一丁の小堂にある。

黒谷の隣に白し蕎麥の花 蕪村

眞如堂

眞如堂——黒谷光明寺の東北近く、淨土寺町にある、天臺宗、鈴聲山眞正極樂寺といふ、本堂に安置せる本尊の阿彌陀佛は、慈覺大師が苗鹿明神から神木を授かつて作つたといふ靈像で、初め叡山の常行堂に安じたが此寺の開基戒算上人が靈夢に感じて、現在の處を眞正極樂の淨地として移したといふので寺の名がある、極樂に眞正なさいふから面白い、今の堂宇は寶永年間（凡そ二百二十年前）の再建である、薬師

宗忠神社
陽成天皇陵
後一條天皇
齋場所太元宮

堂、三重塔、地藏堂、元三大師堂等がある、境内に楓樹及萩多く秋の頃は頗る美しい。眞如堂から西北に、吉田神社に至る附近に、天照大神と神道黒住派教祖黒住宗忠を祀る宗忠神社、陽成天皇陵、後一條天皇陵がある。

齋場所太元宮——神樂岡にある、後宇多天皇が卜部兼那に勅して勸請せられた處で、卜部家は代々神社の事を司り、我國の大小神社は皆此家から命を下し官位の執奏をなしたといふ、本殿は八角造りの萱葺で嵯峨帝や後十御門帝の宸筆の篇額を掲げてゐる、外宮内宮を初め日本國中の總攝社三千餘座を奉祀した社だ。

吉田神社

吉田神社——卜部齋場の北、大學の東近く吉田山の西麓にある、官幣中社、建美賀豆智命外三神を祀る若宮は門外の東の丘に、其北にある小祠は地主神の神樂岡社で、南にある龍澤池は奈良の猿澤の池に擬して造られたものであるといふ。社から北三丁に後二條天皇陵がある。

後二條天皇
百萬遍

百萬遍——大學の北（市電出町橋の東八丁）にある、浄土宗鎮西派の本山、知恩寺が本名で、長徳山功德院と號ふ、昔は今の相國寺附近にあつて一に今出川釋迦堂といはれてゐた寺で、後法然上人が念佛の道場

となした處である、又後醍醐天皇の朝に、疫病が非常に流行した時、此寺の住職善阿上人が一七日の間、念佛を百萬遍誦したので疫病が止んだ、教感殊に深く百萬遍の號を下賜されたのであるといふ、本堂に圓光大師の像、本師堂に釋迦、兩脇に毘沙門天、地藏尊、不動尊、阿彌陀、觀音、勢至、外二十五菩薩を安じてゐる、尙ほ境内に觀音堂、阿彌陀堂、地藏堂等と地藏堂の東、善導院の境内に土佐光起や鳥居元忠の墓がある。

銀閣寺

銀閣寺——百萬遍の東七丁、白河道を右に分れて更に十丁淨土寺町にある、臨濟宗、慈照寺と號ふ、足利義政閑居の所で、東山殿と稱し、

我庵は月待ち山の麓にてかたぶく空の影をしぞ思ふ 義政

と詠んだ榮華の舊跡である、佛殿に本尊釋迦佛を安じてゐる、銀閣は二層の寶形造の高閣で義政が義滿の金閣寺に倣ふて築いた處、下層を心空殿、上層を潮音洞といひ、運慶作の觀世音の像を安じてゐる林泉は相阿彌の作で、むつかしい名前の附いた橋や石が配置されてゐる、又此寺の茶の間は義政の創設で、茶室四疊半の濫觴とて非常に名高い。

如意ヶ嶽
大文字山

池水に浴もちりけり蓮の花 蝶夢

銀閣寺の東の山が如意ヶ嶽で、俗に大文字山といひ、山腹全體に亘る大の字の火床が掘つてあつて、毎年八月十六日の晩に其火床の中で、薪を燃やして精靈の送火とする、中々壯觀なものだ。

法然院

法然院——銀閣寺の南にある、法然上人が弟子の安樂や住蓮等と共に六時禮讃を創始した處で、善氣山萬無寺と號してゐる、本堂に善心僧都作の本尊阿彌陀佛、脇壇に勢至菩薩、圓光大師、中興萬無上人の像を安じてゐる、地は如意ヶ嶽の麓で、老樹繁茂し、頗る清淨の境である。

安樂寺

安樂寺——法然の院の南、若王子社の北、鹿ヶ谷町にある、本堂に善心僧都作の本尊阿彌陀佛、脇土に運慶作の觀音、勢至と左壇に松蟲、鈴蟲の座像、法然上人張子の像を安じてゐる、昔後鳥羽上皇の寵妃松蟲鈴蟲の二女が、法然上人の法話を聞いて佛心を起し、遂に此の寺に遁れて來て、尼となつた、それが爲に此の寺に住んでゐた安樂、住蓮の二僧は、上皇の逆鱗に觸れ死罪になり、その師上人は土佐の國へ流された、寺も廢滅となつたが、後人が念佛弘通の舊跡として寺を起し、安樂寺と名付けた、境内に松蟲、鈴蟲の二女と安樂、住蓮の墓がある。

靈鑑寺
談合ヶ谷

安樂寺の南に比丘尼御所といはれた靈鑑寺がある、靈鑑院尼公の開かれた臨濟宗の寺で、智證作の不動明王を安じてゐる、寺の東山中にある談合ヶ谷は、昔大納言成親が其同志等と共にこゝにあつた俊寛僧都の山莊で、平家を亡ぼす密謀を凝らした所だ。

鹿ヶ谷 みんな道をかへて来る (川柳)

三條大橋

三條大橋——(市電木屋町三條)にある、鴨川に架した擬寶珠の附いた古風な橋で、南の四條、五條の橋と共に京都三大橋の稱がある。

京へきて旅の休みや花ざかり 太 祇

昔の東海道五十三次及び東山、北陸の諸街道の起點である。

東京一三〇里三四町、大阪一三三三二町、奈良一〇里二七町、大津へ二里二六町、丹後舞鶴へ二四里二五町、福知山へ二二里二五町、淀へ三里三一町、伏見へ二里一八町、宇治へ四里一一町。又此橋の上から高山彦九郎が跪いて、皇居を拜したことは著名なことである、東詰にこゝを起點として

京阪電車
京津電車
瑞泉寺

宇治、大阪方面に通てるの京阪電車及び大津市に至る京津電車の起點がある。

瑞泉寺——三條小橋を南に入つた東側にある、瑞龍院日秀尼が其子豊臣秀次追福の爲めに建立した寺で、浄土宗、慈舟山と號ふ、聖徳太子作の阿彌陀佛を安置してゐる、堂前の碑石は即ち秀次の墳墓で、秀次が高野山にて自刃せし首を三條磧に梟し、其前にて數名の侍妾と幼兒を斬殺し、同穴に埋めて畜生塚と名づけた處、其後土中に埋没してゐたのを高瀬川開鑿の時掘出したのであるといふ。三條大橋の西詰から四條大橋の西詰に至る間の濱通が先斗町遊廓で、祇園新地の都踊に對して、五月上旬から鴨川踊が開かれる。

先斗町遊廓
四條大橋

四條大橋——三條大橋南五丁(市電四條小橋)京都唯一の鐵筋石材の橋で、昔は祇園四條橋といはれ、水治二年(凡そ七百八十年前)に初めて架し、後洪水の爲めに屢々流失して橋供養などをしたことがあつたといふ、現在の橋は大正二年の竣功で、其工費廿五萬圓といふ、實際こゝに立つて東山を望むと

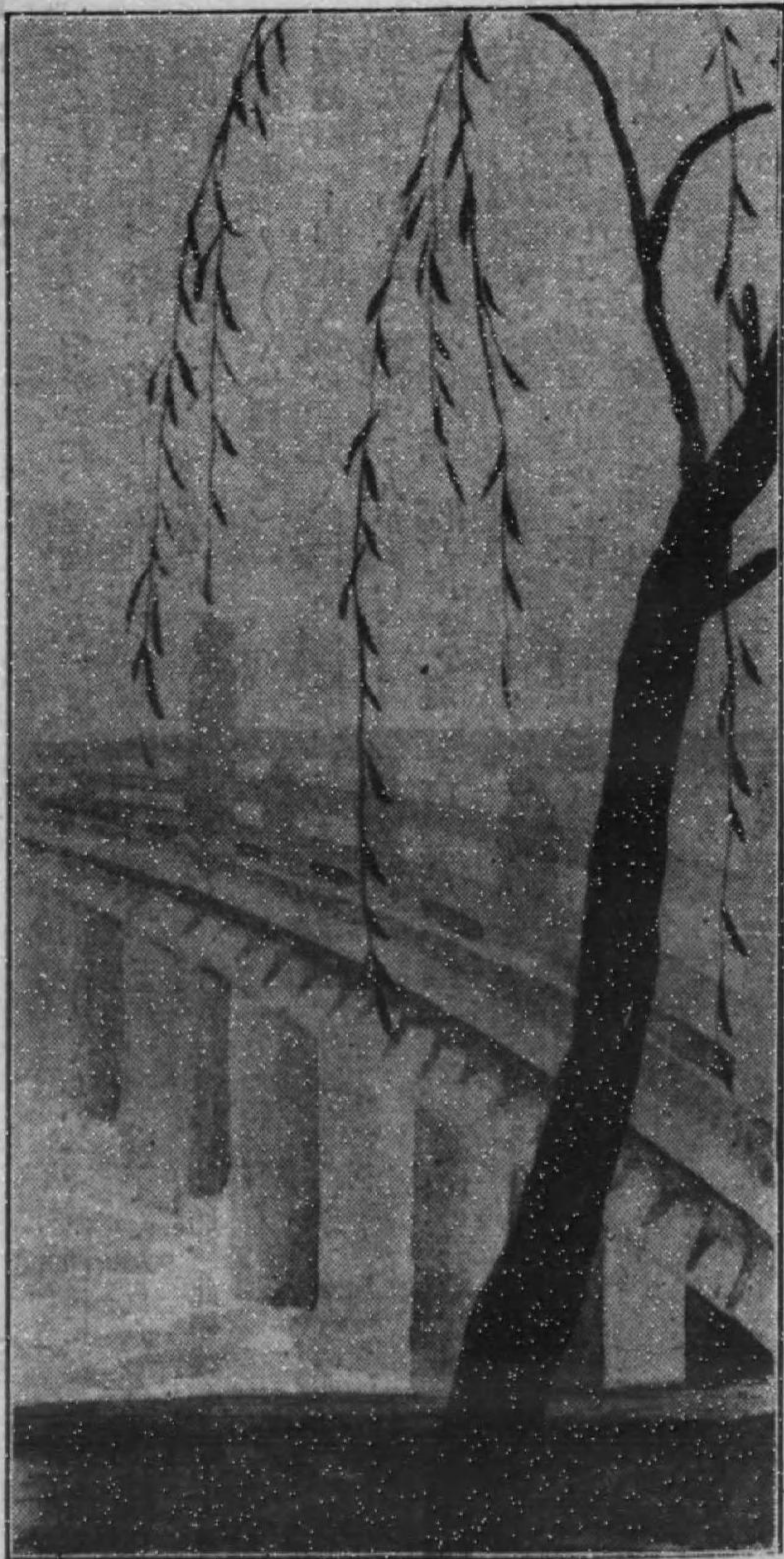
蒲團着て寝たる姿や東山 嵐 雪

の名吟を存べる、一夏の景色は清らかに、加茂の流れの夕涼み、闇も月夜もわが立つ床に、明を恨むる戀の山と鴨川の夕涼みが俗語に唄はれてゐる、橋の通り筋を四條通といひ當市繁榮の中心地で、東詰に劇

南座
藝園新地

場南座がある、維新の頃までは其向ひに北座があつたのだが火災の爲めに廢絶し今は南座を残すのみである。附近は藝園新地といつて京都第一の遊廓だ、廓内に忠臣蔵でお馴染のお茶屋一力がある、有名な都踊りは即ち此廓の催しもので、花の頃は非常な人気を呼ぶ。

北八「さきに彌次さん、此所は何さいふ所だの、がうてきに意気な女がちらくするは」彌次「ハア、紫帽子(女形のつけたもの)の野郎共が見ゆるから、大方宮川町さいふ見當た」北八「来るぞく、美しい妓さもが来る、いゝ時においらア着物を買つて宜かつた、まんたら裸の上に其の木綿合羽ぢやア、あいつらに擦れ違つても外聞が悪い」こ俄に襟をかき合せて見榮を張りながら、向ふより来る妓に擦れ違ひ通れば、一人の妓振返り北八を見て 妓「初音さん、見なませ、あの人の着物に大きな紋が附いてぢやわいな、オ、おかしオホ、……」初音「ホンニ阿呆らしい人さんや、オ、好かんやのオホ、……」こ打笑ひ行き過ぐ、彌次郎兵衛も心付て 彌次「オヤく北八、手前が着物を見や、背中の横ちよに大きな紋所が喰つ付いてあらア」北八「何處にく」こ振返りてよく見れば職を紺に染めたる布子故、一寸見れば知れねども日當りへ出るこ大きな紋所が有りくこ透いて見ゆる 北八「コリヤ大變々々エ、古着屋めが、



飛んだ目に逢はせやがった、道理で安いと思つた、エ、いめくしい」と真面目になりて吹きながら四條通りに出づれば、名にしおふ川東の生粹祇園町の繁昌、芝居の櫓太鼓てんからくの音男ましく、狂言の名代看板華やかに、木戸番「サア」く評判ぢやく、今が三五郎の腹切、此の後に嵐吉と友吉が所作事、評判くく（膝栗毛）

目疾地藏

目疾地藏——四條大橋の東近く（市電四條細手）にある、浄土宗、仲源寺といふ、本尊の地藏は眼病に靈驗顯著なりといふので參詣する人が多い。

建仁寺

建仁寺——目疾地藏の東の筋、花見小路を南に三丁程行くに至る、禪宗五山の一で、建仁二年（凡そ七百廿年前）源頼家の建立、本尊釋迦牟尼佛を安置してゐる、往昔は頗る宏大なる伽藍で、堂塔子院五十餘を數けたといふが數度の兵火に罹り、昔日の觀はないが今尙佛殿、方丈、興禪院、禪居庵、中門等がある巨剎で、中門は平教盛の第門の遺構で扉に矢痕があるので矢の根門といひ方丈と共に特別保護建造物である、又東鐘樓の鐘は加茂川の深淵から引上げたものといひ、昔は夜半に夜明けに陀羅尼經を誦しつ、撞いたもので陀羅尼經といつて有名た、寺寶に十六羅漢像十六幅其他數多の寶物を藏してゐる、東北門

安井神社

を出で、東に行くに南に安井神社（市電安井北門）がある、崇徳天皇の尊靈を鎮める爲めに寺院を建立した處、後荒廢せしを元祿年間（凡そ二百二十年前）社殿を造營、本殿に崇徳帝と金比羅神を祀る、俗に安井の金比羅といはれてゐる。又建仁寺の西南近く小松町に惠美須神社がある、一月十日初惠美須、十月廿日の惠美須講は參詣者で雑沓を極める。惠美須社から大和大路を南に、松原通りを東に行くに念佛寺がある、（市電木屋町松原）に愛宕寺ともいひ、弘法大師の開基、千觀内供の中興である、本尊千手觀音と毘沙門地藏、二十八部衆を安置してゐる。

惠美須神社

念佛寺

六波羅密寺

六波羅密寺——念佛寺の南近く（市電廣道松原の西）にある、眞言宗、普陀落山と號ふ、應和三年（凡そ九百六十年前）空也上人が建立する時、名僧善智識六百名を請じて金字大般若經を記し本寺の下に埋めたといふ靈剎で、本堂に上人作の十一面觀世音を中央に、傳教大師作の藥師佛、運慶作の四天王、地藏尊、平清盛等の像を安置してゐる、同堂は創建當初のもので特別保護建造物である、

おもくとも五ツの罪はおもからで六波羅堂にまゐる身なれば。 詠 歌
西國第十七番の札所になつてゐる、寺傳によると、村上天皇天曆五年に疫病が非常に流行して病になつた

六波羅館舊址

者は大抵死んだ、空也上人痛く之を憐んで、十一面觀音の尊像を刻み、之れを車に乗せて自ら市中を牽き歩き、觀音に供へた茶を病人に飲ますと、其多くは平癒した、天皇も此の茶を召されて御惱が平癒したので毎年正月の元日に茶を召して服された、これが今日の大福茶の濫觴であるといふのだ、王が服されたので大福茶も語路が合つて面白い。寺の西方一帯の地は歴史上有名な六波羅館舊址で、平正盛、忠盛、清盛重代の邸があつた處、平家滅亡の後源賴朝がここに新邸を築き、承久の後には北條氏が檢斷所をここに設けたといふ榮華の夢の跡だ。

珍皇寺

珍皇寺——六波羅密寺の北筋、念佛寺の南、松原通りを東に行くに至る(市電廣道松原の西)、本堂に傳教大師作藥師佛、運慶作の地藏尊を安置し、西面の一堂に閻魔王、弘法大師、小野篁の二像を安じてゐる、本堂の前を俗に六道の辻といひ鐘樓の鐘を迎へ鐘といつて孟蘭盆には此の鐘を叩いて精靈を迎ふとて參詣者が群集する。珍皇寺の南方(市電五條坂の西)に、若宮八幡宮がある、應神天皇、神功皇后、仲哀天皇、仲恭天皇を祀る、昔は六條若宮といはれ六條に鎮座せられたのを此處に遷し社殿頗る壯麗を極めたといふ、今は承應二年(凡そ二百七十年前)後光明天皇の勅によつて造営されたものである。五條坂を下ると五條大橋

五條大橋

若宮八幡宮

御影堂
長講堂
市比賣神社

(市電五條小橋)に出る、昔は今の松原橋の所にあつたのを、天正十九年(凡そ二百卅年前)に豊臣秀吉が架け替へたもので、現今のは明治四十四年の竣工である、謡曲橋辨慶に「さても牛若は母の仰せの重ければ明けなほ寺へ上るべし、今宵はかりの名残なれば、五條の橋に立ち出で、川波添はてたちまち、月の光を待つべしと、夕波の、氣色はそれか夜嵐の、夕程なき秋の風、面白の氣色やな、面白の氣色やな、そのろ浮立ち我心、波も玉散る白露の、夕顔の花の色、五條の橋の橋板を、さろろくさ踏み鳴らし、音も靜に更くる夜に、通る人をぞ待ち居たる」と牛若丸が、五條の天神へ詣る辨慶と切合つたといふ當時の靜な趣は、北の松原橋にしても偲ぶことが出来ないが、東山の翠、鴨川の流れば今も昔さかはらない、大橋から小橋を渡つて市電に沿ひ、南に新寺町通りを行くと附近に新善光寺の御影堂、長講堂及殿島の神を祀る市比賣神社がある。

— 比叡山、大原方面 —

比叡山——山城、近江の兩國に跨り、京都市の東北に巍然として聳いてゐる峰巒がそれで、東峰を東塔、南峰を無動寺、北峰を西塔といつて最高峰を四明ヶ嶽といふ、四明ヶ嶽は海拔二千八百餘尺、眺望展けて

比叡山

目を遮るものなく、京都は脚下に琵琶の明鏡は一瞬の中に落ちて近江を指點するを得べく、遠く大和、河内、攝津、伊勢、美濃、若狹、越前方面の山峰繞りて大觀壯絶を極め、宛然一大畫圖を見るの觀がある。晴登る朝日の雲のしたことに初雪ふく比叡の高山

覺性

白川村道

承平の將門、天慶の純友は此の上から平安京を望んで異望を抱いたさうた、川柳に「叡山で見下す時分塚が鳴り」さある、そんな奴等は論外だが握り飯をかぶり／＼脚下に集まつた山水を睥睨してお山の大将を極めこむもよからふ。登山道は白河村からすると修學院村からと、八瀬村からするこの三道がある。白川村道——京都市電出町橋から東方十六丁、白川村の出外れから、志賀山越道に岐れて、左に坂路一里登ると七曲り、平坦なる一路を琵琶湖を望みながら進んで無動寺に屬する辨天堂に至る（白川村から一里半）。

修學院村道

修學院村道——市電出町橋から東北廿五丁、若狹街道の八瀬、大原の咽喉たる山端に至る（途次道を右にこつて一乗寺に行く）と詩仙堂や金福寺がある又山端から道を左にすると松崎村の東山麓に松崎大黒天や妙泉寺がある。山端から左に道をこつて雲母坂を上ること三十六丁、途次の勝景を愛でながら四明ヶ嶽の下

八瀬村道

に出で登攀して大觀を縦にして下ると西塔に屬する千手堂に至る。八瀬村道——前記修學院村の山端から東北一里廿丁、八瀬村の長谷出（走出）から十八丁で山上の黒谷青龍寺に至る——以上の順路に依るべきである、山上の詳しきことは江若鐵道叡山驛參照。

詩仙堂

詩仙堂——修學院村一乗寺（京都市電出町橋東北二十七丁）にある、徳川氏初期の偉人石川丈山の山莊で、表に小有洞の額がある、丈山晩年こゝに隱棲し、風流三昧に餘生を樂んだ所だ、後水尾天皇の御召にも渡らじな蟬の小川の浅くとも老ひの波そふ影ぞはづかし

丈山

の一首を奉つて辭し、天皇の歡感にあづかつた有名な話しがある。

風薫る羽織は襟もつくろはず 芭蕉

金福寺——同所にある、禪宗、佛日山と號ふ、本堂に本尊正觀音、左右に毘沙門天と不動明王の像を安置してある、後丘に芭蕉庵がある、芭蕉が此の地を愛して屢々來訪した處で

うき我をさびしがらせよ 閑子鳥 芭蕉
こ吟じた舊蹟である、尙山上に蕪村の墓がある、蕪村は芭蕉の句碑を建て、

金福寺

曼殊院

林丘寺

修學院離宮
赤山禪院

松崎大黒天

妙泉寺

三宅八幡宮

我も死して碑に邊せむ 枯尾花

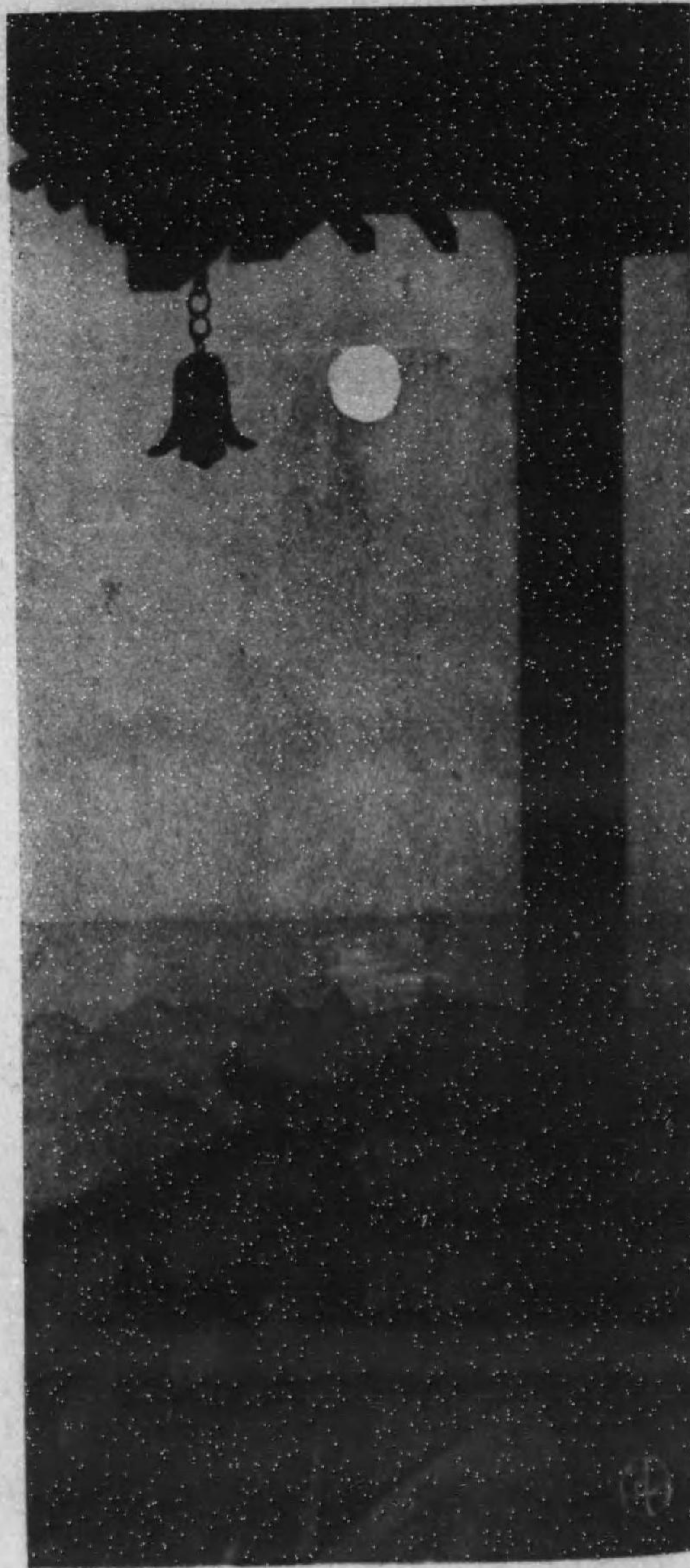
蕪村

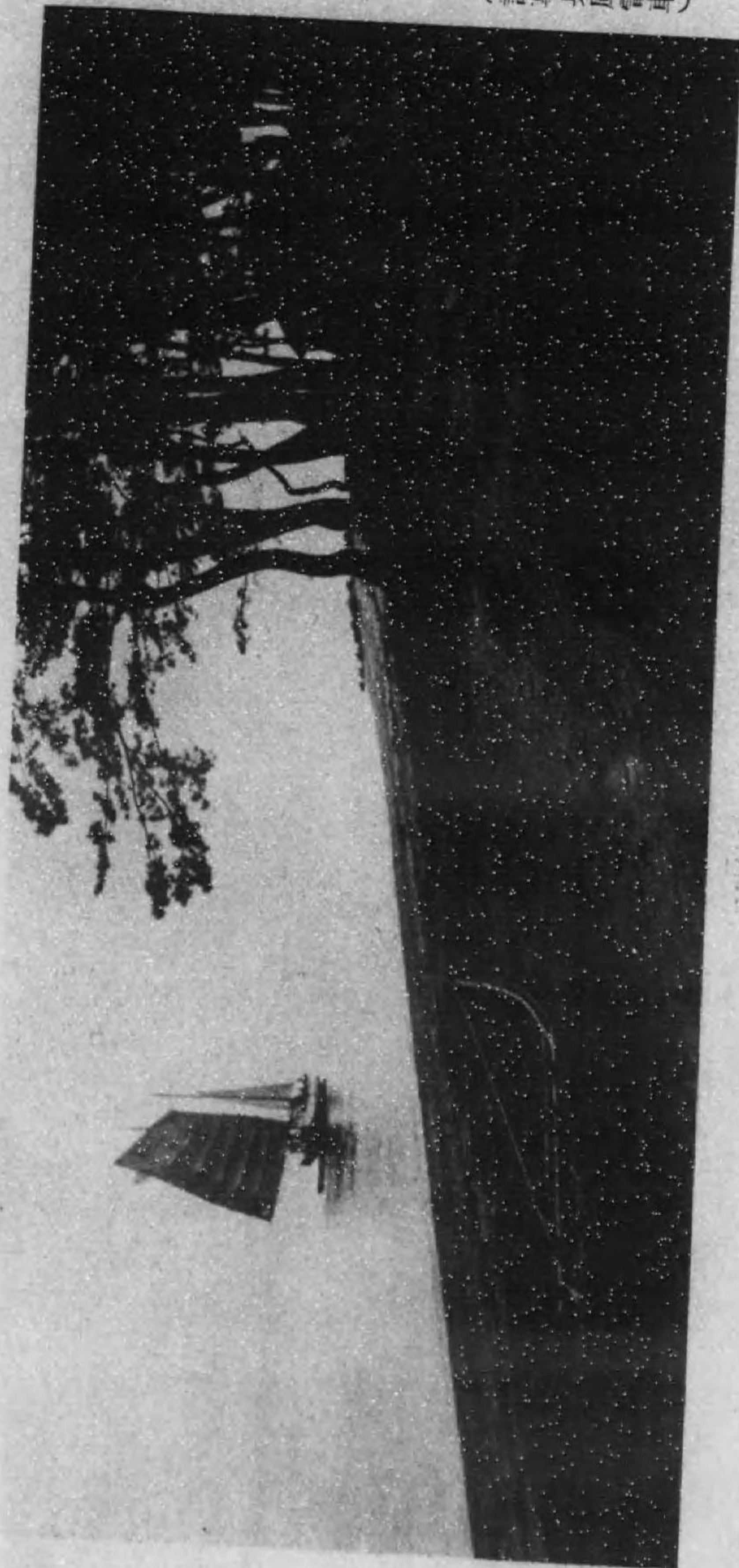
二六

と詠じて遂に此處で歿したのであるといふ。東北敷丁字竹の内に曼殊院がある、天臺宗、傳教大師の開基法親王が住持せられたことがあるので竹の内門跡の稱がある、又庭園は小堀遠州の設計に係るもので有名だ。曼殊院の北雲母坂の下に林丘寺がある、こゝは後水尾天皇の皇女が開基せられたといふので當時は音羽御所といつてゐたそう、本尊正觀音を安置してゐる、境内の望嵐亭から望んだ風景がよい。その北に修學院離宮がある、又修學院村の東方の山下に赤山禪院がある、後水尾天皇が神殿を改修せられ、赤山大明神の號を賜りしが近年に至り赤山禪院と改めたといふ。

松崎大黒天——山端の西敷丁、松崎村の東山麓にある、本涌寺といひ日蓮宗で、傳教大師作の大黒天を安んじ、甲子の日は參詣する人が多い。寺の西山下に日蓮宗の妙泉寺がある日像上人の開いた寺で、毎年八月十五六の兩夜は題目踊りといつて村人が寄り集まつて題目に節を附けて踊りをなすので本堂を俗に踊り堂といつてゐる、又十六日の夜は寺の後で有名な「妙法」の二大字を焚火で現して精進會の送り火とする。

三宅八幡宮——山端から街道筋を北に九丁、高野川に架す橋を渡つて更に五丁、道を右にさると至る應神





御蔭神社

八瀬、大原

天皇を祀る、推古天皇の朝に遣唐使が筑紫で病み、宇佐八幡宮を祈つて平癒し其の外いろく奇瑞があつたので歸朝後此處に勧請したのであるといふ。又橋を渡らずに街道に沿ふて約十丁行く高野に御蔭神社がある、下鴨神社の神が降臨せられたと傳ふる處で、御生山といひ下鴨社の攝社である。

八瀬、大原——八瀬村は御蔭神社から東北に廿丁、街道を進むと至る、大原村は八瀬村より更に東北三十丁で共に比叡山の西麓若狭街道の村落である、此邊は在原業平が當時藤原氏の勢ひ盛んで不遇に陥り給ふ文徳帝の皇子惟喬親王に心を寄せ奉り、雪中に其の幽棲を訪ねて

忘れては夢かと思ふ思ひきや雪踏み分けて君を見んとは 業平

と歎きし處にて親王の墳墓が大原村字上野の南方にある。又附近の賤女の風俗は頗る畫趣のあるもので、紺衣に紺の裾巻を纏ひ、白の手甲臙裱を穿ち、紺模様の手拭を被り、薪等を頭上に載せて數人相伴つて往來する風習がある、古來大原女といつてゐる、俗諺に「私が在所は京の田舎の片ほざり、八瀬や大原の芹生が里、世をしのぶみの姫御前の身で、つまからけ、しのぶ召ませぬかい、買はしやんせんかよ」

小原女や野分にむかふかへ帯 その女

—京都の見物—

魚山

魚山——大原の諸名區の總稱である、支那天臺山の西北に大源魚山といふがある、こゝも天臺山(叡山)の西北に當るのでその名がある、又川もそれに倣ふて音無瀧の下流の南を呂川、北を律川といふ。

三千院

往生院

羅漢橋

來迎院

音無の瀧

三千院——呂川の北にある、傳教大師の開基、天臺三門跡の一である、佛殿は慶長の頃(凡三百廿年前)に紫宸殿の舊屋を以て造られたもので、本尊藥師如來を安置してゐる、境内に粉彩爛斑たるが往生院ある、八百餘年を経たるもので、本尊は丈六の阿彌陀佛である、庭園を清涼園といひ、瀑布あり、石あり、老櫻新楓枝を交へ、極めて幽邃な所だ、又呂川の上にある石橋を羅漢橋といひ、昔此の橋の上に十六羅漢が出現したといふので名がある、附近に楓樹極めて多く秋は美しい風致を添へる。

來迎院——三千院の東二三丁にある、慈覺大師が支那の天臺山から聲明音律を傳へて歸朝し、佛堂皆それによつて建立した所で、今尙當初のものが存じ、本尊藥師佛と釋迦阿彌陀の三尊を安置してゐる、また堂前にある獅子石は、昔良忍和尚が文珠の法を修してゐると、石が獅子となつて咆哮したといはれてゐる石だ、こゝから律川を二三丁遡ると音無の瀧がある、老杉古榎繁茂して幽邃を極め途次聖應大師の五輪の大塔がある。

大原女



勝林院

勝林院——三千院の北一丁の所にある、長和二年（凡そ九百年前）寂源和尚の開基、本尊は證據の彌陀といふ有名な阿彌陀如来である、昔本尊の前で山僧覺超、偏救の二人が佛果の空、不空を論じ、不空を論ずれば本尊の相好隠れ、空を論ずれば相好を現し、其實相を證したるによる、又文治二年（凡そ七百四十年前）には、法然上人と山門の座主及其他の碩徳と本尊の前で宗旨の問答をした、これが世に大原問答といふのだ、法然が一向専修の議論のときに本尊が光を放つたので、問答は一決して座主も専修の行者となつたといふ、院の前に極樂橋がある。

叡光院

叡光院——勝林院の西十丁草生にある、弘法大師の開基、平清盛の女で、安徳帝の御生母建禮門院が平家一門の追福を祈つて作らせた所だ、本尊は地藏菩薩で、其外後白河安徳兩帝の御影と建禮門院の木像を安じてゐる、
尼寺の髪に揃はる蔵かな 希・因
謡曲大原御幸は、後白川法皇が建禮門院を大原に訪ね給ひ、過ぎし日の物語りせられたことを平家物語から取つて作つたものだ、

深泥ヶ池

「思はずも深山の奥の住居して、雲井の月をよそに見んとは。かやうに思ひ出でしに此山里までの御幸、かへすくも有難うこそ候へ。先づ頃ある人の申せしは女院は六道の有様まさに御覽じけるさかや、佛菩薩の位ならでは見給ふ事なきに不審にこそ候へ。勅遣はさる御事なれども、つらく我身を案じ見るに、それ身を觀すれば岸の額に根を離れたる草、命を論ずれば江のほごりに繫がざる舟、されば天上の樂みも、身に白露の玉かづら、ながらへ果てぬ年月もつひに五衰のおそろへの、消にもやられぬ命の中に、六道の巷に迷ひしなり。（大原御幸）」

— 鞍馬方面 —

深泥ヶ池——京都市電出町橋から北に下鴨を経て廿七丁深泥ヶ池にある、又の名を御菩薩池といひ、往昔ここから地藏菩薩が出現されたといふので其名がある、附近の地藏堂の本尊は小野篁の作で平清盛の祈願であるといふ、

名を聞けばかけたに見ゆしみころ油すむ水鳥のあるそあやしき 和泉式部
又池の蓴菜が知られてゐる、市中を酢莖はいらんかへしと賣歩く酢莖は此村の特産物で各軒別に澤山な蓴

圓通寺

が列べられてある、深泥ヶ池の東北十丁幡枝小字南庄田に圓通寺がある、大悲山と號ふ、靈元天皇の乳人
文英尼の創立せる所、本尊聖觀音を安置してある、南二丁の小丘を京見臺といふ、靈元帝遊苑の舊蹟で眺
望がよい。

實相院

實相院——圓通寺の東北十八丁、岩倉字門前にある、天臺宗、淨基僧正の開基、靈元天皇の皇子義延親王
が御住院せられた所で、今の堂宇は享保五年(凡そ二百年前)に皇居の故殿、四脚門を賜つたものであると
いふ、尙同所に大雲寺がある、天臺宗、天祿二年(凡そ九百五十年前)に圓融天皇の勅願で草創した所、冷泉
天皇の皇女昌子内親王の御歸依深かつた寺で、實相院門跡義尊大僧正の再建、今は實相院に屬してある、
本尊は十一面觀世音、鐘樓の鐘は天安二年(凡そ千六十年前)の銘がある、平安屈指の名鐘で國寶になつて
ある。

大雲寺

小町寺

小町寺——深泥ヶ池の北卅丁市原にある、小野小町の死んだ所といつて穴眼の薄や、小町塔等の面白いも
のが境内にある。地は往昔樺原野といひ、古今著聞集に「夕暮に市原野を過ぎけるに、盜人に遇ひて、き
たる物はさられ云々」とある處で、源賴光が強賊鬼童丸を斬つたのもこゝだ。

鞍馬山

鞍馬山——小町寺の北方卅餘丁、天武天皇が祈願のこゝがあつて、馬に鞍を置いたま、放ち給ふこ、駒は
此の山で留まつてゐたので、此山を鞍馬山と名稱け給ふたともいひ、樹木陰森たる處で關山が鞍馬と訛傳
したともいふ、村は俗諺に「何にも職ちやが鞍馬の職は馬に七束我身に二束、馬の手綱を手に引まこひ、
花の都へ柴賣りに」と唄はれてゐる。

鞍馬寺

鞍馬寺——は鞍馬山の中腹にある寺で、天臺宗、松尾山といひ、寶龜元年(凡そ千五百五十年前)鑑禎和尚
の開基、本尊は天降りの靈像といふ毘沙門天の立像を安置してある、今の堂は、明治四年の重建である、
全山檜杉鬱蒼として繁茂し、仁王門の北二丁に、大巳貴命を祀る由木神社がある、社殿は秀頼の再建、拜
殿は崖造りで特別建造物になつてゐる、神社の後が牛若丸の學問所であつた東光坊の跡である、神社か
ら本堂に至る八丁程の坂を九折坂といふ、枕草紙に「近くて遠きもの鞍馬のつらりをり」とある處だ、本
堂の側に常行堂、藥師堂、觀音堂等がある、本堂の後にある關伽井は開基鑑禎が法を呪して二蛇を降し一蛇
を助けて、汝この恩を感じるなれば清泉をこの山に供せよといつた、するこ忽ち清泉がこゝに湧出したこ
いはれてゐる、それに因んで毎年六月二十日を蓮華會、俗に鞍馬の竹切といひ、當所の者が本堂と西の觀

由木神社

僧正谷

音堂に集まり、本堂を近江方、觀音堂は丹波方と名稱け、一丈許りなる青竹を双方に立て互に合圖と共に竹を四段に切り由木神社の拜殿迄馳け下るもので、早く切りたる方を勝とし、これによつて妖魔を拂ふといふ、又有名な十月廿二日の火祭り是由木神社の祭典で、夜半の一時頃から神輿の渡御があつて中々壯觀を極める、僧正谷に至る途次に不動堂、牛若背比石がある、僧正谷に魔王堂、魔王大僧正の墓、妙法藏等がある、牛若が天狗から劍術を教はつたといふ所だ、附近は巖石多く老樹生ひ茂り一寸凄い趣がある、魔王堂を左に下ると敷丁にして貴船神社に出る、謠曲鞍馬天狗は牛若丸が大天狗から兵法を授かつて、平家追討の豫言を聞くことを作つたものた、中に張良と黄石公の故事を交へてある。

さやうに師匠を大事に思召すに就て、さる物語の候語つて聞かせ申し候べし、さても韓の高祖の臣下張良といふ者、黄石公に此一大事を相傳す。ある時馬上にて行きあひたりしに、何さかしたりけん左の腕を落し、いかに張良あの腕取つてはかせよといふ。安からずは思ひしかども腕を取つてはかせ。又其後以前の如く馬上にて行きあひたりしに、今度は左右の腕を落し、やあ如何に張良あの腕取つてはかせよといふ。猶やすからず思ひしかども、よし、此一大事を相傳する上はと思ひ、落ちたる腕をおつて

貴船神社

つて、張良腕を捧げつゝ張良腕を捧げつゝ馬の上なる石公に、はかせけるにぞ心こけ、兵法の奥儀を傳へける。其ごごくに和上禰も、其ごごくに和上禰も、さも花やかなる御有様にて、姿も心も荒天狗を、師匠や坊主と御賞翫は、いかにも大事を残さず傳へて、平家を討たんと思召すかや。優しの志やな。貴船神社——小町寺の北一里(前記僧正谷から下る道がある)謠曲鐵輪に通ひなれたる道の末、夜も糺のかはらぬは、思ひに沈む御泥池、生けるかひなき憂き身の、消ゆん程こや草深き、市原野邊の露分けて、月運き夜の鞍馬川、橋を過ぐれば程もなく、貴船の宮に着きにけり。さある道行の文を辿るのである、官幣中社、水神高麗神を祀る、創建年代は詳でない、神殿は白鳳六年(凡そ千二百四十年前)より文久三年(凡そ六十年前)迄の間に卅六回改造があつたといふ、社は本社と奥の宮の二ツに分れ、奥の宮は本社

愛宕山
伏見桃山
京都土産

京都の見物

こゝに鳴け馬に鞍馬のくつは蟲也有
愛宕山及伏見桃山方面は山陰本線、嵐山電車、京阪電車、其部参照。
京都土産——すはま、八ッ橋、五色豆、千枚漬、京人形、清水焼、栗田焼、京子

— 京都の見物 —

— 京都の交通 —

市内電車 — 全線賃金均一、片道七錢、往復十二錢
回数券十六回一圓、卅三回二圓、五十回三圓。
伏見線 — 區制一區四錢、二區七錢、三區十錢、回
數券廿區分八十錢、五十區分一圓五十五錢。
京津電車 — 三條大橋より大津市札ノ辻に至る。
嵐山電車 — 四條大宮より、嵐山に至る。

京阪電車 — 三條大橋より、大阪、宇治に至る。
東海道本線 — 京都驛より、東名古屋を経て東京方
面、西は大阪、神戸を経て下關方面に至る。
山陰本線 — 京都驛より、嵯峨、綾部、福知山を經
て、鳥取、大社方面に至る。
關西奈良線 — 京都より、奈良方面に至る。

▼三味線の鳴りぞめは、糸し皮いにひかされて、こつそりと忍びごま、抱いて音じめのうれ
しさも、心ざはりが出来たやら、つらい苦勞に合の手、今は顔さへ水調子、切れる下地か狂
ひ出す、本調子、胸は二上り三下り、さうぞ最一度音いるにあはして下さんせ。(端唄)

東海道本線

神戸 — 名古屋間

- 江若鐵道 大津 — 坂本間
 湖南鐵道 近江八幡 — 八日市間
 近江鐵道 彦根 — 貴生川間
 養老鐵道 大垣 — 桑名 — 榑磯間

東海道本線とは、東京より横濱、名古屋、京都、大阪を経て神戸に至る三七三哩五分をいふのである。其
間約十四時間を要し、神戸から西は山陽本線となつて下關方面に通じてゐる我國有鐵道の幹線である。
本書は略近畿を中心として、其日がへりの旅を主眼とするものであるから、西は我國の代表貿易港たる終
驛の神戸驛から筆を起し、東漸して中京の稱がある名古屋を以て區切となした(沿線の間驛でも特記す
る程の名所舊蹟のない處は之を省略する)。

— 東海道本線 —

▼神戸

(大阪驛より二十哩三分、到着時) 間約一時間、急行約四十七分)

神戸市

神戸驛は東海道本線の終點で山陽本線の起點である。

神戸市——地はもと生田神社の神戸であつたので其名がある、慶應の頃(凡そ六十年前)には民家僅に五百を數れたといふ漁村であつたが、兵庫は往昔武庫の水門といひ、古い歴史を有してゐる、神功皇后三韓征伐の水軍の本據となり、三韓より貢船が初めて入港したのも兵庫港である、清盛が造營した福原の都は今の大倉山、會下山の間の山地を中心に、東は三の宮、西は西代の邊迄の廣大な地域に當る、平家滅亡の後には兵庫も餘り振はなかつた、延元元年(凡そ五百九十年前)には足利尊氏九州より大舉して東上するを楠正成、新田義貞とに迎へ討つて、正成は湊川に戦死し、義貞は和田岬、生田の森に敗れて走つた、豊臣時代には立派な商業地となつて榮え、九州より浪速に至る要衝として船舶の出入殊に多く、江戸時代には幕府の直轄する所となり、天明八年(凡そ百四十年前)に既に人口二萬を數へてゐた、今は神戸港の大發展に連れてその繁榮の半を貢ふこととなつた、市は明治元年に神戸、走水、二ツ茶屋の三村を併せて、神

湊川神社

戸町となり、後兵庫、坂本村を加へて神戸市となり、日進月歩の勢ひを以て、隆盛の域に向ひ、大正九年には更に大擴張して、須磨町を合併し、現在の大都會となつた、地は瀬戸内海の風波の靜穩なる所に位置を占め、南は洋々たる茅渚の海に臨み、北は摩耶、再度、鷹取の諸峰峭壁の如く相連なり、武庫の海邊は東に、西は播磨と境なる須磨に亘る、我國五港の第一位を占むる大貿易港である。市内の名所案内は順序として神戸驛から記述することにする。

神戸の名所

湊川神社——神戸驛の北一丁(市電楠公前)にある、別格官幣社、楠正成公を祀る、本社の東に同夫人を祀る甘南備神社がある、今の社殿は明治四年の創建で、本社の西手から社後に廻ると楠公自刃の舊蹟といふがある、又有名な「嗚呼忠臣楠子の墓」の石碑は水戸光圀の建碑

で同公の筆である、

かしこくも君が御夢に見ゆときけは消ねん此身も何かいさはむ

吉田松陰

神戸開港以前は此邊田圃道で老松の下に光國の建てた一碑があつたのみだが今は股賑を極め昔の佛は廻はれない。

「楠が一族十三人、手の者六十餘人、(中略)、念佛十通許り同音に唱へて一度に腹をぞ切たりける、正成座上に居て、舎弟の正季に向つて、抑も最後の一念に依つて善惡の生を引くさいへり、九界の間に何か御邊の願ひなるを問ければ、正季からく「こ打笑つて七生まで唯同じ人間に生れて朝敵を滅さはやそこそ存じ候へ」と申ければ、正成よに嬉しけなる氣色にて罪業深き惡念なれ共、我も斯様に思ふ也、いざさらは同じく生を替へて此本懐を達せんと契つて、兄弟共に刺違へて同じ枕に伏にけり。(太平記)

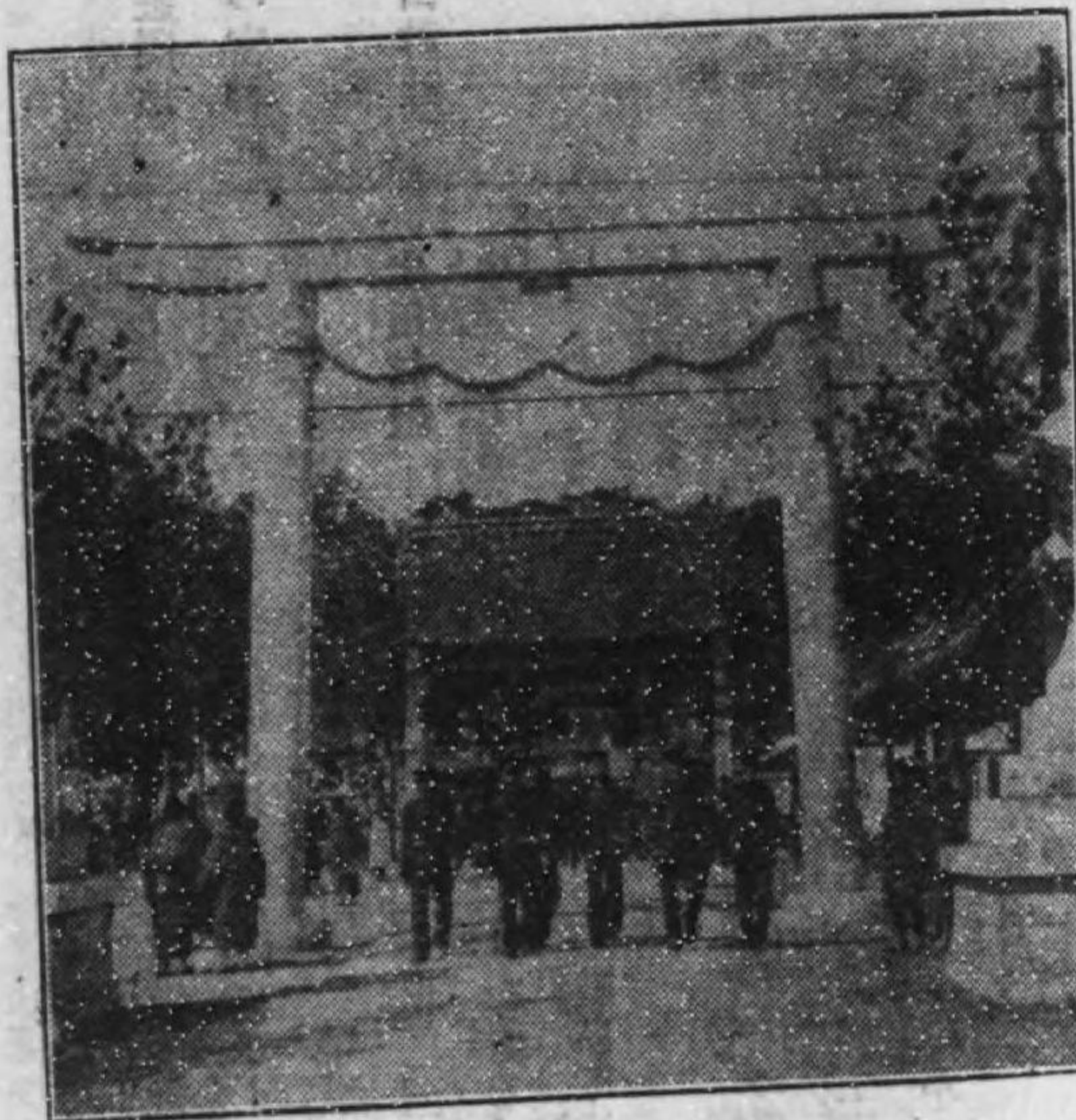
社前の多聞通を東に相生橋を渡ると元町通で其南の筋が榮町通である、元町通りは大阪に於ける心齋橋筋といつたやうな所で、小賣商店軒を並べ般盛を極めてゐる。榮町通りは當市に於る金融の中心地で銀行や會社の大建物が多し、榮町通りの南が海岸通りで、百六十餘間の石棧橋が突出してゐる邊をメリケン波止場といひ(市電榮町一丁目)港内に數十の巨船が錨を下し、内外の旅客を送迎する無數の小艇は常に同棧橋に繋留され、又絶えず蒼波を蹴つて往來する状は他で見られない所だ、海岸通りに郵船會社初め内外大小の汽船會社の洋館が並び建つてゐる。

藥港棧橋——メリケン波止場の東(市電三の宮神社前)、京橋を渡ると至る、規模の甚大なるは、追に海外

多聞通
元町通
榮町通

海岸通
メリケン波
止場

藥港棧橋



社 神 川 湊



場 止 波 戸 神

東遊園地

三の宮神社

生田神社

まで鳴り響いてゐる神戸港たゞ鎮かせる、四つの突堤に一萬噸以上の巨船が何隻をも横附にされるまでにしてある。京橋の東北三丁に東遊園地(市電瀧道)がある、松樹多く芝生の運動場やテニスコート、公設食堂等がある、東遊園地の北端を西に二丁程行くに電車道の角に三の宮神社(市電三の宮前)がある、湍津姫命を祀る、生田神社の末社で、境域に活動寫真や飲食店等が多く、日夜股賑を極めてゐる。

生田神社——三の宮社の東通りを北に三丁、下山手通り一丁目(市電中山手通り三の東南)にある、官幣中社、天照皇大神の皇妹雅日女尊を祀る、昔は社前を生田の馬場といつて左右櫻樹多く海岸まで道がついてゐたといふ、社の森は源平の戦ひや湊川合戦のさき修羅の巻となつた生田の森である、昔は晝尙暗い大森林であつたさうだ、

秋風に又こそ訪はめ津の國の生田の森の春のあけぼの 順徳天皇

昨日たに訪はむと思ひし津の國の生田の森に秋は來にけり 家隆

諸曲 籠は、生田の森の合戦に梅の枝を籠にさして戦ひ、功名を得し梶原源太の幽霊が現れて、旅僧に戦物語をするこゝを作つたものだ、

「暫らく心を鎮めて見れば、心を鎮めて見れば、所は生田なりけり。時も昔の春の梅の花盛りなり一枝手折りて籠にさせは、もこよりみやびたる若武者に、相逢ふ若木の花髪、懸くれば籠の花も源太も我さきがけにさきがけんこの心の花も梅も、散りかゝつて面白や。敵の兵之を見て、あつはれ敵よ遁すなきて、八騎が中に取り籠めらるれば、冑も打ち落さされて、大童の姿となつて、郎等三騎に後を合せ向ふ者をは、拜み打ち、又廻り合へば、車斬、蜘蛛手掛繩十文字、鶴翼飛行の秘術を盡すに見ゆる内に、夢さめて、しら／＼と夜も明くれれば、是までなりや旅人よ、暇申して花は根に、鳥は古巢に歸る夢の、鳥は古巢に歸るなり。よくよく用ひて給ひ給へ。(諸曲籠)

布引の瀧

布引の瀧——生田神社から東に加納町(瀧道)に出で、北に七丁(市電布引)、布引山の麓から溪谷に沿へる坂を迎ると雌瀧に至る、上を雄瀧、下を雌瀧といひ、源を武庫の山中に發し、末は生田川となつて海に注いでゐる、雄瀧は雌瀧の上三丁程の處にある、上流に貯水池を設け當市の水源池となつてゐる。

諏訪山

諏訪山——布引の山麓に沿ふて十餘丁(市電下山手通り四丁目の北三丁)、明治卅六年に公園とされた所だ、こゝから望むと神戸港の風光市街の屋宇を一々指點するを得べく、神戸第一の眺望地だ、

鑑山

再度山
大龍寺

多々部城趾
祥福寺

森本梅園

大倉山公園

廣巖寺

紀の海の阿波へ流る、月夜かな 宅相

の句碑がある、園内に花樹多く山腹に諏訪明神を祀る祠がある、東近に望む鑑山は明治卅六年、明治天皇神戸港内に大觀瞻式行幸の砌、記念の爲めに松苗を鑑山に植附けた處で當市の新名所である。

再度山——諏訪山麓の西側から約三十丁に大龍寺がある、眞言宗、弘法大師の開基、如意輪觀音を安じてゐる、昔弘法大師が支那に行くときに登山し、歸朝後再び登山したので此の名があるといふ、奥の堂に大師の像を安置してゐる、山頂から攝播の群山、遠く紀淡の翠巒をも望み得て頗る大觀た、赤松則實の據つた多々部城趾がその前面にある。祥福寺は諏訪山の西(市電奥平野東北三丁)にある、臨濟宗、釋迦牟尼佛を安置してゐる、寺城高燥、眺望が極めてよい、寺の東北の山腹に森本梅園がある。

大倉山公園——湊川神社の北(市電楠町三丁目北近く)にある、もも大倉男爵の別荘のあつた所、近年に公園とせられたもので、頂上に伊藤博文の銅像がある、その南麓に廣巖寺がある、俗に楠寺といふ、臨濟宗、本尊藥師佛と毘沙門天を安置してゐる、この寺で楠公の一族が自及したと傳へられてゐるが、ヤココしいものだ、寺庭に楠公墳墓の上にあつたといふ古梅がある。

湊川公園

湊川公園——湊川神社前の多聞通りを西に四丁、新開地を北に二丁(市電湊川公園)にある。楠公最後の古戦場として知られてゐる、明治四十二年に、市の公園となつた所で、勸業館がある、松樹亭々として昔の跡が残つてゐる。

「左馬頭の兵共、菊水の旗を見て、よき敵也と思ひければ、取籠めて是を討たんとしけれども、正成正季東より西へ破て通り、北より南へ追靡け、よき敵とみるをば馳並べて、組んで落ちては首をこり合ぬ敵と思ふをば、一太刀打つて懸ちらす。正成と正季と、七度合て七度分る、其心偏に左馬頭に近附、組んで討たんと思ふにあり。遂に左馬頭の五十萬騎、楠が七百餘騎に懸靡けられて、又須磨の上野の方へぞ引返しける。(中略)左馬頭、楠に追立てられて引退くを將軍見給ひて、新入替を直義討たすなご下知せられければ、吉良、石堂、高、上杉の人々六千餘騎にて、湊川の東へ懸出で、跡を切らんとぞ取り巻ける、正成正季又取つて返して此勢にかゝり、懸ては打違へて死し、懸入つては組んで落ち、三時が間に十六度迄闘ひけるに、其勢次第々々に滅びて、後は僅に七十三騎にぞ成にける。(太平記)

湊川新開地

湊川新開地——湊川公園の前(市電新開地の南北)即ち湊川の埋立地で、大小劇場、活動寫眞、飲食店等

東海道本線(神戸市)

福原遊廓
會下山梅園

軒を列べ股賑を極めてゐる、神戸熱鬧地の代表的場所だ、その東に福原遊廓がある、淡川公園から上澤通りを西に五丁程行くと、北に會下山遊園がある(市電上澤通り三丁目)兵庫、須磨の風光を望み得て頗るよい、諏訪山に次ぐ眺望地だ。

長田神社

長田神社——會下山遊園の西方(市電五番町七から北に長田橋を渡つて数丁)官幣神社、攝政元年(凡そ千七百廿年前)神功皇后の創建、事代主命を祀る、社殿壯嚴、社殿の西にある石燈籠は村上天皇が當社で雨を祈られしときに寄進されたもので高さ一丈に餘るものだ、其他多くの寶物を藏してゐる、開運の神様として毎月一日には早朝から參詣する者が多い、境内幽雅神慮な所である、附近に平家没落のとき父知盛に代つて戦死した、平知章及び其從臣監物太郎頼賢の碑がある。

來迎寺

來迎寺——新開地の南方(市電島上町)にある、俗に築島寺といひ清盛が築島を填築したとき人柱となつた松王の冥福の爲めに建立した處といひその標石もあるが、平家物語によると松王の父阿波民部重能が奉行で、人柱は中々罪業なるべしとて石面に一切經を書いて築いたといふ、それで此地を經ヶ島と名づけたとある、眞偽は論外として寺は淨土宗で本尊阿彌陀佛を安置してゐるだけは事實だ。來迎寺の西二丁(市

兵庫大佛

眞光寺

清盛塚

琵琶塚

和田岬

兵庫驛

兵庫電車

電大佛前)に兵庫大佛の「能福寺」がある、大佛は高さ三丈八尺、明治廿三年に鑄造した巨像で、經費一萬圓といふ、寺は天臺宗、傳教大師の開基、本尊藥師如來を安置してゐる。又大佛の南二丁に眞光寺がある、時宗、兩月山と號ふ、本堂に阿彌陀、觀音、勢至の三尊を安じてゐる、境内に開祖一編上人の墓及び門外に銅製の大露佛がある、眞光寺の如來といつて能福寺の大佛と共に有名なものだ。清盛塚は十三層の輪塔で眞光寺の傍にある、高さ廿六尺、清盛の遺骨を埋めた所といつてゐる。其前にある琵琶塚は、清盛の弟、經盛の子經正の墓で、經正は琵琶の名手であつたから塚の名がある。

和田岬——兵庫の南角、眞光寺の南十丁にある、神戸港の西南端に突出してゐる岬で、昔は附近に数千株の松樹があつて中々よい風光を備へ、又月の名所として知られてゐたが、今は造船所や検査所が出来て、昔の趣きは失せてしまつた、尖端に勝安房が築いた舊砲臺等がある。又前記の大佛から更に西三丁、電車道を左にさると兵庫驛に出る、山陽本線に屬する神戸市内の一驛で、ここから前記和田岬に至る支線がある又驛前に山陽線と並行して明石市に通じてゐる兵庫電車の起點がある。

市の西部長田神社より以西の地は山陽本線及び兵庫電車の部參照、摩耶山、敏馬浦方面は阪神電車及び阪

神戸みやげ
神戸の交通

神急行電車の部参照。神戸みやげ——瓦煎餅、牛肉味噌漬等。

市内電車——全線均一、片道六錢、往復十一錢。回数券十九回一圓、六十回三圓。
阪神電車——瀧道より、大阪に至る。
兵庫電車——兵庫驛前より、明石市に至る。

▼三の宮驛

(神戸驛より一哩、到着時間約三分)

神戸市の東部三の宮町にある驛で、メリケン波止場や、築港棧橋、生田神社、三の宮神社、布引の瀧等は此驛からする方が近い。次の▼灘驛は省略。

▼住吉驛

(神戸驛より五哩八分、到着時間約廿三分)

住吉神社——驛の西隣にある、表筒男他二神を祀る、大阪府の官幣大社住吉神社の元宮といふので「元住吉」の稱がある、境内に神功皇后が携けて來られた釣竿を地上に挿して置かれたのから枝葉が生じたとい

住吉神社

十善寺

岡本梅林

六甲山

ふ釣竿竹がある。驛の西北十丁に楓樹で著はれてゐる十善寺がある、詳しくは阪神急行電車御影参照。又驛から東北二十丁岡本に、岡本梅林、八幡湯等がある、同電車岡本参照。

六甲山——驛の北に連綿として、そはたつてゐる山脈がそれで、武庫、有馬の二郡に跨り一に「武庫山」ともいつてゐる、全山花崗石から成り立ち、俗説によると昔豊坂、忍熊の二皇子が神功皇后を害せんとして戻つて武内宿禰に覺坂外五人の從臣が討たれた、その兜首六級を埋めたので此の山の名があるといふのだ、最高峰は住吉より有馬温泉に通ずる坂路に當り、海拔三千尺、山上から茅渚の海、近く紀淡の海山を望んだ風光は實に絶佳である、ここから山越で有馬へ行程三里、いはゆる六甲越といふのがそれだ。福知山線生瀬、有馬及び阪神急行電車六甲参照。次の▼蘆屋驛は省略。

かざ松やうしろに笑ふ武庫の山、 鬼 貫

▼西の宮驛

(神戸驛より十一哩一分、到着時間約廿七分)

西の宮町——灘五郷の一で清酒と戎様まで知られてゐる町だ。
西の宮神社——驛の西十丁。官幣大社廣田神社驛の西北十八丁、何れも阪神電車西の宮参照。

西の宮町
西の宮神社
廣田神社

甲山
神呪寺
門戸厄神

甲山——廣田神社の北廿五丁、六甲山脈の東南に突起してゐる圓錐形の一峰がそれで、山腹に神呪寺がある。又驛の北廿五丁に日本厄除三體の一に數ねられてゐる門戸厄神がある。甲山は阪神急行西の宮北口、厄神は同線門戸参照。

▼神崎驛

(神戸驛より十五哩七分、到着時間約四十八分)

福知山線

福知山線の分岐點、神戸方面から天の橋立見物や出雲大社詣での人には此驛で乗替ねばならぬ。

▼大阪驛

(神戸驛より二十哩三分、到着時間約一時間、(急行)約四十七分)

大阪交通

大阪交通——に就ては卷頭大阪の見物の大阪驛及び大阪の交通参照。

大阪名所

大阪名所——の詳細は同じく大阪見物参照。

▼吹田驛

(大阪より四哩八分、到着時間約十三分)

大日本麥酒
吹田工場
垂水の桃林
高濱神社
瑞龍寺

大日本麥酒吹田工場——驛の前にある大建物がそれだ、醸造力一年十八萬石、朝日ビールの醸造元で、上戸黨の信仰が篤い會社だ。垂水の桃林驛より北十數丁。高濱神社驛の東南六丁。瑞龍寺高濱神社の東

南十四丁何れも北大阪電車下新庄、東吹田、豊津各停留所参照。

▼茨木驛

(大阪驛より九哩二分、到着時間約廿五分)

茨木町

茨木町——は三島郡第一の都會で郡役所や其他官署がある。永祿十一年(凡そ三百五十年前)織田信長が中川清秀を此地に封じ後片桐元元が二萬五千石を領してゐた處、城址は町の茨木小學校の邊がそれである。

茨木神社

茨木神社——驛の東七丁、茨木川に架す高橋を渡るに至る、郷社、天兒屋根命を祀る、七月十四日の例祭には神輿の渡御があつて近在の人出で賑ふ、又社後に黒井の清泉といふ名泉がある。

洗水の宮

磯良神社——洗水の宮の北十六丁西河原にある、俗に「洗水の宮」ともいふ、社頭の清泉で洗を洗ふときは知らぬ間に脱れるといふので名がある、社殿に大きな藤がある、又、社外の洗櫻は一本樹で三色の花が咲くので珍らしがられてゐる、磯良神社の東十六丁高田に繼體天皇陵がある。

繼體天皇陵
總持寺

總持寺——洗水の宮の東五丁字總持寺にある。眞言宗、補陀落山と號ふ、仁和二年(凡そ千〇三十五年前)山蔭中訥言政朝の創建、本尊千手觀音を安置してゐる。

おしなべて高きいやしき總持寺の佛の誓ひたのまぬはなし。

詠歌

西國第廿二番の靈場だ、寺傳に依るに「昔政朝の父越前守高房が太宰府へ下向の留守中、繼母の爲めに政朝(二歳)が河に投込まれしを、高房日頃念じる初瀬觀世音の利生によつて龜の爲めに救はれた、高房薨去の後その遺志を繼いで報恩の爲めに創立したのが當寺で、本尊は政朝が長谷寺に參籠して感得したといふ靈像である、又の名を子守觀音」といひ元龜元祿の火災にも燒失し給はざりしを以て「火除の觀音」といふ有難い縁起を以てある。

本照寺

普門寺
慶瑞寺
三輪神社
彌右衛門屋敷の樓

本照寺——總持寺の東十丁富田村にある、眞宗、西本願寺派、蓮如上人の父存知上人の開基、俗に「上の御祖師」といふ、本堂に安阿彌作の本尊阿彌陀佛を安置してある、堂前の富壽榮の松は、高さ四十尺、根廻り十五尺、枝東西百五十三尺、東北百尺といふデカイ松で「ごんご富田の本照寺さまのお廣いお庭のひらき松」と村童に唄はれてゐる。尙同所に臨濟宗の古刹普門寺。後水尾天皇の御念持佛の觀世音を安置して居る慶瑞寺。大物主命を祀る三輪神社等がある。富田村から次驛の高槻町迄は東北一里である。彌右衛門屋敷の樓——驛の東一里十丁、淀川の北岸唐崎にある堤の樓で、地は彌右衛門といふ者の屋敷跡といふので其名がある、數十株の櫻は牡丹櫻で可成の古木だ、便が悪いので餘り人に知られてゐないがそ

藤原鎌足の古墳

ここに別な趣があつてよい、京阪電車枚方参照。
藤原鎌足の古墳——驛の北方廿七丁宇安威にある、方三町許りの一堆の丘で、石籠露はれたるをいふ、俗に將軍山といひ、藤原鎌足の遺骸を葬つた處だ、後鎌足の長子定慧が唐から歸朝して大和多武峰に改葬した、それが今の談山神社である。

▼高槻驛 (大阪驛より十七哩三分、到着時間約三十六分)

高槻町野見神社

高槻町——驛の東南、永井氏三萬五千石の舊城下で、城址は町の中央にある、城内に式内の古社野見神社及び附近に第四師團工兵第四大隊の兵舎がある。

笠の森神社

笠の森神社——驛の西北十丁にある、境内に二大老樹の枝葉が笠の如くに繁つてゐるので笠森の名がある、宇賀御魂を祀る社で、皮膚病一切に靈驗著しとて詣る人が多い、附近の芥川は、在原業平と二條后の斷落ちで知られてゐる、

鳥帽子着た川越しを見る芥川
川柳
足弱をまめな男がつれて逃げ

安岡寺

安岡寺——驛の西北廿三丁字浦堂にある。光仁天皇の皇子開成皇子の開基、今は衰廢を極めてゐる、本堂の背後の丘上に磐若塚がある。

神峯山寺

神峯山寺——安岡寺の北一里餘丁、神峯山上にある、天臺宗、文武天皇元年（凡そ千二百二十年）役行者の草創、本尊毘沙門天の靈像を安置してゐる、本堂、香爐堂、法華塔、阿伽井、開山堂、菩提樹、九頭龍の瀧等がある、寺傳に昔役行者が葛城山から瑞雲を認め、常山に來り給ひければ九頭龍の瀧から天童が現れ、吾汝を待つこと久しとて靈木を以て毘沙門天の尊像四體を刻み、行者に與へて虚空に上らせ給ふ、行者喜び敬ひ、四體の靈像に佛法の不滅の靈地と靈驗の顯たかなるを祈り給ふ、そのとき靈像忽ち赫々たる光明を放ち、一體は信貴山に、一體は鞍馬山、一體は當寺の奥の院本山寺に飛び去り、残りし一番最初に彫まれた一體を神峯山に安置すこある。

本山寺

本山寺——神峯山の北方、山麓大字原より三千丁にある、神峯山寺と同じく行者の開基で、神峯山の奥の院になつてゐる、寶龜五年（凡そ千五百五十年前）開成皇子が大般若經の各一字を一石毎に刻して納められたといふ古刹で、本堂に本尊毘沙門天像を安置し其他開山堂、鐘樓、首無地藏、五色魚池及び五丁奥に五色の瀧

伊勢寺

がある。

伊勢寺——驛の北十丁、古曾部の高丘にある、曹洞宗、本尊聖觀音を安置してゐる、伊勢物語伊勢集等有著はした才媛伊勢姫がここに草庵を結んで世を避けられたといふ、その姫の古廟が本堂の西にある。

能因法師の墓

能因法師の墓——同じく古曾部にある、本名は古曾部入道といひ、能因とは世を避ける名で、幼時より歌道に志、その精致を極めしこは人の知る處、

能因

我宿は梢の夏になる時は生駒の山ぞ見ゆすなりゆく、
都をは霞と共に立ちしかと秋風ぞ吹く白河の關

金龍寺

金龍寺——伊勢寺の北十丁字成合の山腹にある、天臺宗、延暦の頃（凡そ千百二十年前）參議阿部是雄の創建、僧千觀の中興で、本堂の西南に金龍が昇天したと傳へらる遊瀆の池がある。後の山は金龍寺山といつて松茸の名産地、又見晴らしがよいので知られてゐる、

たまさかに見るたにさびし世の常の雪のみやまを思ひこそすれ。 千 觀

山崎驛

（大阪驛より十八哩、到着時間約四十八分）

山崎古戰場

山崎古戰場——驛の附近をいふ、今の大山崎は即ち昔の山崎郷で、天王山、男山相對峙し、前に淀川の清流を控へ、地勢宛然袋の口の如く、山城の關門をなし、要害無双、古來有名な古戰場である。

離宮八幡宮

離宮八幡宮——驛の近くにある、貞觀元年（凡そ千〇六十年前）僧行教が豐前宇佐から勸請した社で、祭神は男山八幡と同じである、地はもと離宮のあつた跡で其の名がある、秀頼や家光が修築した社殿は元治年間長州藩士騒亂の兵火に罹り、今のは明治十二年の新造で、僅に往昔の面影を留むるのみだ。

水無瀬宮

水無瀬宮——驛の西南十三丁廣瀬にある、官幣中社、後鳥羽、土御門、順徳の三帝を祀る、地は惟喬親王や後鳥羽天皇の離宮跡で、増鏡に「水無瀬といふ所に、何もいはずおもしろき院づくりしてしばし通ひおはしましつゝ、春秋の花紅葉につけても云々」とある處、社は明治六年の創建、後水尾天皇が行幸せられたといふ茶室が保存されてある。

年を経て見しも昔になりけり里はみなせの秋の夜の月
みなせ山せき入れし瀬の秋の月おもひ出づるも涙なりけり

家 隆 親

櫻井の驛

櫻井の驛——水無瀬の西南七丁、延元元年（凡そ五百九十年前）楠正成が淡川に出陣の際、其子正行に

遺訓して訣別されたといふ名高い所で、子別れの松と稱する古木と傍に「楠公訣見所」の木標が立て、あ
る、楠正成が正行に「獅子子を産で三日を経る時、數千丈の石壁より是を擲、其子獅子の機分あれば敢
へざるに中より跳返りて、死する事を得ずといへり、況んや汝已に十歳に餘りぬ、一言耳に留まらば我
教誡に違ふこと勿れ、今度の合戦天下の安否と思ふ間、今生にて汝が顔を見ん事はを限りと思ふ也。正成
已に討ち死すに聞きなほ、天下は必ず將軍の代に成ぬと心得べし。然りと云へ共、一旦の身命を助からん
爲に多年の忠烈を失ひ、降人に出る事有るべからず。一族若黨の一人も死残つてあらん程は、金剛山の
邊に引籠つて、敵寄せ來らば命を養由が矢さきに懸て、義を紀信が忠に比すべし、是ぞ汝が第一の孝行な
らんすると云々」と遺訓したことが太平記に見えて居る。

撫子にかゝる涙や楠の露
芭蕉

君の爲め散れと散へておのれまづ嵐にむかふ櫻井の里
常 方

妙喜庵——驛より一丁、天王山の山麓にある、山崎宗鑑幽居の跡、天正年間、豊臣秀吉寶積寺を本營とせ
る時、こゝに來て千利休が獻する茶を飲んだといふ舊蹟である、本尊十一面觀音を安置してある。

妙喜庵

天王山

天王山——驛の北がそれた、山城の西南に屹立し、淀川を挟んで男山と相對峙してゐる、山頂に福園祠(酒解神社)があるので天王山といふのだ、元弘建武(凡そ五百九十年前)の頃には赤松一族が義兵を擧げ、文明年間(凡そ四百五十年前)には山名氏が城を築き、天正十年(凡そ三百四十年前)には豊臣秀吉と明智光秀が合戦の勝敗は此山の得失にあると互に争つたこと等は史上に名高い、又維新の際には筑後の志士眞木保臣、長門の志士久坂通武等が會津や桑名の兵と京師に戦ひ、破れて観音寺に屯し、更に其追撃を受け、衆寡敵せず終に山上で自及したことは人の知る處、山頂から望むと淀川の清流は脚下に、東に京都、西に大阪方面の平野を望む、眺望頗る壯觀を極めてゐる、山頂に秀吉の旗立松や眞木保臣等十七名の殉難の招魂碑等と、酒解神社、東山腹に觀音寺、西山腹に寶寺がある。

寶寺——驛の北五丁、天王山の半腹にある、眞言宗、寶積寺と號ふ、聖武天皇の本願で、神龜四年(凡そ千二百年前)行基の開基、本尊十一面觀音を安置してゐる、三層塔と二王門、鎮守社等がある、寺に龍神が獻納したといふ打出の小槌といふがあるので俗に「寶寺」といふのだ、

川柳に——龍宮は何んぞか土産くれること。

寶寺

觀音寺

酒解神社

柳谷觀音

長岡天満宮

打出の小槌といへば大黒さんの専有物だが堺邊の龍神から大黒さんが持つて來たものではなからうかこは入らぬ御世話の蒲焼きさ、兎に角福徳を授かるといふので參詣者が多い。

觀音寺——寶寺の東北三丁、天王山の東山腹にある、妙香山と號ふ、本尊の觀音は行基が山崎に橋を架すとき祈願の爲めに自ら彫したもので、俗に「橋懸觀音」といはれてゐる、又聖天祠に安置せる觀喜天は靈驗顯著なりといつて遠近から參詣する人が多い、其他祖堂、浴池等がある。

酒解神社——天王山の絶頂にある、素盞鳴尊及其御子八王子を祀る式内の古社で、松杉繁茂幽雅な所である、山から峰つたひで柳谷へ出られる、冊餘丁。

柳谷觀音——驛より西北一里半淨土谷字柳谷にある、本名を柳谷寺と號ひ、大同元年(凡そ千百年前)京都清水寺の延鎮僧都が靈夢を受け、柳樹の繁茂せる溪間を過つて此處に來り、觀音の尊像を得て草創した處、本堂に本尊千手觀音と脇士に毘沙門天、將軍地藏を安じてゐる、境内に阿彌陀堂、護摩堂、楊柳水、觀音鉢水等がある、楊柳水は弘法大師が此山を跋涉して湧泉を尋ね、加持修法せられたものである、古來限りに靈驗著しとて遠近から參詣する人が多い。

粟生光明寺
乙訓寺

長岡天満宮——驛の東北一里、開田字長岡にある、菅原道真公を祀る、昌泰四年（凡そ千二十年前）菅公左遷の砌、某別れを惜しみて淀より鵜殿の邊迄送りしとき、菅公自ら姿を寫し之を授け給ふものを、薨去の後祠を營んで祀つたのである、社前の池の周圍には楓樹、榊等多く頗る風致がよい、こゝから粟生光明寺へは西北十八丁、乙訓寺へは北十丁餘であるが次驛向日町驛の項に説くことにする。

向神社

▼向日町驛（大阪驛より二十二哩七分、到着時間約一時間）

向神社——驛の南十六丁、向日町字勝山にある、養老二年（凡そ千二百年前）額座、神武天皇を祀る、今の社殿は應永廿五年（凡そ五百年前）の再建、特別保護建造物で壯嚴なるものだ、櫻楓多く春秋ともに美しい夕つく日むかひ山のうす紅葉またき淋しき秋の色かな 定家卿

影このみ頼むかひありて露霜に雨かはりせぬ神のみやしろ（土佐日記）

又地名は秀吉が征障の砌、此社に詣で地名を尋ねしに、宮司が故らに勝山と答へしに秀吉悦び終に地名をなせしといふ。

乙訓寺——向神社の西南十丁、今里にある、推古天皇の勅願所、聖德太子の開基、眞言宗、本尊合體大師



音 觀 谷 柳



寺 音 觀

を安じてゐる、合體大師といふのは弘法大師が此寺に在住のとき、八幡大菩薩の像を影まんとせしに菩薩老翁と成つて現れ給ひ、汝は八幡大菩薩の首を作れ我れは大師の支體を作らんと約して分れ給ひ、日を經ずして出來上りたる、首と支體を合せしに不思議にもキチンと合つた、それが今の本尊の緣起である又桓武帝の太子とられた光仁帝の第五皇子早良親王が故あつて人をして藤原種繼を殺さしめ給ふにより、太子を廢せられて此寺に幽閉せられ給ふた舊蹟である。

粟生光明寺

粟生光明寺——向神社から乙訓寺に至る手前の道を左にこると粟生に出る(向神社から西南十八丁)、淨土宗西山派の總本山、報國山と號ひ、念佛三昧院とも稱ふ、建久九年(凡そ七百卅年前)熊谷蓮生坊(直實)の草創、其師法然上人を開基とす、法然上人滅後十六年、叡山の衆徒念佛宗を嫉み、大谷なる上人の墓を開かんとするを聞いた徒弟等が竊に石棺を他に移せしに、石棺より數條の光明が輝いて此處を射たので當山に於て茶毘し、その舍利を拾ふて廟を建立し、四條天皇より光明寺の號を賜ふといふ緣起をもつてゐる、本堂に圓光大師自作の彌張の座像、俗に張坂の御影といふ、其他蓮生坊、普導大師、各自作の像を安じてゐる、觀音堂、阿彌陀堂、宗祖廟、勢至堂、方丈、講堂、熊谷櫻、龍燈の松等がある。

乙訓神社

乙訓神社——向神社の西南九丁、井ノ内にある、式内の古社で、火雷神を祀る、「角宮」ともいひ、延暦遷都の當時は松尾神社と相比びたる大社であつたといふ。

十輪寺

十輪寺——乙訓神社の西廿七丁小鹽にある(光明寺から西北廿五丁)、小鹽山と號ひ、天台宗延暦寺に屬してゐる、花山天皇が卅三所順禮の初めに詣で給ふにより本尊を「禪衣觀音」といはれ、地藏尊は染殿皇后が安産祈願の爲めに作られたものであるといふ、本堂は構造の奇巧で著られてゐる。鹽釜の遺跡は本堂の西山上で在平業平が難波の海水を取寄せて鹽を焼かしめたと傳ふる處だ。

善峯寺

善峯寺——十輪寺の西南十二丁大原野小鹽の山腹にある、天台宗、長元二年(凡そ七百九十年前)源美上人が七晝夜石上に座禪して遂に當山を開いた處、座禪石は坂路七曲りの中程にある、本尊は加茂の神木で刻んだといふ千手觀世音の靈像で、西國第廿番の札所である。

野をもすぎ山路に向ふ雨の空、よしみねよりは晴る、夕立

詠歌

樓門、本堂、經堂、多寶塔、開山堂、阿彌陀堂、釋迦堂、藥師堂等がある、中世法親王が御入室せられてゐたので西山御所と稱してゐた。

三鈷寺

わきてなほ紅葉の色や深からむ、都の西の秋の山里、

慈道法親王

三鈷寺——善峰寺の北二丁にある、長久三年（凡そ八百九十年前）源算上人の開基、當山の三峰即ち三鈷に似てゐるので寺の名がある、應保元年（凡そ七百六十年前）觀性法橋の中興、本尊は中興が自ら淨布を懸りそれに佛眼曼陀羅を描いたのを安じてゐる、又方丈に安じてゐる阿彌陀如來を俗に「抱止如來」といひ、宇都宮入道が生身の如來を拜せん常に祈願せしに、或日佛前に冥目し念誦せるとき紫雲中に彌陀三尊二十五菩薩の尊像を認め、名殘惜さに抱き留めて見るに日頃信する阿彌陀如來の像であつたといふ緣起だ。

金藏寺

金藏寺——三鈷寺の北方十五丁、坂本より更に五六丁登つた所にある、西岩倉山と號ひ、養老二年（凡そ千二百年前）隆善禪師の開基、元正天皇の勅願所で、神龜四年（凡そ千九百九十年前）金藏寺の扁額を賜ふ處、延暦遷都のとき勅して平安京四方の靈地を相し、法華經を納め給ふ時の一で、今は天臺宗となり延暦寺に屬してゐる、本堂に向日明神の作といふ千手千眼觀音と脇土廿八部衆を安じてゐる、其他二王門、護摩堂、客殿、開山堂等本堂の東山中にある經塚は、往昔法華經を納めし處といふ、附近に岩倉瀧がある。

大原野神社

大原野神社——驛の西方一里半（三鈷寺の東北廿七丁）、（金藏寺の東北廿二丁）大原野村南條、小鹽山の麓にある、桓武天皇遷都の時、春日神社が遠隔なるにより此處に勧請せしともいひ、藤原冬嗣が上奏して平安城の守護の爲め勸請するともいふ、官幣中社、祭神は春日社と同じく武甕槌命以下四柱で、中世は廿二社の内に列し、一條天皇以下歴代の行幸せられた古社である、老松古杉神苑に繁茂し、頗る神嚴を極め、若宮の前に池水あり花木點綴して又風致がよい。

花の寺

花の寺——大原野神社の西三丁、本名を勝持寺といふ、天臺宗、白鳳八年（凡そ千二百四十年前）役小角の開基、本堂に傳教大師作の本尊藥師佛を安じてゐる。其他護摩堂、西行庵等がある、今の堂は天正年間（凡そ二百四十年前）の再建であるが仁王門だけは應仁の兵火にのがれ、仁壽年間（凡そ千七十年前）の舊構で葺葺屋根の異つたものだ、金剛力士は運慶湛慶の作であるといふ、

露の玉きゆれば又もあるものをたのみなきは吾身なりけり 西行
北面の武士佐藤義清が一首を残して出家し西行法師となつて隱遁した最初の地たそうな、櫻は名に稱するだけあつて境内凡て櫻である、

花にさむれつ、人の來るのみぞ、あたら櫻のさがにぞありける。 西行